

---

# 定食屋の息子と深窓のお嬢さん

新木吾妻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

定食屋の息子と深窓のお嬢さん

### 【Nコード】

N3842C

### 【作者名】

新木吾妻

### 【あらすじ】

古い定食屋、その息子として店を手伝い、怠惰なだけの生活を送っていた俺。突然バイトとして現れた彼女。二人は育み、育まれていく。

## 第一話

「恭介ー、そろそろ手伝いに降りてきなー」

階下からお袋のでかい声が聞こえてきた。

「タイムアップだね、恭介」

「頑張つて」

「はあ…」

俺は二人の言葉にため息をつきながら階段を降りて行く。

エプロンを着けて土間に下りると、まだピーク前だということにたくさんさんの常連客で賑わっていた。

俺は藤村恭介<sup>ふじむらぎょうすけ</sup>、ここ藤村食堂のひとり息子だ。

「おお、恭ちゃん、いつも感心だね」

「ああ、まいどごつも」

常連に挨拶を済ませて厨房に入る、そこはすでに戦場だった。親父とお袋、二人で様々な料理に取り掛かっていてかなり忙しそうだ。

「恭介、上がったのから出して行って、右から源さん、徳ちゃん、市原さん、永井くん、宮田くんだよ、全部大盛りね」

「はいよ」

言われた通りにご飯と味噌汁をよそって出来上がっていた料理と一緒にテーブルに運ぶ。

店での俺の役割はだいたいこれだった、料理は出来るがまだまだ両親には敵わずもっぱら使えばしりだ。

「お待ちどうさん」

「ありがとう、恭ちゃん」

狭い店内にひしめきあう常連客、港と工業団地に挟まれたこの店は有難い事に連日大盛況だ。

俺はまだ高校二年だが毎日店を手伝っている、常連には恭ちゃんの愛称で親しまれる程だ。

大変なのは分かるが部活をしたり友達と遊んだり出来ない。

恋愛なんかはもっての他だ。

.....

「俺の青春を返せー！」

「なに店の中で恥ずかしいこと叫んでんのよ、バカ恭介」

つい口に出してしまっていた、きついツッコミをしてきたのはさっきまで一緒に俺の部屋に居た幼馴染み達だった。

「僕達は帰るよ、じゃあね」

コイツは隣に住んでる土屋義人<sup>つちやよしひと</sup>、さっき俺をバカ呼ばわりしたのは桂由<sup>かづゆい</sup>、コイツも逆隣に住んでる。

二人とも幼稚園の頃からの腐れ縁、今行ってる高校も同じだ。

「こんばんはー」

義人達と入れ替わりにまた常連が来店してきた。

「らっしやい」

もはや条件反射である。

高校二年と言えば一番楽しい時期なのではないだろうか…  
現に俺の幼馴染みsは遊びに部活に忙しそうだ。

「恭ちゃん、おかわり」

「あいよ〜」

ダッシュで大盛りおかわりを配達する。

由は友達に囲まれていつも忙しそうに遊びに出かけて行くし。義人も水泳部に精を出して、いつも忙しく、それでも楽しそうな毎日を送っている様に見える。

「恭介、サバミソ定あがったよ」

「あいよ」

これまたダッシュでテーブルに配達する。

それにくらべて俺は学校以外は毎日家の手伝いだ。中学の時にじいちゃんが引退して忙しくなったのは分かる。でもそのお陰で遊びや部活…ほとんど無しやっちゅうねん…

「恭ちゃん、ビールおかわり」

「……あいよ」

冷蔵庫からビールを持って高速で配達する。

だいたいこの料金設定はおかしいんだ！  
こたわりだからって、全部の定食が五百円以下なんて今時有り得ないだろ？

そりゃ客も来るわ！  
バイトも雇えんわ！

俺の小遣いも上がらんわ！

「恭ちゃ〜ん、こっちウーロンハイおかわり〜」

「だあ〜、おちおち考え事も出来やしねえ！」

「お客さんに向かってなんて事言ってるんだい！」

ひゅん

カーン

「いで」

厨房からフライパンが飛んできた？

「ありあした〜」

本日最後のお客を見送る、ちなみに今のは『ありがとうございまして』の最上級と思って頂きたい。

現在10時半、のれんをしまつと俺達家族は遅い晩ご飯をとる。

「いただきます」

全身くたくたで腹ペコだ、ほぼ俺ひとりで配膳しているのだから当たり前前だ。

「ねえ、いい加減バイトを雇おうよ、俺ひとりは無理があるって  
もう挨拶のように何度も訊いた質問だ、返答はいつも『ウチはぎり  
ぎりまで安くでやってるから無理』と言われてる。」

「それなんだけどね…実は週末から来てもらう事になったのよ」

「だよね…別に無理にって訳じゃないんだけどさ……えっ？」

訊き間違えか？お袋が冗談を言う筈がない。

「本当だ恭介、週末からバイトを雇う事になった」

俺の心情を察してか、さつきから黙っていた親父が言う。

「募集した訳じゃないんだけど、どうしてもウチでバイトしたいっ  
てコが来てねえ、大した時給は払えないよって言っても、是非って  
言われちゃってねえ……」

「……………」

コ…子…娘…女の子…

「若いひと？」

「若い…お前と変わらんだろう…しかも中々かわいらしいお嬢さん  
だったぞ……」

なぜか親父がおかずのアジフライを構えながらかつこよくニヤリと  
言う。

「うほっ」

二重の嬉しさに妙な奇声を上げてしまう。

「変な気起こすんじゃないよ、いつでも厨房からフライパンぶん投げるかね！あんたも余計な事言うんじゃないよ！」

くわっとお袋が激昂する、はっきり言ってもものすごい怖い。

俺も親父も黙ってしまう。

さすがは男だらけのいかつい常連客を毎日相手にしているだけの事はある。

「とにかくそういう事だからよろしくね恭介」

「…あ…ああ、わかったよ」

平静を装うが頭の中に拡がる妄想…もとい期待を抑える事が出来なかった。

そう、出会う前の彼女に馬鹿な下心を抱くだけだった。

顔も…

名前も…

彼女の心の傷痕も知らないくせに…

## 第二話

目の前には無駄にはだけた格好の女。

俺は躊躇う事なく包まっているタオルケットをふん掴む。

「おら！起きんかい！」

叫びながらおもいつきり引っ張ってやる、きりもみ回転しながら壁に激突する由。

「痛い」

悶絶する由、恨めしそうに見てくる。

ちよつと笑える。

「恭介、もう少し優しく起こしてよ！空襲でも来たのかと思ったじやん！」

「んなもん来るか！さつさと来いよ、義人はもう行ってるぞ！ほら早く着替える！」

「急かさないでよ、まだ時間余裕あるじゃんさ」

もぞもぞするだけで布団から出ようとしない由。

「まだ遅刻はしないが飯が冷める、実力行使するぞ、はいバンザイ」

素直に言う通りにする由、俺はやはり躊躇無しで寝間着をひっぺが

す。

ほとんど産まれた時からの付き合いのコイツは妹…いや弟にしか思えない。

おまけに胸なんてぺったんこだし、どう見ても小学生体型の由に欲情なんか少しもしない。

「よし、寝癖は後で直せ、行くぞ」

制服に着替えさせ、ショートのを大爆発させた由をずると隣の我が家に引き摺って行く。

「おはよう、二人とも」

既に用意してある朝食の前には制服姿の義人が居た、俺達三人は毎日一緒に朝食を摂る。

義人は両親とも海外赴任で不在の為、由は父子家庭で夜勤の父親はまだ寝ている為だ。

「……いただきます」「」

俺の作った朝食をみんなで食べ始める。

ちなみに俺の親達は市場に仕入れに行っている。

「今日で一学期も終わりだね」

由がニコニコと嬉しそうに言う。

「お前に夏休みなぞ無い、補習王」

「うう、恭介だってお店の手伝いだらけじゃんさ」

由の言うように学校は今日までで明日から夏休みに入る、そして俺が店の手伝いだらけつても間違いない…

今までの夏休みも手伝い漬けばかりで、まともな休みを満喫した事なんてなかったが今年は違う。

「ふっ、労働の素晴らしさを知らないガキめ、課題漬けになるがいわ」

「あれ…珍しいね恭介、やけに余裕だね」

俺の反応が珍しいらしく義人が意外そうな顔で訊いてくる。

鈍感でガキな由は俺の言葉に膨れている。

「よく訊いてくれたな義人くん、出逢いは突然、そして必然なんだよ、ハッハッハ」

二人して頭に疑問符を浮かべたような顔になる、面白いので新しくバイトが入るのは黙っておく事にした。

せいぜい度肝を抜かれるがいわ。

久住ヶ丘高校…

俺達の通っている学校だ。

「おはよう、みんな」

2年B組の教室に入るといつものように由が真っ先にクラスメイトに挨拶する。

俺達三人はお決まりの如く同じクラスだ。

「由ちゃん達おはよ」

クラスメイト達が挨拶を返す。

すぐさま由を交えて夏休みの予定で盛り上がるクラスメイト達、由は人当たりのいい性格の為かクラスでも一番の中心人物だ。

「海に行こうよ、由ちゃん、つつちーと藤村も」

由と仲のいいクラスメイトが楽しそうに言う、つつちーは義人の事、土屋だからつつちー。

「えっ…うん」

俺の方を申し訳なさそうに見る義人。  
一方行きたい行きたいと騒ぎだす由。

俺は分かっている、義人はもろに気を使うが由も分かっている騒いでいる、俺に気を遣わせない為だ。

「いいじゃん、俺は無理だけど義人は行きたいみたいだぞ」

だから言ってる。

そりゃ俺だつて行きたい、でも由の様な幼馴染みのせいだろうか…  
どうしても兄の様な気持ちになつてしまう。

楽しんで来いよ。

はっきり言つて店の手伝いは好きでやつてる事だし、小学校から続けて  
いている事だ。  
今さら気を遣つてくれる幼馴染み達を嬉しく思うだけ。

「恭介…」

不安そうに俺を見る義人。

「俺も定休日なら行けるし大丈夫だから気遣うな…怒るぞ」

「…そうだったね、わかつたよ恭介」

笑顔で言ってくれる義人。

俺が店の手伝いに追われ、遊びにも行けず、やりたい事も出来ない。  
それでも卑屈にならなかつたのはコイツや由のお陰だと思つ。

「あはははは、弱えなあゝ、よっし〜は〜」

「だって由は反則ばかりじゃないか」

放課後、一学期最後の学校を終え、俺の部屋に集まっていた。

義人と由は格闘ゲームをやっている、ちなみに俺の部屋にはテレビはあるがゲーム機は無い、由持ち込みだ。

自分の部屋でやれ。

「反則じゃないよ、これはテクニクだよ」

「浮かされたら拾われまくってHPが瀕死になるなんて面白くないよ、僕はいいから恭介とやりなよ」

そう言われた由が俺に向き直る。

「却下！」

由が口を開く前に言い放つ、ぶーっと頬を膨らませる由。

だから自分の部屋でやれ。

「ねえ、夏休みさあ、今年はどこに行こうか」

ゲームの電源を落としながら、俺の顔を自信無さそうに覗いて言う由。

「ああ、そろそろ予定を立てておかないとね、宿の予約とかもあるし」

義人も由と同じ様な顔で俺を覗き見て言う。

そこで俺もピンと来る、俺達三人は夏休みや冬休みなどの長い休みを利用して三人で泊まりで遊びに行くのが年中行事の様になっていた。

「そうだな、よし、今年も由が計画立ててくれよ、盆休みまで待たしちまうけどな」

「う、うん！まかせて！」

途端に花が咲いた様に明るくなる由、義人も嬉しそうだ。

盆休みならしっかり取れるだろう、気を遣っている二人に自信を持って言うてやる。

今年も楽しい夏休みになりそうだ。

### 第三話

夏休み最初の土曜日、開店前の店内。

俺は固まっていた。

目の前には今日からバイトに入る事になったひとが立っている。

整った綺麗な顔に背中を覆い尽すサラサラの長い髪。

真っ白のワンピースが少し高めの身長でスラッとした彼女にすごく良く似合っている。

……お嬢様だ。

誰がどう見ても第一印象はお嬢様だ。

とてもこんな場末の定食屋には似つかわしくないお嬢様だ。

「品川有紗しながわありなです、よろしくお願ひします」

俺に向き合って、ぺこりと頭を下げしてくれる彼女、長い髪が遅れてサラサラッと降りて行く。

ほのかに香ってくるいい匂いにクラッときた。

「はひ、こ、こちらこそ、ここの長男の恭介です」

「はい、恭介さん」

顔を上げ、にこっと微笑んでくれる。

おお？

彼女の背後に青空が！

草原が！

花園が！

湖畔が！

アフタヌーンティーが！

セバスチャンが！

ぺしぺし

「お〜い、馬鹿息子、帰って来〜い」

お袋が俺の頬をはたきながら覗きこんでいた、なんかとっても可哀想な物を見た様な顔をしてる。

「うわあ〜、何だよ、お袋〜」

「うわあ〜じゃないよ、開店準備するから教えてあげな」

お袋はそう言って厨房に行ってしまった、まだ下拵え中らしい。

品川さんを見てみると、じっと待っていてくれている。

綺麗だ…まさに掃き溜めに鶴だ。

「品川さん、学生？」

テーブルを並べ直しながら話し掛けてみる。

「はい、清海の三年生です」

俺の並べたテーブルを拭きながら答えてくれる品川さん。

「一つ年上かあ…って清海女子？」

はい、とあっさり言われてしまう。

隣町の清海女子学園。

進学率99%のブルジョワお嬢様学校だ。俺の行ってるクズ校（久住ヶ丘高校）も一応進学校だが遠く及ばない。

「…じゃあ受験生じゃないの？」

「いえ、進学は予定していません」

これまた、あっけらかんと言つてのける品川さん。

成績いいだろうに実にもつたいない。  
まあ色々事情があるのかも知れん。

「ふ〜ん、あとさ、年下だし、俺には敬語要らないよ？」

「あ、いえ、失礼ですし…私、碎けて話す事が出来ないんです」

今、『わたし』じゃなくて『わたくし』って言った！  
しかも丁寧な言葉しか話せないってよ？

正真正銘のお嬢様確定！

「いらっしゃいませ」

「……………」

開店して少しした頃、来店して来た常連の永井さん、入るなり品川さんの挨拶で絶句してる。

一度外に出て店の看板を確認する永井さん。

「……ここ、藤村食堂だよな？」

何やら自信無さそうに言う永井さん。

当たり前である。

さつきから来店する度に永井さんと同じ様な反応をする常連客。  
今も食べながら横目でちらちらと品川さんを見ている常連客。  
いつもなら馬鹿騒ぎしながら食べてる筈の常連客。

まあ無理も無い。

狭く苦しく古くさい定食屋に昨日までは居なかった美人が居るんだ。誰だって驚くよ。

「恭ちゃん、あの子…どうしたの？」

常連の宮田さんが話し掛けてきた、彼は年もまだ十代で俺とよく話す人だ。

「あ、ああ、今日から入ったバイトのひとだよ」

「へ、へえー…」

ぼおつと彼女を見ながら食事を再開する宮田さん。  
俺も一緒になって彼女を試してみる。

だが最初に感じたお嬢様オーラは少しも衰えていない。

既にランチ時に入った店内を走り回る姿はすごい違和感だ。  
言われた事を丁寧にそして一生懸命にこなしている、かなり優秀だ。

俺と宮田さんを含め、店内全員の男共が恍惚の表情で品川さんに釘付けになっている。

ひゅん

カーン

「いで」

厨房からフライパンが飛んできた。

「さぼってんじゃないよ馬鹿息子！品川さん一人じゃ大変じゃないかい！」

厨房からお袋が鬼の形相で睨んでいた。

俺も宮田さんもガクブルだ。

午後二時過ぎ。

混雑時を過ぎたので一度のれんをしまう。

藤村食堂では平日、休憩無しで開店しっぱなしだが土日は二時〜五時まで休憩に入る。

常連のほとんどが工場や港の労働者の藤村食堂は土日の方が忙しくないのだ。

「いただきます」

遅めの昼食を摂る俺達、品川さんも一緒だ。

「口に合うか分かんないけど、賄いだから遠慮は要らないよ」

明らかに余計な事も言ってるお袋。

「いえ、私、和食派なので嬉しいです、いただきますね」

四人揃って昼食を摂り始める。

「……………」

ぼおっつと品川さんを見ながら焼き魚をばくつく俺。  
丁寧と同じものを食べてる品川さん。

「……………」

何だこの光景は…

恰幅良すぎでオバサンパーマのお袋、角刈りにこだわり続けてる親父、その息子の俺。

その中にとっても場違いなお嬢様品川さん。

とってもシユールだ…

どうしてウチなんかでバイトしようと思っただらろう？

お袋の話だと、どうしてもと熱心に頼み込まれたらしい…

お嬢のたしなみとして下々の生活を体感しましょうって事かな？

……………

とてもそんな下らない事をする人には見えない…

「あのう… 恭介さん？」

「えっ？」

「私…何かおかしいでしょうか？」

不安そうに俺を見る品川さん。

ヤバイ、あまりにもガン見しすぎた。

「い、いやあ、美人だなあ… って… はは… は… は…」

恥ずかしいのと申し訳ないので引きつった笑顔を返してしまう。  
しかもすごい返答してるし。

お袋がすごい怪訝な顔で見てる。

親父はうんうんと目を細めて頷いている。

品川さんは少し照れ笑いを浮かべている様な気がする。

結局その日は品川さんを意識しすぎて、まともに仕事が出来なかった。

覚えてたての仕事を必死にこなす品川さんをしり目に、お袋に計五回のフライパンを食らった。

## 第四話

「有紗ちゃん」

「はい、只今参ります」

品川さんが働き始めて三日。

平日になったという事もあるが、店は明らかな大混雑に襲われていた。

外には軽く行列が出来ている、こんなに混む事はまず無い。

「有紗ちゃん、こつちも」

「はい」

常連客の緩みきつた顔を見て容易に想像がつく。

こいつら、品川さん目当てだ。

品川さんとはにかくかわいいし、ニコニコと丁寧な接客をする為たちまち人気者になった。

噂を聞き付けて来た奴や、一日に2〜3回来る奴まで居る。繁盛するのは良いが、何考えてんだ、このオッサン達は…

「有紗ちゅわん」

品川さんばかりを呼んでいるので彼女は大忙しだ。

「はいよー、恭介ちゅわんです」

代わりに行ってやる。彼女は明らかにテンパってたし。

「恭ちゃん…はは…チャーハン大盛りね…はは」

「かしこまりましたあ」

配膳も追いつかず大変だが、厨房もかなり大変みたいだ。常連達がこの有り様でもお袋の激が飛んで来ない。

パリン！

驚いて音のした方を見てみると、品川さんが真っ青になっている。食器を落として割ってしまった様だ。

「大丈夫？」

直ぐに駆け付ける。

「恭介さん、ごめんなさい…私…私…」

品川さん、今にも泣きそうだ。

まだ三日目だし、さっきの状況からじゃ仕方が無いのに…

「大丈夫だよ、怪我は無いね？片付けは俺がやるから」

「うめんなさい…」

しゅんと、項垂れてしまった。

「大丈夫かあ！有紗ちゃん」

「俺が拾うから、下がってて、有紗ちゃん」

「大丈夫か？」

「大丈夫か？」

「大丈夫か？」

「大丈夫か？」

「ひいいやああ、みなさん、ごめんなさいごめんなさい」

わらわらと店内の男共が、食べるのそっちのけで群がって来た！

「な、何やってんだよ！みんな！品川さん、脅えてるだろ？おとなしく食ってるよ！午後の仕事間に合わなくなるぞ！」

「恭ちゃんばつかずるいつてえ」

「うるさい、徳さんは奥さん居るでしょう」

やんやんやと騒がしくなる店内。

そんなこんなで品川さんを中心に男共の熱気が最高潮に達した頃、急にものすごい勢いで店の扉が開いた。

グウワラララー！！！！

驚いて店内に居る全員が注目する。

ものすごい形相の由が仁王立ちしていた。  
静まり返る店内。

「ゆ、由、どうしたの？」

俺が問い掛けると、ズカズカと突進してくる。  
なんだなんだ？

途中、品川さんを威嚇しながら睨みつける由。

「おいおい、ゆいででででででで」

耳を引っ張られた！

痛い！

「恭介さん」

心配そうに声を掛けてくれた品川さんをまたしても睨みつける由。

「ちょっと由、痛ってえって！」

結局、店内のみんなに注目されながら外まで引っ張られてしまった。  
外に並んでいた人達もびっくりしてる。

「……………」

外に出ると、ようやく放してくれた。

「くああ、痛かった…何すんだよ」

かなり怒ってるみたいなので、控え目に訊いてみる。  
それにしても俺、由に何かやったか？

「あの人誰？」

「はあ？」

やっと口を開いた由。

「さっきのエプロン女は誰なんだって言うてんの！」

ああ…黙ってたのを怒ってるのか…  
土曜日からドタバタしすぎて忘れていた。

「彼女は新しくバイトに入ってくれた品川さんだよ」

「なんでバイトさ？」

「なんでって…俺達だけじゃ大変だからだよ」

「今までは居なかったじゃん！」

「はあ？だからあ、今まで居なかったから大変だったの！何怒ってんだよ？由」

「……………」

訳わからん、今度は黙っちまった。

唇を噛み締めて何かを堪える様にうつ向いている。  
こんな由を見るのは初めてだ。

「はあ…由、明日の開店前に店に来いよ？義人も連れてさ、品川さんを紹介するから」

「……………」

返事無し。いい加減店に戻らないと、品川さんが心配だ。

「じゃあ、明日な」

俺は立ち尽くす由を残して店に戻った。

次の日

「こいつら俺の友達、二人とも両隣に住んでるんだ」

開店30分前、出勤して来た品川さんを二人に紹介した。  
品川さんはキョトンとしている。

「この二人ここで飯食う事も多いから、これからちよくちよく顔を合わせる事があると思うんだ。紹介しとこうと思って」

「あつ、はい。わかりました。お二人とも、私、品川有紗と申します。」

「は、はい。僕は土屋義人です。よろしくどうぞ」

品川さんの登場から放心状態だった義人があたふたと反応する。

「由？」

由はテーブルに座って頼杖を着いて明後日を向いている。  
今朝、一緒に朝飯を食べてからずっとこの調子だ。

「…桂……由」

そっぽを向いたままぼそつと呟く由。

「はい、土屋さんに桂さんですね。こちらでアルバイトとしてお世話になっております。よろしくお願い致します」

由の無愛想のお陰か、品川さん独特のかしこまった雰囲気のお陰か、微妙な雰囲気になってしまふ。

「……じゃあそついう事で……」

さっさと切り上げて開店準備をしまおつ。

「恭介さあ、この品川さん……が居れば、お店を手伝わなくてもいいんじゃないの？」

「えっ？」

やっとまともに話をしたかと思ったら、妙な事を言い出す由。

「やっと普通に遊びに行ける様になれたね、良かったね」

明らかな嘲笑を含めた笑顔で言う由。  
カチンと来た。

「何言ってるんだよ、別に手伝いを辞めるつもりはねえよ！」

本心だ。給料が出なかるうが、ここで働くのは俺の日常なんだから。それを否定された気がして少しムキになる。

「どうして？自分の時間が無いつていつも言ってたじゃん」

「言ったけど誰かに押し付けるつもりなんかねえよ。だいたい俺はこの息子なんだから手伝うのは当然なんだよ！」

「ちょっと二人とも、やめなよ！」

半ばケンカ状態になってきた俺と由を義人が慌てて止める。  
品川さんはひたすらオロオロしている。

結局、やたらと挑発的な由を義人が無理矢理家に連れて帰った。

「私、嫌われてしまったのでしょうか…」

「そんな奴じゃないよ由は…」

口ではそう言うが、俺は初めて見る由に苛立ちを抱かずにいられた。なかった。



## 第五話

目の前には無駄にはだけた格好の女。

俺は躊躇っている。

いつもなら強制的に叩き起こすのだが、今日は違った。

「……………」

昨日の義人の言葉が頭の中でぐるぐるしてる。

昨日の夜11時頃…

「お疲れ様、恭介」

店を閉めて掃除も終わり、自分の部屋でくつろいでいると義人が来た。

「義人、珍しいな」

夏休みだからといって、この時間に義人が来るのは珍しい。

「うん、由の事なんだけどさ」

なるほど、昼間の由とのケンカの事らしい。

只の口喧嘩だけど、俺と由が言い合ったのは随分久しぶりだった。恐らく小学校以来だと思う。

義人も稀に見る俺達のケンカを気にしているみたいだ。

「由さ、夏休みになるの楽しみにしてたんだよ。」

「そりゃそうだろう、由が夏休みを楽しみにしない訳がない」

「そうじゃなくて、由は夏休みに入れば恭介と遊べると思ってたんだ」

「はあ？」

「どういう事だ？別に由とは毎日の様に会ってるし、それは遊んでるのと変わらない様な気がするけど。」

「夏休みに入った途端、店がすごい忙しくなつたでしょ？」

「ああ、品川さん目当ての客が来る様になつたからな」

「そう、夏休みに入った先週の土曜日から店は大繁盛している。それも品川さんがバイトに入ったお陰だというのは間違いない。」

「由なりに色々計画してたみたいなんだよ…恭介の休憩時間に合わせたりして」

「えっ？」

「その事は夏休みになる前から訊いてたんだ。でも夏休みに入った途端に店は大繁盛…だから品川さんの事が気に入らないんじゃないかな…由は」

……………

由の考えそんな事だ…

本当に由の頭の中はガキだ。

自分の思い通りに行かないとすぐに機嫌を損ねる…

「…ったく、しょうがねえなあ…あいつ…」

でも、俺の顔は緩んでしまう。

由が近くに居たら、頭をがしがしと撫でてやりたい気分だった。もちろん品川さんには謝らせるけど。

「ははは、由は素直じゃないからね。でも恭介、わかってるよね？」

「何がだよ？」

「丁度明日は定休日でしょ？由と遊んであげなよ？」

ニコニコと言う義人。

「ええ？明日かよ？」

ここ最近の店の大繁盛振りで、俺は正直体を休めたい気分だった。由と二人だと絶対にあちこち振り回される。

「ダメだよ、由、傷付いてるよ？」

真顔で真っ直ぐに言う義人。

「じゃあ義人も一緒に…」

「僕は部活、週末に大会があるんだ。それに由は恭介と遊びたいん

だからね」

義人は真面目で素直な性格だが、少々頑固なところがある。言い出したら聞かない。そして怒らすと怖い。

「くろう…仕方ない…」

「朝も優しく起こしてあげるんだよ？朝一番からご機嫌にしておきなよ」

「ああ…わかったよ…」

俺はこうなった義人には逆らわない様になっている。素直に頷く。

「くろうん…」

由の声で現実に引き戻される。

仕方ない…優しく起こす…実践してみよう。

「由…ゆい」

なるべく優しく肩を揺すりながら、声を掛ける。

「ん…うん？」

もぞもぞと身じろぎしながら薄く目を開ける由。

「おはよう、由」

「えっ？」

ぱっと目を開ける由。

「おっ、起きたか？」

由が一発で起きるとは…実に珍しい…  
布団ごとひっくり反してもまどろみながらグズる癖に…

「恭介…どうしたの？」

目をしばたきながら言う由。

俺が普通に起こしたのが珍しいらしく、不思議そうな顔をしている。

「あゝ、えーと…昨日は…ごめん」

とりあえず謝っておく。

俺が謝っちゃうのが一番早そうだ。

「えっ？えっ…う、うん…」

一瞬、驚いた顔をしてすぐうつ向く由。

「私も…ごめんなさい」

下を向いたまま、謝り返す由。

うむ、しおらしい…こんな由は本当に珍しい。

「よし、仲直りって事で、今日はどこかに遊びに行くか！」

「いいの？」

「もちろんいいぞ！定休日だしな、一日中付き合っただるぞ！」

「うん…！」

俺の家で朝食を済ませてから出かける事になった。  
食べ終えた途端。

「恭介、早く早く！」

すっかりご機嫌の由。さっきのしおらしさは欠片も無い。

「焦んなよ、時間はいっぱい有るから」

もう引つ張り回されるのは分かっているので諦める事にした。  
ぐいぐいと引きずられていく俺。

「あれ？」

店の前の道路、俺達が向かう駅に続く方向とは反対側の方…

品川さん？

「恭介？どうしたの？」

「あ…いや、なんでもない」

かなり遠くなのではつきりとは分からないが、道路の先に品川さんが居た様な気がした。

気のせいだろう…

そして。

「由、待ってくれえ」

「またあ？さっきから休憩ばっかじゃん」

「そんな事言っただって…朝の9時から今まで動きっぱなしじゃないかあ」

時刻は夕方6時。由に一日中振り回された俺は、最早ボロボロのくたくただった。

午前中は市民プール、午後からは買い物にカラオケ、また買い物とかなりハードだ。

「ほらあ、あとちょっとだよ」

ようやく解放される事になったのだが、家を目前にして俺はへばってしまっていた。

両手に抱えた買い物袋も大きな要因だ。

「つ、着いたあ」

ぐずぐず言いながらもやっと家に着く事が出来た。

「じゃあ荷物置いたら恭介の部屋に行くね、さっき買ったゲームやるおよ」

なんと…まだ解放されないですか？

「もう休みたいんだけど…」

「今日は一日付き合ってくれるんでしょ？」

「……はい」

そう言つと、たつたかと桂家に駆け込んで行く由…  
ものすごい体力だ…

「ふう……えっ？」

踵を反して振り向いた視線の先…  
今朝も見たの道路の先に…

「品川さん…」

間違い無い…

今朝と同じ所に品川さんが立っている、見間違えじゃなかったんだ…

「あっ…」

俺と目が合うと品川さんは行ってしまった。

???

どうしたんだろう…

今日は休みなのに…

っていつかまさか朝からずっと居たのか？

そんな訳無いよな。

たまたま通りかかったただけだろう…

## 第六話

「日替わり定と唐揚げ定よろしく」

「はいよ」

「こちらも日替わり定食です、よろしくお願いします」

「はいよ」

せわしなく店内を動き回る俺と品川さん。

厨房のお袋達も忙しそうに動き回っている。

定休日明けの木曜日、今日も藤村食堂は大混雑だ。

昨日の事を品川さんに訪ねたら、わからない、知らないとはぐらかされてしまった。

やはり見間違えだったのだろうか…

「あっ…」

品川さんの事を考えていたら、品川さんを見てしまっていた。

こっちを見た彼女と目が合う。

で、なんとなく目を逸らす俺。

「恭ちゃん、注文いいかい？」

「あ、はい」

とにかく今は混雑時だ、仕事仕事っと。

午後1時を回ると客脚も緩やかになってきた。

手持ち無沙汰になってしまった俺は、常連の武藤さんと高校野球を眺めている。

「久しぶりに来たらバイトの女の子が入ってるとはね」

武藤さんは工場や港の仕事ではなく、道路工事などを行っている建設会社の人だ。

だから仕事の空いた時、たまにしか食べに来れないらしい。

「お水をどうぞ」

品川さんがお水のおかわりを持ってきた。

「あれっ？ええっ？有紗お嬢さん!？」

「えっ？」

は？知り合い？

「武藤さん……」

品川さんも意外そうな顔で驚いている。

「知り合いだったんスか？」

「ああ、社長の娘さんだよ、ずいぶん久しぶりだけどね」

「はい、お久しぶり…です…」

社長の娘…やっぱりお嬢様だよ。

そういえば品川建設って聞いた事あるし。

「しかし驚いたよ、有紗お嬢さんがアルバイトかい？」

「は、はい…えーと…」

何だ？

何やら挙動不審な品川さん。

「どうしたの？品川さん」

「いえ…あの…ごめんなさい…食器、洗ってきます…失礼…します…」

「あっ…行っちゃった…」

そそくさと厨房の奥に消えてしまった品川さん。

残された俺と武藤さんは困った顔を見合わせてしまう。

どうしたんだろうか…

その後の品川さんはおかしかった。

元気が無くて夕方からの混雑時には、みんなに心配されていた。

「有紗ちゃん、どうしたの？」

「恭ちゃんに何かされた？」

「いえ…そんな…大丈夫です」

苦笑いで答える品川さん。

口々に品川さんを気遣う常連達…

「っていつか俺は何もしてねえし！品川さんもちゃんと否定してよ  
お」

「あ、あ、ごめんなさい…」

ずーんと暗くなる品川さん、昼までは普通だったのに…

「品川さん、本当に大丈夫？具合が悪いなら上がったちゃっても大丈夫だよ？」

「いえ！そんな！大丈夫です！」

何やら必死に強がる品川さん、俺には無理をしてるようにしか見えない。

「恭介の言う通りだよ、今日は上がったちゃいな」

お袋だ。

いつのまにか、お袋が隣に居た。

「だ、大丈夫です、おば様」

「いいから今日は帰りな、恭介、送ってあげな」

ぴたっと品川さんの動きが止まった、すぐるような目を俺に向けてくる。

やはり調子が良くないのだろう…

「いいけど、俺が抜けちゃっても大丈夫か？」

俺が抜けると、配膳をやる人が居なくなる。今も店は超満員だから二人じゃ大変なのは明白だ。

「構わないよ、今からセルフサービスにしちゃうからね。どうせ品川さんが居ないとわかれば、みんな長居はしないさ」

そんなんでいいのか？

でも、品川さんを一人で帰すのは不安だ。

「わかった、品川さんもいいよね？」

「は、はい…：よろしくお願いします…：」

申し訳なさそうに恐縮する品川さん、

俺達の住んでる久住ヶ丘は、駅を挟んで古い住宅地と高級住宅街に分かれている。

藤村食堂は古い住宅地側。

品川さんの家は、やはりというか駅の反対側らしい。

「……………」

「……………」

これといった会話も無く、二人とも無言で歩いている。

うう…何だか緊張してきた。

由で慣れていると思っていたが、さっきからどうしても意識してしまっ。

田舎道の為、街灯が少ない。

その少ない街灯の下を通る時に彼女を見てみた。

目が合う。

「…な、なに？」

アホな事に思わず視線の理由を訊いてしまっ。

「あ、あの……寄りかかってても…いいですか？」

「えっ？……ええええー！！」

俺に？

俺につて事？

俺に寄りかかるって事？

「あっ、いや…その、やっぱり調子悪いみたいです…ですので……」

「う、うん、いいよ…どうぞ」

近付いて彼女に肩を寄せる。

俺の左腕を抱き締める様にする彼女。

えっ？

なんか違うくない？

「なっ…ししし品川さん？」

「……………」

俺の腕に体を埋めたまま、黙り込む彼女。

結局、そのまま二人無言で歩きだす。

心臓が早鐘を打つ、彼女に聞こえているに違いない。

なんなんだ！

なんなんだこの状況は！

ってというか、当たってる！

胸当たってるよ！

由とは違う女の子の感触と匂いに、俺の頭の沸点はとっくに振り切っている。

落ち着け…

落ち着け、恭介。

品川さんは具合が悪いんだ。

妙な下心は品川さんに失礼だ！

ごくつと唾を飲み込む。

頭でわかっているけど、どうしても左腕に全意識を集中させてしまう。

しばらく歩いて、何回目かの唾を飲み込んだ時。

「ここで……大丈夫……です……」

すつと俺の腕から離れる品川さん。

「えっ、…近いの？」

「はい、ありがとうございます」

「大丈夫？」

「はい、もうすぐそこですので…では…また明日に…」

街灯も無くて、彼女の表情は分からない。

でも喋り方の感じからして、しっかりしてる様に思える。

もう大丈夫だろうか…

俺に頭を下げて、行ってしまった彼女の後ろ姿を視線で追う。

左腕に残っていた彼女の熱が冷めていく。

「……………」

冷静になって考えるとおかしい…

異性に対しての免疫が由くらしいの俺でも分かる。

からかられたのか、誘惑されたのか分からないけど…

さっきのはわざとだ…

既に見えなくなった彼女の後ろ姿を見つめたまま、そう思った。

## 第七話

朝8時。由と義人と一緒に朝食を食べている。  
夏休みの為、学校のある日より遅めだ。

「恭介、恭介ってば！」

「えっ？」

「訊いてるの〜？さっきからぼ〜っとしてるけどさ〜」

「ごめん…訊いてなかった」

昨日の品川さんの事が頭から離れない。  
惚けていたら由に怒られてしまった。

「旅行の事だよ、宿が取れないんだよ〜」

「今年はちよつと出遅れちゃったからね…」

そう言つて二人は、うなだれてしまう。

お盆の旅行の話だったらしい。

「……………」

二人には悪いがその事よりも、俺の頭の中は品川さんの事でいっぱいだった。

俺と品川さんは出会ってまだ一週間も経ってない。

彼女の昨日の行動は何だったんだろう…

清楚の見本の様な品川さん…  
俺なんかとは違う、懸け離れたハイソな生活を送って来たに違いない。

彼女の行動は理解為かねる。

でも…

「ごちそうさま恭介、じゃあ僕達は行ってくるよ」

「えっ？どこに？」

「本当に今日はどうしたんだよ？私は補習、よっしーは部活だよ」

「あ、ああ…そうだった、行ってらっしゃい」

そういえば二人とも制服を着ている。

首を傾げたまま出かけて行く二人を見送ると、また思慮に耽る。

品川さん、品川さん…

………

「おはようございます」

声の方を向くと、品川さんが居る。

「ああ、おはよう……って、えっ？あれっ……今日は早くない？」

彼女の事ばかり考えていたからか、微妙にテンパる俺。

「いえ、いつも通りの時間ですよ」

時計を見ると11時になっている。

どうやら義人達が出かけてから、時間を忘れて惚けていたらしい。

「…もう大丈夫なの？」

昨日の今日なので、彼女の具合を訊いてみる。

「はい、昨日は申し訳ありませんでした。それと…ありがとうございます  
いました」

頭を下げてくれる、流れた髪から漂う彼女の甘い匂いに昨日の事を  
思い出してしまう…

急速に顔が熱りだす、彼女をまともに見れない…

「…うん、よくなって…良かった…」

駄目だ…完全に意識してしまっている。

俺ってこんなに単純だったのか…

開店してからも、俺の目は彼女を追い掛けてばかりだった。

彼女の声やちよつとした仕草に嬉しくなってしまうている。

それだけ見ていれば、目が合ってしまう事もある…というか頻繁に目が合う気がする。

視線が交差する度に笑いかけてくれる品川さん…  
そんな笑顔を見せられたら、俺の顔は当然緩む。

「へへへ…」

ぶん

ガンッ

「んがつ！」

中華鍋が飛んできた！痛い！

「いやらしい顔してさぼってんじゃないよ！変態息子！」

くああ…お袋…超満員の店内で息子を貶めんでくれ…

鍋を食らった背中をさすりながら、品川さんを見てしまう。

目を細めて優しく笑ってくれていた。

嬉しかった。

「今日はもう終わりにしようかねえ」

夜8時過ぎ。めずらしく店内にお客の姿は無い、こつこつ時は早めに店を閉めてしまおう。

「品川さん、時間も丁度いいし上がっていいよ。ご飯は食べて行くかい？」

「いえ、夕方の混雑前に頂いたので大丈夫です。」

いつも品川さんには8時頃まで働いてもらっている。

8時を回るとお客も捌けてくるので、俺ひとりで大丈夫だからだ。

「片付けは俺達でやるから、そのまま上がってよ、品川さん」

「いえ、お手伝いします……それで……恭介さん……」

もじもじと口ごもる品川さん。

「?…どうしたの?」

「また…送って頂いても…よろしいでしょうか?…やっぱり一人だと怖くて……」

「えっ…うん、いいけど……」

嬉しい……

彼女を送ってあげたい…  
頼られるのが嬉しい…

こんな気持ちは初めてだ。

ポンと肩を叩かれる。

振り向くと親父が親指を立てていた。

「片付けは任せろ、行ってこい息子よ」

ナイスガイな笑顔だった。

前の日と同じ様に並んで歩いている。

もちろん昨日みたいに腕を組まれている訳じゃなく、ちゃんと離れて歩いている。

「……………」

「……………」

そして今日も無言。

どうにか話題を探しているが、浮かんでくるのは下らない事ばかりで話ずに話せない。

「今日もここで大丈夫です。ありがとございました」

結局、無言のまま昨日別れた所まで来てしまった。

「あ、ああ、お疲れ様…」

「はい、お疲れ様です」

歩きだす彼女を今日も見送る。

離れて行く彼女を見て考える。

いつか義人に対して俺自身が言った言葉。

『出会いは突然、そして必然』

馬鹿な事を言ったと思う…

ありがちなクサイ台詞をいい加減に言っただけだったけど…

今は、いい言葉だと思った。

次の日も、その次の日も俺の目は彼女を追い掛けている。

彼女が居ない時も彼女の事ばかり考えていた。

俺の中で彼女がいっぱいになるまで、  
そう時間は掛らなかつた。

## 第八話（前書き）

しばらく行き詰まってしまって、更新が遅れました。  
申し訳ありません。

## 第八話

8月に入り、夏休み開始から2週間が経った。

夏も本番で暑さもたけなわ、常に屋内に居るがいい加減うんざりしてきた。

店の方は俺なんかおかまい無し、相変わらずの大盛況だ。

「花火…ですか？」

「うん、明日やるの、神社で屋台も出るから一緒に行こー」

「おいおい、店があるだろうが」

「恭介に言ってないよ、有紗さんに言ってるんだよ」

くっ…

大盛況で、今も夕方の混雑時だが、俺と品川さんは結構余裕だ。

こうして夕飯を食べに来た由としゃべりながら配膳をこなしている。品川さんがアルバイトに入って2週間、慣れてきた彼女は俺顔負けの手際の良さである。

「でも、私のお店があるので…」

「お店は恭介にやらせておけば大丈夫だよ」

ちなみに由と品川さんだが、いつのまにか仲良くなっている。最初はツンツンしてた由も、悪意が有るわけじゃない品川さんにお姉ちゃん状態でなつきだした訳だ。

「いろいろ突っ込みたいところだが、行ってきなよ品川さん」

独断で勝手に言ってしまったが、俺が残れば問題あるまい。

「そんな…私だけ行くなんでできません」

「俺はいいよ、去年も行けなかったし」

「恭介は中一くらいからずっと行ってないよね」

「別に柄じゃないし、見ようと思えば店からでも見えるしな」

「と、とにかく、私も行きません、恭介さんお願いします！」

必死に懇願されてしまう。

「わ、わかったよ…」

「残念だな」

「ごめんなさい…桂さん…」

品川さんが働きだして2週間。

最近になって気付いたが、彼女はやたらと店に居たがる。

お客が少なくて早上がりしていいよって言っても、『お給料要りませんから最後まで働かせて下さい』とか…

土日は忙しくないから休んでも大丈夫だよって言えば『お給料要りませんから土日も働かせて下さい』とかだ。

………

普通じゃなくね？

まあ俺は品川さんと一緒に居れるからいいんだけどね…

そして次の日

「お客さん来ないねえ…今日はもう閉めちゃおうかねえ」

ガランとした店内で、お袋がぼそりと呟く。

「いいのか？まだ7時半くらいだぞ」

7時代に店を閉めるなんて初めてだ、どんなに早くても8時までは開けていたのに…

「構わないよ、どうせ常連のみんなも花火に行ってるんだろっさ」

あのいかつい漢おにいどもが花火？

「丁度いいから、あんた達も花火見に行つて来な？まだ間に合うだろ？」

「はあ？」

聞き間違いか？

お袋が妙な事を言っている。

確かに花火大会は9時までだからまだ十分間に合う。  
現に今も遠くからの轟音が響いてきている。

「片付けはいいから品川さんと二人で行つてくるといいよ」

バツと品川さんの方を向く。

「えっ？」

店の入口付近で待機していた彼女は軽く驚いている。

「行く？」

「えっ、花火ですか？」

「俺と花火見に行く？」

「えっ、あっ……………はい……………」

いよっしー!!

嬉しい!

別に花火はどうでもいいが、彼女と行けるっただけで嬉しかった。

「あの…私、ここから見たいです……」

「えっ?」

「えーと…片付けは私達でやりますので、おば様達で行ってけるといっなのは……如何でしょうか?」

えっ?

何を言ってるんだ…

「な、何言ってるんだい!それじゃせっかく……」

???

とっさに口をつぐむお袋。

「まあいいじゃないか…母さん、彼女のお言葉に甘える事にしよう」

厨房から親父が出てきた。

「しかしだね、あんた」

「いいから……」

ぐいぐいとお袋の手を掴んで出て行く親父。

「恭介、ちょっと来い」

「えっ？あ、ああ」

ぼおくと展開を見守っていた俺を店外に呼ぶ。  
品川さんは不安そうにおたおたしていた。

「気を使ったつもりが逆に使われてしまったな」

ため息混じりに言う親父。

「どづいつ事？」

「昨日、由ちゃんと花火の事を話していただろう？だから母さんが昨日の内に常連達に根回ししたんだよ」

「あ…なるほど…」

7時代に常連が居ないなんておかしいと思った…

品川さんに気を使わずに花火に行かせる為か…にしても、常連に店に来るなって言ったって事か？

「まあ、どういう訳か彼女はこの店を、いたく気に入ってくれてるみたいだ…彼女の言う通りにしてあげよう」

「…同感…わかったよ、じゃあ店は任せて行って来なよ」

「ああ、久しぶりに夫婦でぶらついて来るさ、行くか？母さん」

「あ、待っとくれよ」

おお…親父……渋いぞ。  
お袋が何も言えなくなってる。

「ついでに言うと、恭介、お前もなんだけどな…」

「俺？俺もって何が？」

「さっきの話だが…まあいい……自分で考える…」

???

さっきの話？

首を傾げる俺を残して、親父達は行ってしまった。

……………

考えてみたら、俺達が行かないのはいいとして、どうして親父達が店を出て行く必要があったんだ？

店内に戻ると品川さんが出た時と同じ様子で待っていた。

「親父達は行ったよ」

「あ、はい……すいませんでした…」

「どうして謝るの？」

「いえ、恭介さん……花火……行けなくなっ……てしまいました…」

「いいよ、そんなの。ここからも見えるし、柄じゃないって言った

る？」

それに品川さんと見れば、どこでもいいよ…

なんて言えない…

「……はい……ありがとうございます……」

嬉しそうに微笑む顔を隠す様にうつ向く。

俺も同じ様な顔になってしまっていたので、丁度よかった。

ドーンドーン

響いてくる轟音を聴きながら、窓際の席で花火を眺める彼女。

昼間の暑さが嘘の様に涼しい、優しい風が彼女の髪を揺らす。

会話は無い。

花火の轟音と遠くに聞こえる喧騒だけ。

俺は花火なんてちつとも見ていない。  
ずっと彼女の横顔を眺めている。

窓から見える景色は知っている、花火は建物の隙間から僅かに見えるだけだろう。

でも彼女は魅入られた様に視線を止めたまま動かない…口も開かない。

少し心配になるくらいだ。

「…綺麗…です…」

「えっ？あ、ああ…そうだね…」

ようやく口を開いた彼女…視線は外に向かったまま。

「でも……怖い…ですね…」

「……………」

何も言えなかった。

彼女の横顔が…

綺麗で…………

夢  
か  
っ  
た  
か  
ら  
.....  
.....

## 第九話（前書き）

新キャラが出ます。

## 第九話

「ほらほら、恭介、見て見て」

「わかったわかった、危ないから頭出すな」

お盆休み、俺達は車で避暑地へと向かっている。

車内には、俺と由と義人が後部座席、助手席には品川さん…運転席には…

……？

「……誰？」

「藤村様、私の事でしょうか？」

運転席でハンドルを握る女性が見たまま答える。

「先ほど申しましたが、私は品川家に仕えております御陵レオナと申します」

見た事も無い様なデカイ外車の運転席に座る彼女はメイド服を着ている。

見たまんま品川家のメイドらしい…

「レオナとお呼び下さい」

「いや、初対面だし呼び捨ては…」

「レオナとお呼び下さい」

「いや…だから…」

「レオナとお呼び下さい」

「……レオナ…」

「はい、よろしく願います」

……この人苦手だ……

「申し訳ありません…恭介さん」

「いや…品川さん、大丈夫」

どうしてこんな異色のメンバーで避暑地向かっているかという……

前日

「やだやだ〜」

「しょうがないだろ？どこも予約でいっぱいだし、空いてるところは高いんだから」

盆休み前の最後の営業日、ランチ後の休憩時間、由と義人が店に来ていた。

翌日からの盆休みの予定を相談する為だ。

「でもやっぱり泊まりがいいよ〜」

「だから〜、空いてるところは高いか遠いかなんだっつうの!」

由は例年通りに泊まりで出掛けたらしい…

しかし、動くのが遅すぎた…

俺達は、八方塞がり状態で頭を悩ませていた。

「日帰りで海水浴とかにしようか…」

「よっしー、そんなのいつでも行けるだろ〜!」

あーだこーだ言い合っているが、由のわがままのお陰でさっぱり話がまとまらなかった。

「失礼します」

店の扉が開いて女性が来店して来た。

「す…すみません…えーと…今ちよっと休憩中にして…」

俺が応対するが、ひどく狼狽してしまう。

理由は女性の見た目が衝撃的だったからだ。

まず格好がおかしい、メイド服?だろうか…やたらフリフリの服を

着ていた。  
さらに気になったのが髪の色だ、銀色だ…よく見ると瞳の色も銀色だ。

「こちらに品川有紗嬢はいらっしゃいますでしょうか？」

「し、品川さん？」

彼女の名前を訊いて、彼女の方に振り向くと品川さんは驚いた顔をしていた。

「レオナさん…」

「お嬢様、申し訳ありません…携帯にもご連絡したのですが、お出にならなかったたので参上致しました」

「ここには来てはいけないと話した筈です」

少し困惑気味な品川さん。

「火急の用でしたので申し訳ありません…」

深く頭を下げるメイド服…

品川さんの家の人？らしいが、この状況についていけない…由と義人も同じらしい…

「仕方ありません…恭介さん、少し外に出てきます」

「あ、ああ…」

メイドと店の外に出て行く彼女。

「メイド！メイドだよ恭介！」

「えっ、ああ、そんな感じだな…」

メイドというものを初めて見たというだけじゃなく、銀髪のメイド…三人とも驚いたまんま店の入口を凝視してしまっていた。

しばらくすると二人が戻って来た。

「有紗お嬢様付きでお手伝いをさせて頂いている御陵レオナです」

どうせならと、自己紹介される事になった。

「え、えーと…恭介さん、それで…少し提案がありました…レオナさん、説明して下さい」

???

なんだ？

「はい、実は県内に品川家の所有する別荘がありまして、私、御陵が本日メイド長からその別荘の清掃作業を依頼されました」

「は、はあ…」

「聞けばお三方、宿泊施設を探しておられる様子…そこで私、御陵に同行して頂くというのは如何でしょうか？」

「別荘！すごいすごい！行く行く！」

俺より由が真つ先に反応する。

「はい、お嬢様のお知り合いの方であれば、私は歓迎致します…しかし一つ問題がありました…」

「何ですか？」

「本来ならば本日より3日間、清掃作業に赴く予定でした。しかしお三方をご招待するのであれば明日出発という事になります」

「…あゝ、まわりくどい話し方をする人だなあ…」

「別荘は広大である為、1日遅れとなりますと私一人では作業に支障をきたします…お三方には施設、食事をご用意させて頂く代わりに清掃作業の方を…」

「だゝゝ、わかったわかった、俺達も行っていいけど掃除を手伝えつて事だな！」

「はい、ご理解頂いて何よりです」

「由？義人？」

「もちろん行くよゝゝ！」

「僕も大賛成だよ」

「という訳だけど、いいの？」

この発案をしてくれたであろう品川さんに尋ねる。

「はい、もちろん構いません」

「有紗さんは…行かないの？」

「わ、私は…」

ちらつと俺を見る品川さん。

「いいんですか？」

「い、いや…品川さん家の別荘でしょ？」

「あの期限内ですし、私も付いているので問題無いと思われま

期限内？」

なぜか、その期限という言葉が妙に気になった。

「恭介さん達さえ良ければ…」

「全っ然！問題無いよ！なあ由？」

「う、うん、いいよ、もちろん！」

？

言ってる事は肯定だけど顔は否定してる？

「で、では、私もご同行してしまいます…」

「うん、一緒一緒！」

はしゃぐ由、やっぱり気のせいか…

という訳で俺達5人は一泊二日の小旅行の為、というか掃除の為、県内の高原にある品川家の別荘に向かっている次第である。

車はすでに市街地を抜けて峠道を走っていた。

「みなさん、見えてきました」

「うお、すげえ」

「でっかいね」

城？

山を切り取った様な平地に西洋風の城がそびえていた。

## 第十話

午前9時、早朝の内に出発していた俺達は午前の早い時間に到着する事が出来た。

車を降りて、そびえ立つ別荘を見上げると呆然としてしまう。

「でかい…一泊二日で終わるのか？」

「年に3回の清掃を徹底しているので、それほど大掛かりな清掃は必要としません。しっかり予定を組んでこなせば十分完遂も可能でしょう」

「ねえねえ、ちゃんと遊べる時間はあるの？」

「ご安心下さい、予定通りにいけば大丈夫です、空き時間は十分にご用意させて頂いております。品川家の有する保養施設としていくつかの娯楽もご用意出来ると思います」

淡々と講じてくれるレオナ、人懐っこい由に迫られても動じないのは流石プロか…

「とりあえず中に入りましょう？」

門の前でウダウダやっている俺達を品川さんが即す、ごもつとも。

「き、恭介…」

「ん、義人？」

振り向くと、蒼白でこの世の終わりの様な顔をした義人がハアハアしていた。

「な、何？」

「ハアハア…僕…もう駄目だよ…うつ…おんぶ…おんぶしてよ…恭介…」

いつも冷静で頼りになる真面目1号義人…  
どうやら車酔いしたらしい…

「さ、さっきからおとなしいと思ったら…」

仕方なく義人を背負う俺、それを指さして大爆笑する由…  
心配そうにしている品川さん、真顔のレオナ…

「はあ…」

いろんな意味のため息を洩らしながら門をくぐった。

「早速ですが、分担を申し上げます。私と藤村様は台所の清掃及び昼食の準備、土屋様と桂様はリビングとダイニングの清掃をお願い致します。」

まず俺達は、リビングで今後の予定を訊いていた。  
予めレオナが決めてくれていたらしい。

「品川さんは？」

レオナが挙げた名前に彼女の名前が無かったので訊いてみる。

「お嬢様は二階のテラスにて、紅茶など召し上がって頂きます」

「は？」

「ひゃああ、レオナさん！私にもお掃除をお手伝いさせて下さいよ  
お」

遮光器土偶の様な顔になった俺達を遮る様にあたふたと言う。

「お嬢様にその様な事をして頂く訳にはいきません」

.....

最早、俺達の中では品川さんの普段の生活は、セレブというより何やら得体の知れないものになっていた...

「素晴らしいです.....藤村様」

「い、いや...俺も和食か店のメニューにある物しか作れないよ」

結局、料理が出来る俺とレオナは台所担当固定のままだった。

掃除も終わり料理に取り掛かると、レオナに絶賛されまくってしまった。

ちなみに品川さんは義人達を手伝う事になったらしい…

「料理の腕ももちろんですが、手際の良さは最早神業…私、洋食は問題無いのですが…和食は手間が多くミスの許されない作業が大半…尊敬します藤村様」

「い、いやあ…レオナも流石だよ」

照れる、そりゃ照れる。

レオナ持ち上げ過ぎ！

しかし隣に銀髪のメイド…しかもハーフ？…二十歳くらいに見えるけど…年齢不詳だし…

うーむ…あり得ない状況だ。

「…という訳で藤村様のお手並みを見せて頂きながら作りましたので、昼食は藤村様お得意の和食…お米に合わせた物中心になりました」

アンティーク家具で統一された、広大なダイニングルームで昼食となった。

とにかく広いこのダイニングルーム、とりあえず学校の教室よりはずっと広い…

その中央に設置されたクソでかいアンティークテーブルに並ぶ俺製の昼食…

……すごい合っていない……

茶碗などの食器が普通にあっただのが不思議だ。

「何だよ、いつもと変わんないじゃん」

「うるさいな、仕方ないだろう」

いつも由達に食わしている物とほとんど変わらないので、由がぶーたらゴネる……

「私、羨ましいです……」

品川さんがちよつと寂しそうに呟く。

「同感です、お嬢様、藤村様の台所での立ち回りは、称賛に値する素晴らしい絶技でした」

「僕も恭介のご飯は大好きだよ」

由以外に誉めちぎられる……うわ……ちよつと感動しそう。

「……とにかく、冷めないうちに食べてーな？な？な？」

くすぐったくて、みんなを即す。

「って、あれっ？レオナの分が無いじゃん」

いざ、いただきますの号令を掛けようとして、食卓に並ぶ料理が一つ足りないのに気付く。

レオナの方だ。

レオナはなぜか立っていて、彼女の分の昼食は用意されていない。

「えっ？俺ちゃんと人数分作ったぞ」

ちなみに作ったのは俺をメインに二人でだが、配膳はレオナがやった。

「いえ、私は後程いただきます」

「何で？」

「私の様な端女が、お嬢様やお客様と食事を共にする訳にはいきません」

はあ？何だよハシタメって…（召し使いの女って意味）

「駄目駄目、却下却下、何だか知らないけどご飯はみんなで食つもの！俺の作った物を冷まさすなんて許さんぞ？レオナ」

「い、いえ…しかし…」

「待ってる、今よそつてきてやる」

ダイニングルームを出て、いつも店でやってる様に、ダッシュで台所とダイニングルームを往復する。

「はい、お待ちどうぞさん」

「…藤村様、私は有紗お嬢様に仕える身です…どうかご容赦を…」

さつきまでの、毅然とした態度は消え去り、俺と品川さんを交互に見ながらうつろたえている。

「レオナさん、私からもお願いします、一緒に食事をとって下さい」

「早く食べようよ」

「レオナさん、僕も恭介の言う通りだと思つよ」

「……………」

諦めたのか、しずしずと席に着くレオナ。

「よし、いただきます」

ようやく昼食を食べ始める。

みんな黙って箸を動かす。

レオナは明らかに遠慮しているが、品川さんを気遣いながらどうにか食べてくれている。由と義人も慣れない場所だからか、黙って食べている。

品川さん…すごく嬉しそうな顔で食べてくれている、俺の料理を気に入ってくれたのだろうか？

昼食後、俺に料理長のポストが与えられた…

レオナは私がやりますと言っていたが、品川さんの熱い推薦から、

デモクラシーにより俺に決議した。

結局、盆休みだがいつもの食堂の手伝いの延長になった様な気がする。

正直げんなりしたが、彼女の綻んだ顔を見たら、悪くないと思った。

## 第十一話

午後。

ある程度、日が落ちるまで自由行動になった。

由は別荘内を探検。

義人はその由に引きずられて行った。

レオナは清掃作業に戻った。

品川さんはダイニングに残っている。

俺は…

もちろん彼女のところに居る…

由にも誘われたが、義人に押し付けてやった。

「よくここには来るの?」

「えっ…あ、はい…中学生までは毎年来ていました」

ダイニングルームの窓から外を眺めていた彼女が、わざわざ向き直って答えてくれる。

「すごいよな、こんな城みたいな別荘、それに専属のメイドだもんな」

「……はい……」

えっ？

哀しそうにうつ向きしてしまった。

「ど、どうしたの？」

「………ごめんなさい、何でもないです、恭介さん、午後はどうしましょうか？」

数秒の沈黙の後、普段よりも明るい表情で顔を上げて言う。

「………と………そうだね、掃除を手伝ってもいいし………外を散策とか面白そうだ……」

その明るい表情に引き込まれたのか、少し言葉を飲んでしまう。

「散策……ですか？それは楽しそうですね………あの………よろしければ………私も一緒にさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ、もちろん！」

照れ隠しに適当に言った事だったが意外にも彼女は乗ってくれた。

「おお…」

一度別れて、外を歩く準備をしてから、玄関ホールに集合になった。  
遅れて来た彼女を見て唖ってしまふ。

白いワンピースに白いサンダル…白い日傘…加えて白い帽子…  
彼女以外の人が着たら嫌味にしか見えないだろう。

「白い服…好きだよね？」

綺麗過ぎて、直視できない俺は明後日を向きながら問いかける。  
痒くもない頬を掻いたりしてるし。

「……はい、好きです…持っている服の9割が白です」

はい、清楚日本代表決定！

二人で小川があるという所を目指して歩く。  
午後の日差しは凄まじく、照り返す熱も強い…

……はずなのに、二人で歩く林道には、優しい木漏れ日が降り注ぐ  
だけだった。

そんな中を歩く彼女は、綺麗というか…最早神々しいくらいである。

「ねえ、恭介さん？」

彼女が前を向いたまま俺に問いかける。

「何？」

「さっきはありがとうございました」

???

「えっ？何のお礼？」

「昼食の時、レオナさんを食事に加えてくれましたよね？」

「うん、いや、あれは当然だろ？」

「……………私…夢だったんです……………」

「夢？」

「レオナさんは私が中学校に上がった時から一緒に居てくれました……………」

「へえー、付き合い長いな、姉みたいな感じか？」

「……………はは……………そうですね……………でも……………私は……………」

「……………?」

話が途切れる。

「……………あ……………いえ……………何でもありません……………ほら、見えてきましたよ？」

「えっ？」

話を中断して、前を指さす彼女。

俺の少し先を歩いていた彼女に追い付かんと歩を進める。

「おお、すげえ！」

眼前には、陽光を受け光輝く清流が拡がっていた。

「別荘にはしばらく振りですが、ここには来たかったんです…」

どうやら、ここは彼女のお気に入りの場所らしい。

先ほどまで沈んでいた彼女の声も、元に戻っていた。

確かに、さらさらと流れる綺麗な水を眺めているだけで、癒される気がする。

陽光を優しく遮ってくれる木々達の匂いも芳しい…

「あはは、冷たいですよ、恭介さん」

小川にしゃがみこんで、ぱしゃぱしゃと水をしぶき上げる彼女…

俺は笑顔で語り掛ける彼女に、精一杯の作り笑いを返すだけだった。

さっきの話を訊いたからか…？

夢？

でも……私は……

さっきの彼女の言葉の続き……

一人なんです……

そう続いていた様な気がする……

夢……レオナと食事をとる事……

俺の想像に過ぎないが、彼女の憂いを含んだ笑顔を見ると、あながち間違いでは無い気がする……

そうだとしたら、細やかすぎる……

好きな人の笑顔を見ているはずなのに……

俺の胸は痛いくらいに締め付けられた。

太陽はまだ高く、夕方には少し早い時間に別荘に戻って来た。

戻って来た途端……

「どこに行つてやがった！掃除はとつくに始まってんだよ！サボリ  
恭介！エロ恭介！」

玄関ホールに入った瞬間、由にモップの柄でこ突かれる。

「痛！痛！痛つてえよ！つていうかエロ恭介つて何だよ？」

「有紗さん連れ出して何やってた！このエロ介！」

バシバシとこ突きながら逃げる俺を追い回す由。

「エ、エロ介？何もしてねえよ！散歩してただけだって！っつーか  
痛い！」

「桂さん、やめてください！本当に散歩してただけなんです！」

「有紗さん、気を付けてね！恭介はむっつりスケベだかね！」

「むっつりすけべですか？」

くはぁ…由のヤツ、何て事言つてやがる…

「ばっ 由！何を根拠にそんな馬鹿な事を！」

「うるせー！このエロ本収集オタクめえ！しかも巨乳物ばかり！  
きーーーーー」

バシッバシッ

「テメエ痛！どうして痛い！それを本当に痛い！っつーか論点ずれ

「てるやめてー！」

ようやく収まった由、騒ぎに駆け付けた義人とレオナ。

「まあ、健全な男子であれば、そういった物に興味を持つのは普通でしょう」

レオナが真顔で品川さんに講じている。

「は、はい、それは知ってます…」

恥ずかしい…ちょっと遅れただけなのに、どうしてこんな目に…

「安心して恭介？僕も巨乳は好き ふごっ」

落ち込んだ俺を慰めようとした義人の腹にモップの柄が炸裂した。

## 第十二話

疲れた…

由に散々こ突かれまくった後、掃除、更に夕食の準備…片付け…

片付けを済ませた俺は、あてがえられた客室でダウンしていた。

「たく…これじゃ休みの意味が無いじゃないか…」

療養を含めた小旅行のはずが、普段と変わらず労働している気がする…

品川さんと一緒に居たいが為に、張りきっていたが、流石に疲れた…

由にこ突かれたところも痛いし…

品川さんの前でとんでもない事しやがって…  
恥ずかしい事も暴露するし…

無駄にフカフカのベッドで横になっていると、まどろんできてしま  
う…

まだ8時くらいなのに…眠い…

……

トントントン

……

……

…?

目を開けると、知らない布団…

???

一瞬の思案の後、今が旅行中で、ここが品川家の別荘である事を思い出す。

ドアの方を見る、ノックの様な音が聞こえた気がする。

疲れからか少し痛む体を起こして、ドアを開けてみた。

誰も居ない。

何やら高そうな廊下の照明は弱々しく、廊下は薄暗い…

部屋の中にあつた壁時計で時間を見ると、12時少し前…

ちょっとした仮眠のつもりだったが、寝過ぎてしまったらしい…  
心の中で落胆しながら廊下に出てみる。

ノックの主が気になったからだ。

気のせいではない気がする。

頭の中で彼女の顔がよぎる…

石造りの建物の為か、エアコンも効いていないのに、廊下はひんやりしていた。

廊下の先に少し明るい所があつたので、なんとなく、そこに足を進める。

テラスだった。

明るさの訳は月明かりだった。

3メートルはあるう巨大な窓は、朧陰ることの無い月明かりを受けて皓皎と廊下を照らしていた。

その足元からそびえる巨大な窓には、同じガラス製の扉が付いていた、テラスに出られる様だ。

開いてみた…

テラスへ出てみて驚く、月明かりが照らす眺望は雄大で、吸い込まれそうになった。

建物から突き出るテラスは広がった、テラスには、白いテーブルがある。

人が居た。

テーブルと同じ白い椅子に背中を向けた人が座っていた。

俺の心臓は加速していた。

「……………誰？」

解りきつた事を訊いたと思った。

「……………」

返事は無かった、足を進める。

「えっ？」

彼女ではなかった。

「……なんだ……由か……」

近付いて見ると、見慣れた後ろ姿だった。  
全身の力が抜ける様に緊張も解けていく。

「……………」

「由？寝てるのか？」

何も喋らない由に違和感を覚えて、顔を覗き込む。

ちゃんと起きていた。

そして……

…泣いていた。

「な、おい、どうした？」

「うう……酷いよ……ああ……あああ」

俺と目が合うと、堰を切った様に泣き始める由。

「えっ？何？酷いって俺か？」

「うあああああ」

俺の胸に飛込んでくる由。

訳がわからなかった…

「何だよ、どうして泣いてんだよ？」

「うあああ…うう…あうう…」

嗚咽を繰り返すばかりの由。

さっき、モップを振り回していた、元気な由とは別人の様だ。

由が泣いてるところなんて久しく見ていなかった。

昔は泣き虫だったが、最近はいくらちよっかいを出そうが堪えていた。

由は酷いと言った。

俺に。

そして俺の胸で泣く由。

俺の頭の中はパニック状態だった。

「うう…この旅行で…私…う…」

「由？」

しばらくして、喋りだす由、嗚咽は止まらない。

「ずっと……前から……決めてた……グス……恭介に……うう……告白  
……するって……」

「……！！」

胸に穴が空いた様な気がした。

「でも……自信無くて……グス……恭介寝ちゃうし……でも……今  
日って決めてて……グスッ」

いつも明るくて、わがままで、文句ばっか言って……

「もし……ここに……恭介が……来たら……」

嘘なんてつけなくて……隠し事なんてすぐに俺にバレてたくせに……

「……なのに……」

胸に空いた穴が痛みをおびてきた。

「……『なんだ由か』って……誰だと思ってたんだよあ……うあ  
あああああ」

再び俺の胸で泣き始める由。

痛い。

胸が痛い。

人を傷つける事がこんなに痛いなんて知らなかった。

いつも一緒に居た由…

ガキで恋愛なんて興味が無いんだろって思っていた…

ごめん…

堪えがたい罪悪感が俺を埋め尽す。

彼女に出逢う前だったら…

「…ごめん…由

「……………えっ？」

ちゃんと言わなくちゃ駄目だ。

「俺は品川さんが好きなんだ…」

「……………」

由は何も言わなかった。

嗚咽も治まっていた。

でも俺の胸からは離れなかった。

「……………」

そのまま、空を見上げる。

空気が澄んでいるのだろう、見た事も無い様な星空が広がっていた。

小さい由、いつもより小さい由。

俺は決心した。

告白しよう。

由に誓ったのか…

馬鹿みたいに拡がる星空に誓ったのか…

どっちでもよかった…

そしてその時、俺は気付いていなかった…

ノックの主が由ではない事に…

俺の後ろ…

窓の中の廊下に……

彼女が居た事に…



## 第十三話

目覚めは最悪だった。

あの後、由を部屋まで送って、自分の部屋に戻って来た。しかし、強い罪悪感からほとんど眠れなかった。

眠れなかった俺は、由の事を考えていた。

明け方に少し眠れたが、すぐに目を覚ましてしまった…

気分是最悪…さっきと同じ様に思考を廻らす事にする。

生まれた時から隣に住んでた由、仲良くなったのは幼稚園から…もうずっと昔だ。

由には母親が居なかった。

加えて父親は料理の出来ない無器用だった、だから父子揃って隣家であるウチの店に来る様になった。

俺はいつも店に居た。

小さくて、まだ手伝いなんて出来なかったけど、店が俺の遊び場だった。

だから、いつも来る同年代の由とは、すぐに仲良くなった。由は女の子だったけど、義人より先に仲良くなった。

いつも父親に手を引かれて、店に来ていた小さな由。

ごめんな…ガキは俺だったよ…

時計を見ると、7時。

同じ思考を廻らせば、眠くなれるかと思っただが、鬱うつになるばかりで眠くなつてはくれなかった。

「はあ…」

嘆息…

目を閉じる…

ああ…そういえば朝食を作らないと…

………

ドスン！

「げっぶー」

痛ってー！！

腹部に激痛、目を開ける。

「起きろー！朝ご飯にしようよー！」

由が乗ってた。

「…ゆ…由」

やたらとハイテンションな由にたじろんでしまう。

「レオナがね、今日の午前中は掃除無しだって！みんなで川に泳ぎに行こうって！だから早くご飯にしようよ」

ぐいぐい俺を引っ張る由、為すがままの俺。

どうなってんだよ……

由……

ジリジリと肌を焼く陽光、8月も半ばの太陽は凄まじい威力だ。

これで暦の上では秋だっただから、納得いかない。

朝食を済ませた俺達5人は泳げる川があるという所に向かっていた。今日も快晴、太陽も蝉も、何だかヤケクソの様に自己主張している。

そして由だ。

いつも通り…いや、いつもより、やたらとテンションが高い。

今も困った顔のレオナの手を引いて、先頭を楽しそうに歩いている。

どうやっても昨日の由とはだぶらない…

夢でも見てたのか？

いや、そんな筈ない…

ふと、頭上から降り注ぐ陽光がやわらぐ…

？

「あの…恭介さん…」

「えっ？」

振り返ると、品川さんが泣きそうな顔をしていた。手に持った日傘を俺の頭上に構えてくれている。

「な、どうしたの？」

「いえ、私ではなく、恭介さん、少し調子が悪そうですけど……大丈夫ですか？」

「どうやら俺を心配しての表情だったらしい。」

「いや…大丈夫、大丈夫、ちょっと眠れなかったただけだからさ」

「そう…ですか…お布団が合いませんでしたか？」

本気で心配してくれている。

その純真で綺麗な瞳を見ているだけで、疲れがほぐれていく気がする。

俺だけに向けている、その表情が堪らなく、いとおいしい…

やっぱり俺はこの人の事が好きみたいだ。

「大丈夫だって！多分わくわくしすぎて寝れなかったってやつだから」

「えっ……ああ、ふふふ、そうなんですか？」

俺からのやんわりとした流しは、攻撃力299のクリティカルな笑顔で反ってきた。

赤面してうつ向いてしまった俺は、何も喋れなくなってしまった。



隣にはこのクソ暑い中、メイド服のままのレオナが涼しい顔で立っている。

「ああ、今行くところ。品川さんは？」

彼女も水着は来ていない。

いつもの様に白いワンピース姿だったが、念の為訊いてみる。正直、非常に残念だったのは内緒だ。

「私は…その…泳げないですし…みなさんを見ているだけで楽しいですから」

「ほう…それはそれは…レオナは？」

「人間は浮く様には出来ていません！」

不機嫌そうに言うレオナ…どうやらレオナも泳げないらしい…

「恭介さんは泳げるんですか？」

「ふつ、小さい時には久住ヶ丘の河童と呼ばれたこの俺を…水泳部に入る前の義人に泳ぎを教えたのは俺だよ？」

俺は運動神経に自信がある、今でこそ敵わないが、ちょっと前までは水泳部の義人といい勝負くらいだった。

「では、お披露目と行くところかね…レディ達…」

二人の視線を感じながら、水面に向き直る。

「はあー!!」

ドボン

.....

.....

「痛ったー!!」

足が攣った!

やばいやばいやばい!

ざぶざぶと溺れる久住ヶ丘の河童。

「恭介さん!!」

「ふ、藤村様!!」

二人の慌てふためく声が聞こえる。

「恭介ー!!」

水泳部義人の声も聞こえる、バシャバシャと泳いで駆け付けてくれる。

やばい.....死ぬ.....

あ

足付くし…

ざぶつと立ち上がる。

「恭介！大丈夫かい？」

義人が俺にギュウツとしがみつく。

「何だよ、キモいな…」

ぴしつと凍りつく義人。

「恭介、大丈夫？」

浮き輪に収まったままの由もバシャバシャと駆け付けてくれる。

「ああ、足付くし大丈夫だ」

「ここは僕の見せ場じゃなかったのか…ここは僕の見せ場じゃなかったのか…ここは僕の」

何やらぶつぶつ言ってる義人は無視して、由の浮き輪にしがみつく。

「体操しないで飛込むからだよ、バカだね」

普段と変わらない由に嬉しくなってしまう。

「お前だってそうだが、その浮き輪貸してくれよ、足の痺れが取れるまででいいから」

陸が上がって休めばいいのだが、由と遊びたかった、由を楽しませたかった。

「やだよ、一回上がって休憩しなよ」

「何だよ…由らしくないな、そんな事言つなよ」

いつもなら休憩なんか許されないはずだ。

「いいから、今は上がって休んで？………ほら、待ってるよ？」

「えっ？」

由の即す方を見ると、品川さんとレオナがおたおたと右往左往していた。

「チャンス！」

ぐいっと親指を立てる由。

「……由……」

いつも通りの明るい由に戻ってくれたと思っていた。

違う。

俺より大人なだけ…

由がどこか遠い所に行ってしまった気がした。

寂しかった…

でも…

ありがとう…由…

## 第十四話

……

何だろう……

ふわふわする……

あと……いい匂い……

何をやってたんだっけ？

っていうか、ここはどこだ？

青空……？雲……？品川さん……？

「えっ？」

意識が覚醒する。

「おはようございます、恭介さん」

「お、おはよ……」

俺は寝ていた、目に映るのは青空とちよつとの雲……  
視界の隅に品川さん……

頭の下に、やたらとやわつこい感触……

……

「だああああああ！！！」

がばつと体を起こす！

膝枕だ！膝枕だよ？品川さんが膝枕だよ！！

「ふわあ！き、恭介さん？」

「ぐぐぐぐごめん！ひひひひひ膝枕あああ！！！」

何だか、もう訳がわからない。

「恭介さん？どうしましたか？しっかりして下さい！」

完全に錯乱状態の俺を必死になだめてくれる彼女。

「本当にごめん！」

手を付いて謝る俺。

「ですから、私が勝手にやった事なんです」

さつき川に飛込んで溺れた後…

陸に上がった俺は、品川さんとレオナにやたらと献身的に介抱された。

それで、気持ちよくてついうとうと……

「って、あれ？みんなは？」

見回すと品川さん以外のみんなの姿が無い…

「みなさんには戻って頂きました。恭介さん…気持ち良さそうでしたので…」

着替えのズボンから携帯を引っこ抜いて、時間を見る、  
午後1時…

「あう…ごめん…」

もう謝るしかない…

「い、いいんです…私が無理に残っただけですから…」

俺の為？…に決まってるよな…

「レオナ…よく反対しなかったね？」

「しました…でも…桂さんが…無理矢理連れて行ってしまいました…」

……由…

「…そう…か…」

「…はい……」

会話が止まった。

至る所から聞こえてくる蝉の声。

避暑地の高原、水際の木陰は涼しい。

彼女は少し視線を外して口を開かない…

俺は考えていた。

これはチャンスではないか…  
由が作ってくれたチャンスに違いない…

わざわざ俺の為に残ってくれた彼女…  
俺に好意を持つてくれているのか？  
少なくとも嫌われてはいない…  
それは間違い無い…

綺麗な彼女…優しくて…ちょっとだけドジで…笑顔がかわいくて…  
ちよつと胸が大きくて…

………

あれっ………

他は？

俺は彼女の何処を好きになつたんだ？

容姿？

店の客にも見せている笑顔？

同じ様に誰にでも振る舞う優しさ？

少し不安になった…

彼女を見てみる。

目が合った。

澄んだ瞳に俺が映っている。

いや、理屈じゃないんだ…彼女と出逢ってから、数週間…かけがえの無い物である事は確かだ…

告白…告白するぞ…

口の中に溜った唾を飲み込む。

「……恭介さん…私の話を訊いて頂けますか？」

「あの…えっ？」

「私の話を…訊いて下さい…」

言葉を繰り返す。

「う、うん……」

彼女の真摯な瞳と態度にのまれてしまう……

「ありがとうございます……」

うつ向き、体をこわばらせる彼女……

言葉を選んでいるのだろうか……

俺はうるたえたまま、彼女を凝視してしまう……

そして……

懺悔……

彼女の行動にそう連想してしまう。

「……恭介さんも、もうご存知だと思えますが……私は……財閥令嬢です。品川グループ総帥……品川光一郎の……一人娘です」

驚いた。

金持ちの娘とは思っていたが、想像以上のスケールの大きさの様だ。

「品川グループは私達の住む町……久住市を担う大型の企業集合体の一つです……そう……国内でも有数の財閥の一つです……」

「……………」

彼女が何を言いたいのか、わからなかった……でも自分の家の豊かさをひけらかしている訳では無いと思う……彼女は今にも泣きそうな顔をしているから……

「その娘である私は籠の鳥でした……」

「……籠の鳥？」

「はい……一人娘として両親の期待を背負った私は、屋敷で……学校でとこれ以上無い程の教育を受けてきました……」

どこか遠い目をした彼女は、自分自身を嘲笑うかの様に薄く笑っている。

「学校に行くとは誰もが私に挨拶をしてくれます……ひれ伏しながら……クラスメイトも……先生でさえも……」

「……」

水際の木陰といっても夏、暑い筈なのに、彼女の顔は青白かった。でも淡々と話す彼女に気遣う隙は無い。

「彼方からは歩み寄ってはくれなかった……怖かった……何か別の生き物を見る様な目が怖かった……」

がたがたと奮える彼女……普通じゃない。

「ちよつと！大丈夫かよ！」

「……？」

俺が声を掛けると、ぴたりと奮えが止まる。  
首を傾げて俺を見つめる彼女…

「……続き…訊いて頂けますか？」

「う、うん…」

少し…怖かった…

「屋敷でも同じでした…何人居るのかわからない使用人…誰も彼も…人形の様…レオナでさえも…怖かった…ふふ…」

ついには、声に出して笑いだす彼女…

目は虚ろ…虚空を捉えた彼女の視線が痛々しい。

「そしてお父様…優しかったお父様は変わってしまった…あの人を表現するなら…品川家の娘がこの様な言葉を使う事は許されないのですが…他に言葉が見つかりません…あの人は…金の亡者…うう…」

泣き出してしまう彼女…

わからない…

どうして彼女は俺にこんな話をしたのか…

「…うう…ごめんなさい…ごめんなさい…」

???

「い、いや、品川さんは悪くないでしょ？謝らないでよ」

「…籠の鳥の私には…何も…うう…ごめんなさい…ごめんなさい…」

謝り続ける彼女…

小さくなって奮える彼女は痛々しくて見ていられなかった…

うだる様な暑さの夏…

照り付ける太陽を背中に受けた俺は…

泣き続ける彼女に何もしてあげられなかった…

彼女の見せた涙の理由も…

彼女の心の深淵に広がる、もっと暗い悲しみも…

理解してあげられなかったんだ……

## 第十五話

帰りの車の中。

助手席に座る彼女の後ろ姿を、後部座席から見る。

自分の事を話して、泣き出した彼女…

そして謝罪…

彼女は俺に何かしたのか？

いや…何もしてない…

出逢ってから、懸命に、そして楽しそうに働く彼女の姿しか見ていない…

仕事の上でのフォローはしたが、その程度であんな状態になるなんてあり得ない…

俺に何を求めたんだろう…

それとも、俺は由に続いて品川さんも傷つけてしまったのだろうか…

あの後、取り乱した彼女が落ち着くまで待って、別荘に連れ帰った。

彼女はあの謝罪以来、口を開いていない…

重い…

車中の空気が重い…

右には、何やらジト目の由…

多分俺が振られたと思っっているのだろう…

左には、蒼白でこの世の終わりの様な顔をした義人がハアハアして  
るし…

左前、運転席のレオナにはバックミラー越しにたびたび睨まれる…  
明らかに目の赤い品川さんを見て、俺がどうにかしたと思っ  
ているのだろう…  
怖い…

右前…助手席の品川さん…

酷く落ち込んでいる様に見える…

うつ向き…誰とも目を合わせようとしな…

楽しい旅行の帰り…

ずーんと暗い車中…

………

お…俺のせいかなあ………

数時間後…

地元に帰ってきた。

「では、桂様、土屋様、ごきげんよう……」

家の前まで送ってくれたレオナ、二人に挨拶する……俺は？

「うん、ごきげんようだよ、レオナ」

「……………ハアハア……」

「レ、レオナ……俺もごきげんようだよ……はは……は……」

「藤村様……品川家を甘くみない事ですね……」

ギロリと恐ろしい流し目で俺を射抜くレオナ。

……うわあ……何を言っても駄目そう……

「では、失礼します……」

ブーンとレオナと品川さんを乗せた車は行ってしまった。

品川さんは結局、一言も口を開かず、顔を上げる事もなかった……

「……………ハアハア……じゃあ……二人とも……バイバイ……ハアハア……」

義人はよろよろと自分の家に行ってしまった……

「……………玉砕？」

義人を見送ったままの状態で、由がぼそりと呟く。

「由…俺は何もしてない、話を訊いただけだよ…」

「ふーん…恭介がそう言うなら私は何も言わないけどさ……………でも  
…………何かあれば言うてね…力になるよ？」

「…………由…」

力なく笑いながら言う由…頑張つて作った笑顔…

「じゃっ、ばいばい」

右手を挙げて家に入つて行く由を見送る。

手を挙げたまま、桂家の玄関を見つめる…

「…ばいばい……………」

既に居ない由に別れを告げた。

その日の夜。

勝手口からずかずかと上がり、義人の部屋を訪ねる。

土屋、藤村、桂の家は24時間、勝手口を開けっ放しである。俺達三人はそれぞれの部屋を特に気にせず行き来している。

「義人？ちよつといいか？」

「恭介？いいよ、どうぞ」

部屋に入ると義人は勉強をしていた、本当に真面目なやつ…

「…いや…ちよつと相談があつてさ…」

「恭介が僕に相談？…うん、どうしたの？」

テキストを閉じて、少し真面目な顔で俺に向き直る義人。

適当に座って、俺も向き直る。

「……………」

こういう事を義人に話すのは、初めてだった…義人とは何でも話し合える仲だが、少し話し辛い…

「…品川さんの事なんだ…」

「…うん」

全く表情を崩さない義人、話す内容をわかっていたという反応だ。

「…彼女…すっごいお嬢様らしい…んだよ」

「名字からそうじゃないかなって…思ってたよ」

「えっ？」

「品川建設、品川重工、品川水産、品川記念病院…この町には彼女の名前が余りにも根付いているよ…確信したのはレオナを見た時だけだね」

「そ、そうか…確かに俺も聞いた事あるのばっかかも…」

「とうかがこの町に住んでいれば常識だよ？この町を作ったのは品川、毬谷、八千代の三つの大富豪なんだよ？」

「な…何それ？」

「小学校でも習う常識だよ？」

「へ、へえ…」

「そうだったっけ？」

「凄く凄くとは思っていたが…」

「で…その品川さんがどうしたの？好きになっちゃった？」

「ぎくっ！」

「……義人？」

「ははは、恭介は本当にわかりやすいなあ」

「…………マジかよ……」

「好きなんだね？」

「……ああ…………好きだよ……」

「…………そっ……か…………」

どことなく残念そうに言う義人。

「そんなに俺わかりやすい？」

「はは…恭介はわかりやすいって言うより、バレバレだと思っな…僕だけじゃなくて、由もわかっていたと思うよ？」

「えっ？……………由も……………」

そうなのだろうか…  
いや…そうだろう…

由は知ってて俺に…

「……………由……………言ったんだね？」

「えっ？」

「…由に…告白されたね？」

「…ああ…義人…お前…」

「うん、由に相談されてたよ…ずっと…ずっと…前からね…」

……？少し辛そうに言う義人。

「……そっか…由…駄目だったか…」

「……俺は…品川さんが……好きだから…な……でもな……義人……」

言いよどむ…

「……………」

「実は俺…さっき義人が言った様な品川財閥なんだっての、今日知ったんだ…」

「…うん」

「なんか別世界でさ…俺には考えられないところで苦しんでるらしいんだ…彼女……泣いてて…俺…何て言っただいいか…わからなかった…」

義人は真摯に訊いてくれている、でも話の内容までは言わなかった。

「もう一度訊くけど…彼女が好きなんだよね？」

「えっ…あ、ああ…」

「わかった…じゃあ僕の話しよう」

???

「僕ね…由が好きなんだ」

「えっ？」

あっさり言う義人に、思わず顔を凝視してしまう。

「はは…意外？でもね、恭介、僕は…そうだな…小学校低学年くらいの時から由が好きなんだ」

驚いた。小学校低学年といえば、もう十年も前だ。

「だけど由は…僕と同じ時から…恭介が好きだったんだ…」

困った様な顔で言う義人…

俺は何も言わなかった…言えなかった。

「由が恭介を好きなのは知ってた…恭介が品川さんを好きなのも知ってた…それで旅行で由が恭介に告白するかもって訊いた時は…正直…迷ったよ…」

「言っちまえばよかっただろ、そうすれば」

「言えるわけないだろ！！」

「！！！」

絶句した。

義人にしては大きな声だった。

「わ、悪い……」

「僕も……ごめん……」

義人も申し訳なさそうにおし黙る……

「……………恭介ってさ……僕達の事にしても、お店の事にしてもさ……不満は言うけど結局手伝ったり、力になってくれるでしょ？」

「あ……ああ……」

急に俺の話になったので生返事をしてしまう。

「いつでも誰かの為……僕にとって恭介は憧れなんだ……恭介は同じ立場にたったら……どうする？」

「……………」

義人だったら……由だったら……

絶対に言えない……

協力するから頑張れ……

そう言っちまう……

「由も同じだと思うよ……ずっと恭介を見てきたんだ……身近に居る人の為ってというのは……三人一緒……だよ？」

そこで、ふと夕方の由の言葉を思い出す……

『でも……何かあれば言っただけ……力になるよ?』

「……………」

「品川さんと何を話したのかわからないけどさ、彼女が泣いてたな  
ら……」

「……………」

「恭介が笑わせてあげなよ……」

その通りだと思った。

俺らしくなかった。

何を迷っていたのか……

だいたい振られる前から何を落ち込んでんだ俺は……

「ありがとう……義人……振られると思うけど、頑張ってみる」

「振られる?それは無いと思うけどな……」

「えっ?何?」

「何でもないよ……」

## 第十六話

お盆明け、営業再開初日の朝。

俺は彼女を待っている。

旅行の後、彼女には会っていない。

今日はちゃんと来てくれるだろうか…

そう思っていると店の扉が開いた。

「…おはよう…」

弱々しく店の扉が開き、伏し目気味の彼女が出勤してきた。

「おはよう！品川さん！」

相変わらず元気の無さそうな彼女が気になった、でも元気に挨拶してやる。

「は、はい、おはよう…」

驚いて顔を上げた彼女だったが、すぐに目を反らさず。

「…本当にどうしたっていうんだろ…」

……

でも……

義人…由…

俺はやるぜ！

「ふははははははー！」

「ひいー！」

あ…思わず声に出して笑ってしまった…  
品川さん怯えてるよ…

午前11時、開店。

「いらっ…しゃい…ませえ…」

どよ〜ん…

「う、うわぁ！どどどうしたんですか？」

元気が無いどころか、四谷怪談ばりに怖い品川さん…  
お客がビビるからやめてくれ。

「品川さん、大丈夫？俺が配膳やるから奥で休んでてもいいよ？」

「…大丈夫です…ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

ふらふらと注文を訊きに行く彼女…

うわぁ…重症だよ…

「…品川さん…」

…俺が元気付けてあげないと…  
旅行2日目の午後…あの時の彼女に何も言っ  
てあげられなかったか  
ら…

彼女の笑顔が見たい…

彼女の不安を取り除きたい…

最早、俺は使命めいたものを抱いていた。

午後3時、今日は平日、絶賛営業中。  
混雑時を終え店は閑散としている。

彼女は先ほど食べ終えた団体客のテーブルを片付けている。  
力無く食器を集め、テーブルを拭いていた…

もう見てもらえない…

「品川さん？手伝うよ」

「…恭介さん…私がやりますので…」

目を合わせてくれない…

俺は構わず手伝う。

カチャカチャと食器を集める俺：  
彼女は下を向いてテーブルを拭いている。

「あのさ…俺なんかがこんな事言っでいいかわからないけどさ…」

昨日、義人と別れてからずっと考えていた…あの時何を言っであげ  
るべきだったか…

「品川さんの家がどんな家かわからないし、家の人がどんな人かも  
わからない…」

「……？」

ゆっくり顔を上げた品川さん…あの時見た瞳と違いその目は暗くく  
すんでいた。

「俺が何をすればいいかとか、何を言っであげればいいかとか…わ  
からない…」

彼女の顔は蒼白…元々白い肌は生気を失い、表情は絶望を思わせる  
様に悲しい色をしている。

「でも…俺は………」

寝ないで散々考えたが、行き着く答えは一つだった。

難しくなんて言えない…

一言だけ…

「…一人にしないから…」

彼女の瞳に光が挿した気がした。

「…恭介さん…」

やべ…止まんね…

「俺は品川さんが…好きだから…」

「……………」

しーん

あ…言っちゃった…

店内の少ないお客達が『うわ、やっちゃったよ、恭ちゃん』って顔してる。

品川さんを見ると、真っ直ぐに俺を見つめて固まっている…

???

「恭介さん!!」

俺に飛び付く彼女…

えっ?

「えっ?」

「不安でした…嫌われてしまったと…あの事は言わなければなりませんでした…でも…後悔して…不安で…不安でしたあ…う…」

「……………品川さん……………」

店内のみんなの視線がすごい気になったが、それどころではない…

「うう…恭介さん…恭介さん……………」

泣いている彼女…

これでもかって位に俺に体を擦り寄せてくる…

「し、品川さん?」

この反応でわかる。

彼女も俺と同じ気持ちでいてくれていた。

嬉しい…すごい嬉しい…いろんな意味で嬉しい…

しかし…

しかしだよ品川さん！

店内のお客全員が口を開けて愕然としている。

厨房から出てきたお袋と親父もお客と同じ顔をしている。

どうすればいいんだ？

こんな時はどうすればいいんだ？

「こんにちは、恭介」

義人来店…後ろには由も居た。

「「あ」」

二人して絶句。

「義人…由」

畏に掛った野生動物の様な視線を送ってしまう俺…

「は…ははは…取り込んでるみたいだから、後にしようかな…ははは」

引きつった笑いで後退りする義人。

「うわあ〜ん…恭介のばか〜！」

由は目に涙を溜めてスタコラッシュするし！

「待あ…待あつてくれえー！」

「恭介さん…恭介さん…」

すりすりしてくる品川さん…

「ふおおおう！」

いろんな意味で俺が限界だった。

夕方の混雑時を終えた頃、俺は品川さんを送っている。

結局、あの後品川さんは小一時間離れなかった。

混雑時になっても注文を取ったり、配膳をこなした後は俺にべったりだった。

流石にお袋の激が飛んできて、まとめて追い出されてきたところだ。信じられない事だが、かなり愛されてるみたいだ。

「恭介さん…」

今も初めて送った時の様に俺の左腕を抱え込んで超密着している。

「あ、あの…品川さん…俺は別に逃げないから…その…あんまり…」

近いつていうか…いや…嫌じゃないんだけど…俺…あんまり免疫無  
いっていうか…」

というより理性が持ちそうにない…

「いやです!」

「えっ? いや、あの…品川さん?」

「いやです…有紗とお呼び下さい…」

あ、そっち?

「う、うん…あ、あ、有紗…さん…」

き、緊張するう!

「有紗です」

「えっ?…有紗さん?」

「有紗です」

「……あ、ありさ……」

「はい、恭介様」

恍惚の表情で微笑み、また俺の左腕に体を埋める彼女…

な……なんか同じ様な問答があつた気がする…

ってというか恭介様って…

という訳で俺と有紗は付き合う事になった。

俺は浮かれていた…

しかし……

夏休みが終わるまであと十日…

隣で微笑み掛けてくれる彼女…

執拗なまでの彼女の行動…

俺にすぎた悲痛な訴えだった…

この時、彼女はすでに限界だった。

## 第十七話

午前11時、久住ヶ丘駅南口。

水曜の定休日、俺は駅前にある何やら訳のわからんオブジェの前で佇んでいた。

高級住宅街側である南口、無駄に広い駅前：レンガ造りの歩道や統一された建物は、よくわからんがお洒落っぽい。  
ちなみに俺ん家側：北口にはロータリーすら無い。

脇には駅と合体したオープンカフェ：セレブなおばさんがティータイム中だ。

デカイ帽子被って扇子で優雅にぱたぱたやってる。  
暑いんだったら中行けよ！席空いてんじゃん！

……

嗚呼…暇潰しに人間観察してたら余計に暑くなってきた…

暑い…額からはたらたらと汗が吹き出てくる。

「今年の太陽は攻撃的だぜ！ふはははははははははは！」

……

思わず訳のわからん事を叫んでしまった…さっきのおばさんがイタ  
い目をしている…

いかん…暑さにやられたか…

どうしてこのクソ暑い中…しかもせつかくの定休日に…佇んでいるかというと……

「恭介様……」

消え入りそうな声と共に俺のTシャツがくいくい引っ張られる。

「……有紗……」

振り返ると有紗が居た。

そうなのだ、今日はデートなのだ。

「……ごめんなさい……遅刻してしまいました……家を出るのに……手間取りまして……」

心底申し訳なさそうに謝ってくれる有紗。  
待ち合わせは11時、今は11時15分……  
別に遅刻くらい全然構わない。

そんな事よりも有紗の気持ち沈んでいる事の方が重要だ……

「いいよ、俺も今来たところだから」

すごい棒読み……

実は一度言ってみたかった。

「……恭介様……」

ホツとした様な顔をする有紗。

……嬉しくなった。

俺の緩い頭の中で考えた言葉に安心してくれる彼女…  
浅はかに言ってしまった自分を少し恥じたが、彼女が喜んでくれる  
なら良しとしよう。

とりあえず昼食という事になった。

「あもう…有紗…」

なっただけけど…

「はい、恭介様」

目の前の見慣れた建物を見やる。

「なんで家なの？」

彼女が行きたいと、ねだってきたのは藤村食堂だった。

「あ…その…私…」

もじもじしながらチラチラ俺に目配せする有紗。

「恭介様のご飯が食べたい…です…」

「……………」

こゝこいつめえ…

どうしてそう俺の琴線をくすぐるんだ。

「駄目でしょうか…?」

不安そうに俺を窺う。

「………… 駄目じゃないよ、さあ入ろう」

「…はい、恭介様」

俺が了承して笑い掛けると、すぐにまた安心してくれる。

この笑顔が見れるならどんな事でも了承してしまいそうだ。

「ただいまー」

家の正面玄関も兼ねている店の入り口を開く。

「おかえりー…つて恭介?」

家の台所も兼ねた厨房からお袋が顔を出して驚いている。

「何だい…あんだ、いきなり振られてご帰宅かい？」

なぜかデートの事を知ってるっぽいお袋は失礼な事を言う。

「私かわがママを言ってお店での昼食を希望したのです…申し訳ありません…お母様…」

「」

お母様絶句。

俺もつられて絶句。

有紗…いきなりお母様って…

「ただいまーっ」と

親父が呑気に現れた、どこかに行っていたらしい。

「お父様、お邪魔しております」

「」

藤村家全滅。

「あ、あれっ？恭介様？」

ちなみにこの『恭介様』だが、流石にそれはやめてくれって言うても…

『大切な方を軽々しくお呼びする事なんてできません』

との事だ。

「お母様、お父様…どうぞ」

テーブルに料理を並べる彼女。

結局、昼食は四人で食べる事になった。しかし作ったのは俺で配膳は有紗、お袋達はお客状態だ。

せつかくのデートなのに、いつも通りだった。

「悪いね…有紗ちゃん」

「いえ、いつもお世話になっておりますし…恭介様のご両親様ですし…」

「……………恭介…あんた弱味でも握ってんのかい？」

「んな訳あるか！とにかく食べようよ！ほら親父！いつまで感動してんの！」

「お、おお…すまん…では頂くとしよう」

『いただきます』でみんな食べ始める。

いつもは俺が作ると駄目出しばかりされるが有紗の手前もあり、今

日は無いらしい。

お袋も親父も黙って食べている。

幸せそうに食べてくれている有紗…

ふと思う。

夏休みが始まった頃…

彼女がアルバイトとして初日の日…

こうして四人で賄いを囲んだ事があった。

有紗はあの時と変わらずお嬢様だし、あの時俺が洩らした言葉の通り美人だ。

でもあの時感じていた違和感は無くなっていた…

理由は簡単だった。

彼女が笑ってくれているから。

午後。俺達は駅前に戻って来ていた。

でも南口では無く北口だ。

北口は駅前にはシヨボいが、駅から続くアーケードは活気がある、港

が近いせいもあるのだろう。

別に何をする訳でもない、ぷらぷらしてるだけ…

さつき昼食を食べた後、有紗が…

『恭介様の部屋に行きたいです』

なんて言い出して、部屋に連れて行ったが…

「うおおおおお！！3 / 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3  
8 4 6…」

…と理性の崩壊の危機に陥った為、外に脱出してきた。

アーケード街を歩き交う人々の視線が痛い、奇異の視線。

そりゃそうだろう…

冴えない男に高級そうな美人がへばりついてるんだから…

すでに定位置とばかりに、俺の左腕に密着している有紗…  
彼女は一緒に居ると必ず俺に触れてくる、嬉しいんだがちょっと暑  
い。

アーケード街を出た俺達は海浜公園に来ていた。

途中、洋品店で新しいエプロンを買った。

彼女の見立てで買ったのだが、レースのひらひらが付いたピンクのエプロンだ。

……俺用だ……

「……………」

「……………」

日陰のベンチに座り、二人で黙って海を見ていた。

彼女の希望だった。

かれこれ2時間は経つ……

相変わらず彼女は俺の左腕に収まっている。

「時間…大丈夫？」

まだ太陽は高いが訊いてみた。

「大丈夫です……」

何も言えなくなってしまう……

ここに来て2時間…最初はお喋りをしていたが、話すネタが尽きる

のは意外に早かった。

除々に行き交う人達が少なくなってくる。

太陽も傾き始めていた。

「…有紗？夜になっちゃっうよ？」

「…恭介様は…夜にご予定が？」

「い、いや…無いよ」

「では…このままで…お願いします…」

「…あ…ああ…」

公園の街灯が着き…

蝉もおとなしくなり…

まばらだった通行人も無くなり…

波の音がやけにうるさかった…

もう何時間も掴まれている腕は感覚が曖昧になってしまっている…

会話の無い空間は彼女の存在も曖昧にしまっている。

取り憑かれた様に俺に体を預ける彼女は糸の切れた人形の様だった…

彼女を送り届けたのは、日付が変わってからだった。

## 第十八話

深夜3時頃。

（

陽気な着信音が響く、由が勝手に設定した何やら流行っている歌だ。もぞもぞと布団から這い出し、滅多に鳴る事の無い携帯を取る。

「……………もしもし……………」

『……………恭介様……………』

有紗だった。

電話の相手が有紗だというのはわかっていた。通知を見た訳ではない。

「……………どうしたの？」

この質問の答えもわかっていた。

『……………ごめんなさい……………声が聴きたくて……………』

彼女と話したのは30分前……………

ついさつきも同じ内容の電話があった。

その少し前にも似た様な電話……………今日だけでもう何度目の電話かわからなくなっていた。

「……………有紗…大丈夫？」

「……………一人だと……………不安なんです…恭介様…」

「…大丈夫だよ…すぐに会えるよ？安心して？」

『…恭介様…』

彼女と付き合いだして一週間…

最近は毎晩こんな感じだった。

彼女は…異常だった。

「ふあああ……………」

…営業中…

俺は仕事をしながらも欠伸を連発していた。

「何だい、恭ちゃん、眠そうだね？大丈夫かい？」

常連の宮田さんが心配してくれる。

「大丈夫だよ…ありがとう…」

そう言いながら、どうしても有紗を見てしまう…  
彼女は別のテーブルで注文を訊いていた。

「あっ！恭ちゃん…まさか…」

「えっ？何？」

「有紗ちゃんが寝かせてくれないとか？」

「「「なあにー！！」「」」

店内の漢達（かい）が一齐に俺を凝視した。

実際その通りなのだが、彼等が思っている様な事実は無い。

「有紗ちゃん、本当なのかい？」

「どうして恭ちゃんなんだあ！」

「だいたいそのふざけたピンクエプロンはなんなんだ！」

「しかし恭ちゃんと有紗ちゃんが付き合う事になるとはねえ…」

やんややんやと騒がしくなる店内。

俺は冷やかしの声に恥ずかしくなってしまう。

有紗は少し嬉しそうに照れていた。

「恭ちゃんのどこがいいの？」

お、これは俺も気になる……

「あ、その……全部です……素敵で……優しくて……暖かくて……」

……有紗……

「じゃあさ、ちゅーはしたの？」

な、何訊いてやがるんだ、このオッサンは……

「……あ、いや、その……」

オロオロと俺に助けを求める様な視線を送ってくる。

「……ったく……はい、しゅーりょー！有紗が困ってるから終わり！」

俺も恥ずかしくなってきたので無理矢理終わりにしてやる。

逃げる様に俺の側に来る有紗。

はしっと受け止める俺。

……

うるんだ瞳で見上げてくる……

「……」

「……………」

なんとなく見つめ合ってしまう俺達…

「…有紗……………」

「…恭介様……………」

口を開けて愕然とする常連達に囲まれて、俺達は…………

ぶおん

ドゴツ

「……………！！」

ず…寸胴（デカい煮込み鍋）が飛んできた…もちろん俺だけに。  
あまりの衝撃に声が出ない…

「店の中でイチャついてんじゃないよ！このバカツプル」

なんて物を投げやがる！下手したら死ぬわ！

「恭介様！」

俺を気遣ってくれる有紗…

やせ我慢して微笑み掛けようとしたが…

笑えなかった。

化粧で誤魔化していた様だが、よく見ると彼女の目の下には異常な程の隈があった。

どうにか気力で混雑時を乗り切った。

もうお客も数人…気を抜いて椅子に腰掛ける。

「はあ…」

疲れた…

毎日の仕事に加えて寝不足…

有紗の為とはいえ、体が悲鳴を上げ始めていた。

「恭介様…お隣…失礼します…」

有紗も疲れたのだろう、隣の椅子に腰掛ける。

「恭介様…」

体を預ける様にして肩に頭を乗せてくる。

俺も慣れてきたのだろうか…彼女に身を任せろ。

いつのまにか、周りの視線にも気にならなくなっていた。

俺は有紗を笑わせると決めた。

でも…ここ数日…彼女の笑顔を見ていない…

いつでも一緒に居る…

病的なまでに俺を求めてくれる…

でも見せてくれるのは人形の様な笑顔だけ…

親密になればなるほど彼女との距離が開いて行く気がした…

自己嫌悪に陥りながらも思ってしまう…

俺は彼女がわからなかった…

「こんにちは」

お客が来た、武藤さんだ。

「ああ、武藤さん、久しぶりです」

有紗から体を離し、立ち上がる。

武藤さんは7月の終わり、有紗がバイトし始めた頃に来たきり随分久しぶりだ。

「いやあ、忙しくてねえ…お嬢さんも久しぶりだね」

相変わらず忙しいらしい。

「……………やい…」

「えっ?」

有紗がぼそぼそと呟いている。

「…帰って下さい!」

「えっ?えっ?あ、有紗…何言ってるんだよ」

「な、何?どうしたの?有紗お嬢さん?」

「帰って下さい!」

大声で叫ぶ有紗、明らかに様子がおかしい…こわばった表情で目は血走り、涙を溜めている。

「ちよつとちよつと、どうしたの?」

奥からお袋達も出てきて驚いている。

のんびり食べていた他の客も啞然としている。

結局…武藤さんはひどく落胆して、帰って行った。

「…で…どうしたの?武藤さんに何かされたの?」

俺が事情を訊く事になった。

店は暇な時間帯なので、俺の部屋に連れて来ていた。

「いえ…私には…何も…」

???

「私にはって…ん？わかんないよ…どういう事？」

さっぱりわからなかった…

はつきり言って武藤さんはいいい人だ、俺には彼女が彼を嫌う理由がわからなかった。

「ち、違ってます！このままじゃ、お店が…お店が！」

ひどく取り乱す有紗…俺にしがみ付いて必死に訴えている。

「ち、ちよつと…有紗！店って…ここか？」

「私の…私の…ここしか無いんですう…恭介様…うう…」

俺にしがみ付いたまま泣きだす有紗…

狂った様に俺を抱き締めてくる。

何も言えなかった…

彼女が何に脅えているのか気になった、でもひどく取り乱す彼女に  
追求はできなかった。

「…わかったよ…ごめん…」

しばらく泣いていた彼女…いつのまにか俺の胸で眠っていた。

「はああ…」

一際大きなため息をつきながら布団に飛び込む…

ひどく疲れていた、布団が気持ち良かった。

目を覚ました彼女を家に送り、夕方からの配膳を一人でやった。

後は寝るだけ…

体は疲れ果てている筈なのに…

眠りたくなかった…

「有紗…」

自分の口から溢れ落ちた名前に胸が苦しくなってしまう。

無造作に放り投げた携帯を見る…

今夜も眠れないと思いつながら……

## 第十九話（前書き）

2007年の8月は31日が金曜日、1日2日が土日ですが、この小説はそれを無視した仕様になっております。よろしくお願ひします。

## 第十九話

「……ああ…今は眠ってるよ………ああ…勝手に上がってもらって構わない……ああ………」

携帯を切って視線を落とす…

「………はあ………」

俺の膝で眠る有紗を見ると、深いため息を洩らしてしまう。

今は深夜1時。

エスカレーターした有紗は真夜中であろうと俺の側に来る様になっていた…

慌ただしく過ぎていった夏ももう終わる…

8月31日…夏休み最後の日が始まってすぐの事だった…

「お邪魔致します、藤村様……」

「ああ、レオナ……こんばんは……」

さっきの電話の相手はレオナ、有紗の携帯を拝借し、事情を話して来てもらった。

「お嬢様……」

有紗を見て悲しそう顔を歪める……

「レオナは……俺達の事……知ってるの？」

「……存じております……お嬢様の行動……携帯の履歴……失礼ですがそれらから判断させて頂きました……」

「……はは……そっか……すごいな……」

流石は品川家……籠の鳥か……

「……申し訳ありません……」

俺に深く頭を下げるレオナ。

「……俺は別にいいよ……でもやっぱり……有紗が可哀想だ……」

「…………はい……申し訳ありません……」

「だから俺はいいって……機会があったら有紗に言ってやってくれ……それより今は有紗だよ……レオナ……」

布団に座る俺の膝の上で眠る有紗…

連日連夜の電話…それは別によかった…  
でも眠ってた俺の前に彼女が現れた時は本当に驚いた…  
夜に付き合ってる男の部屋に来る彼女…  
夢みたいな状況だが、これは違う…

異常だ…

「驚きました…有紗お嬢様の行動とは思えません…」

「…有紗とは思えない……か……とにかく…連れて帰るか？俺が消えてもいいけど…」

有紗はレオナに任せて、俺は義人の部屋にやつかいになればいい…

「いえ…藤村様はお嬢様のお側に居てあげて下さい…私もお付き合ひ致します…」

「…それはそれで、また問題があるんだが…」

朝になったらお袋に殺される…

「しかし藤村様…大丈夫ですか？」

「ん…何が？」

「…藤村様の事です」

俺の事らしい…

寝不足に加え、ここ数日は心労から食事も喉を通らない。

見た目にもわかる程、俺の状態はひどいらしい…

親達も心配してくれて店を休む様に言われたが、何かしてないと落ち着かなかつた…悪循環だ…

「俺は…大丈夫だよ…それよりレオナ…有紗…」

「……藤村様…」

かなり心配してくれるレオナ、有紗も似た様な状態だから重なってしまうだろう。

「……藤村様……少しお話ししたい事があります」

何か決意めいた表情のレオナ。

「……？」

「お嬢様は藤村様を一番に信頼していると思われま…」

さつきも見た悲しそう顔をして俺を真っ直ぐに見るレオナ。

「藤村様も…有紗お嬢様を信じる事が出来ますか？…」

……

レオナの真摯な態度…レオナが話そうとしているのは有紗の話だ。それもかなり深いところの……

レオナも話すのを躊躇っている感じだ…

それでも話そうとしてくれている…

レオナは俺を話すに値する人間であると信用してくれている…

それに対してただ相槌を打つだけなんて嫌だった。

「レオナ……俺さ……異性を好きになった事がなかったんだよ

……」

「…藤村様？」

見当違いの返答に目を丸くするレオナ。

「…一番身近に居た由に振り回されていたからかもしれない……ちよつと異性とは一線引いてたんだ……」

話の脱線に驚いていたレオナも俺の真剣さを察してか真面目に訊いてくれている。

「だから有紗に告白しようとした時も少し不安だったんだ……」

旅行2日目の時…

告白しようとした時に感じた自分の感情の違和感…

「綺麗な有紗を好きになったのか…優しい有紗を好きになったのか…それもあると思う……でも…一番は……」

有紗が不安定になればなるほど、その答えは明確になっていったと思う。

膝で眠る彼女に視線を落とす…

安心した様に眠ってくれている…

「……有紗を安心させたかったんだ…」

自分で自分の言葉に納得してしまう…

有紗が時折見せていた悲しい表情…

俺はそれを取り除いてあげたかったんだ…

「だからレオナ……愚問だよ？俺は有紗を…信じるよ……でないと有紗が安心出来ない…」

「……はい…藤村様…よく……わかりました…」

少し嬉しそうに言うレオナ。

「では藤村様…心して訊いて下さい……お嬢様のお話です…」

視線を有紗に向けるレオナ、その表情が再び悲しく歪む。

「……………」

「お嬢様が清海女子学園の三年生である事はご存知ですか？」

「……………？…ああ…」

「……………7月19日…未明…期末考査終了の日…」

「……………？」

悲しそうな表情を崩さないまま語る。

「……………お嬢様の退学が決定しました…」

「……………えっ？」

「……………お嬢様は……………不登校でした……………一年生……………二年生……………除々に登校される日が減っていき……………三年生になると……………全く登校される姿を見る事は……………無くなりました……………」

「……………これは驚いた……………」

レオナの感慨な様子から覚悟をして訊いたがかなり驚いた……………」

「進学校である清海学園……………単位不足からの留年は認めていないのです……………」

有紗と会った初日、彼女は言っていた。

『進学は予定していません』

そりゃそうだろう…

卒業すら出来ないのだから…

「品川家の力で復学させる事も可能でした…しかしお嬢様の頑な反対があり…退学を止む無し…となりました…」

「…どうして不登校なんて……」

……言ってから気付く…

有紗は言っていた…

怖かった…と…

「わかりません…自室に籠られるばかりで…教師達の落ち度も見受けられませんでした…」

どうだかな…

「…私のお話できるお嬢様のお話は以上です…」

話は終わりか…

レオナには悪いがこれを機に、もう少し話を訊いてみよう…

「…少し質問していいか？」

「…私に答えられる事でよろしければ…」

「…ああ、構わない…」

俺が訊きたいのは二つ。

「レオナは武藤さんを知ってるか？」

「武藤様ですか？……品川建設の武藤氏の事でしょうか？」

「それだ、その人と有紗の繋がりは何だ？」

「…繋がり？いえ、特に無いと思われます…いつもお嬢様のお側に居る私も、屋敷にご挨拶に来られた武藤氏を数回拝見した程度です」

「……………そうか…」

レオナが言うなら間違い無いだろう…

じゃあどうして有紗は数回会っただけの武藤さんにあそこまで敵意を向けるんだ？

……………わからない…

「わかった、もう一つだけ質問だ…期限って何だ？」

以前レオナの口から洩れた期限という言葉…

俺はどうしてだかとても気になっていた。

「……………」

「レオナ？」

目を反らして答えようとしないレオナ。

「申し訳ありません…それにはお答えする事ができません…」

「はあ？…どうして？」

「…お嬢様に口止されておりますので……」

「…有紗に？………」

眠っている有紗に視線を向ける。

静かに眠っている…

「…わかった…ありがとう…レオナ」

「申し訳ありません…」

「いいんだ…時間はある…有紗にゆっくり訊くさ…」

「……藤村様……」

それ以降、話は途切れ…静かに朝を待つ事になった。

俺はまともに寝ていないのに一睡もできなかった。

膝の上で眠る有紗を見ると、とても眠る気がしなかった…

その日の開店直後…

俺は倒れた…

## 第二十話

.....

.....

...

「恭ちゃん」

「.....?」

「恭ちゃん! きよーちゃんってば!」

「.....ゆーちゃん?」

「きよーちゃん!」

「ゆーちゃん! いらっしやいませ!」

………？

えっ？

「……………」

目を開けると天井…

知らない天井だった…

???

「恭介！」

「えっ？っうわぁ！」

由？

由が抱きついてきた。

「な、何？」

何だ何だ？

さっぱり状況がわからん。  
だいたいここはどこだ？

「恭介！恭介え〜！っう…」

「ちよつと由、どうなってるんだ？」

俺に抱きついて泣きじゃくる由をなだめようとしながら、周りを見渡す。

病室？

ベッドにカーテン…俺の腕には点滴？

…ここは病室みたいだ。

「恭介！気がついたんだね！」

義人だ、義人が駆け寄ってくる。

「義人、これはいったい…？」

「……覚えてないの？」

「…????」

義人の表情が曇る、悲嘆な表情…

由は相変わらず、俺に抱きついて泣いている。

「……恭介は倒れたんだよ……」

「はあ？……倒れたっていつ？今日は何日なんだ？」

二人は制服を着ている、よく覚えていないが俺の最後の記憶ではまだ夏休みだった筈だ。

「今日は9月1日…恭介が倒れたのは昨日だよ…恭介は丸一日以上眠っていたんだ…」

「…………マジかよ…」

驚いた…………

俺はそこまで衰弱していたのか…………

「…………義人…………有紗は？」

状況がわかったら、次に気になるのはもちろん有紗だ。

「…………品川さん？いや…昨日は一緒に恭介に付き添ったけど…今日は見てないな…品川さんも学校じゃないかな…」

…………それは無い…………

昨日の事はよく覚えていないが、その前の夜の事は、はっきり覚えている。

「……………店は…？」

「食堂は営業中だよ、でも2時で閉めて、ここに来るって言ったよ」

「…そっか…わかった…」

……………状況はわかった…………

俺は昨日倒れ、ついさっきまで眠っていた…  
有紗は昨日来たが、今日は来ていないらしい…  
店にも迷惑を掛けてしまった様だ。

「とにかく先生を呼んで来るよ」

そう言っつて病室を出て行く義人。

「恭介く死んじゃったかと思つたよ…うう」

一向に泣き止まない由。

「……由」

さっきの夢……

今さら由の夢を見てしまうとは……

ゆーちゃん…小さい時の由の愛称だ……

病室の窓から外を見ると暗い……

雨が降っていた……

夏休みの間は嫌になる位に快晴が続いていたのに……

その後、俺は検査入院として、もう一日入院する事になった。

その日、有紗が見舞いに来る事はなかった。

次の日…

『…………… お客様のお掛けになった電話番号は現在使われておりません……………』

無機質なアナウンスに苛ついてしまう…

「…………… どうして……………」

有紗と連絡が取れない……………

昨日の病院…………… お袋達から訊いた話を思い出す……………

「有紗ちゃん…………… 辞めたんだよ……………」

「はあ？」

「元々…前から言われていたんだよ…夏休みだけのアルバイトだったね……」

「　　っそんな…！」

「…自分で言うつて言っていたんだよ……最後の日に言おうとしてたのかねえ……… 恭介がこの状態で言えなかったんだろっね……… 会っても責めちゃいけないよ？」

そして退院後、病院に居た時から掛け続けている電話は繋がる事はなかった……

店の方で聞いていた家の電話に掛けても……

『申し訳ありません、明確なアポイントが確認出来ません、アポイントを取られた後、指定された時間にお掛け直し下さい』

全く取り合ってはくれなかった……

「　　っざけんな！本人に会わせろっての…！」

「…それは出来ません、お引き取り下さい」

「だあ〜！だったらレオナを出せ！アンタじゃ話にならない！」

「恭介！マズいって！」

「恭介〜、傘傘〜、濡れちゃってるよ〜…」

ぎゃあぎゃああと問答を繰り返しては、義人に止められるを繰り返す。

ここは品川家の屋敷の前。

電話では埒が明かないので直接乗り込んで来た。

無理矢理着いて来た義人と由と一緒に粘っているが、問答無用で門前払いだった。

「これ以上しつこくなされますと、SPを要請せざるおえなくなります、どうかお引き取り下さい」

対応した使用人らしき人は無感情に俺達を切り捨てる。

くお〜〜！頭に来る！

「呼べよ！相手になつてやる！ちくしよ ムググ…」

「恭介！ははは、すいません〜、連れて帰りますから〜」

義人に羽交い締めにされて由に口を塞がれる。

「アポイントを取られた後、またお越し下さい……ではまたのご来邸をお待ちしております」

「……………」

なんだってんだ……

「出直そうよ……」

「そうだよ……恭介……病み上がりなのに風邪引いちゃうよ……」

傘も差さずに啖呵を切っていた俺は全身濡れネズミだった……

目の前のくそデカイ屋敷を見上げる……

有り得ないくらいにデカイ……以前に有紗を送った時は夜で気付かなかったが、奥の建物が見えないくらいの物凄い規模の建物だ……

何だか自分が惨めでとても小さく思える……

有紗……意味わかんねーよ……

学校での昼休み…

俺の作った弁当を義人と由と三人で囲む。

俺はまだ高校二年…退院したからには学校に来なければならない。

「元気出しなよ、きっと何か事情があるんだよ…」

「……………」

義人も由も激しく気落ちする俺を気遣ってくれる。

「そつだよ恭介…訊けばかなりのベタベタのバカップルっ振りだったらしいじゃないか、このままなんて有り得ないよ」

「……………」

有紗と連絡が取れなくなって三日…

退院して体の方は万全になった…しかし精神面はボロボロだった…有紗を気遣つての心労だったが、その本人が居なくなつて連絡も取れない…

俺は行き場の無い憤りを……………

いや…………俺はもう気付いる筈だ…………

…期限……

これはつまりそういう事なんだろう……

教室の窓から見える風景は暗かった……

外は今日も雨だった……

## 第二十一話

教室の窓から見える風景は暗い。

鈍色に濁った空から溢れ落ちる雲はその暗い風景をさらに深く彩っている。

アスファルトの地平線があるなら境界線は無くなってしまっただろうか……

……

「……ぶほおああ……」

ため息……これため息……

今は授業中……

有紗と連絡が途絶えてから一週間が経ってしまった。

もう何をするのも無気力な俺……

バカな事を考えてはため息をつくを繰り返していた。

9月になって降り続けている雨も一週間が経ってしまっている。  
8月に降らなかつた遅れを取り戻す様に分厚い雲は晴れない。

晴れ間を見せない空は俺の心を写している様だった。

昼休み…

「藤村さあ…振られたらしいよ…」

「えー…藤村に彼女居たっけ？由ちゃんじゃなくて？」

「違う違う、何か見た人居るらしいよ、すごい美人と腕組んで歩いてたんだって」

「ウソ、あの藤村が？」

「本当らしいよ、でも振られちゃったらしいけど…藤村あの様子だし…」

「ふん、じゃあ三角関係復活？」

「三角関係って？」

「ほらほら、今も三角は形成されてるよ」

「えー！じゃあ由ちゃんを巡る修羅場三角？」

「違つて、藤村を巡る修羅場三角つてヤツよ」

「うわぁ、それいい！何か藤村とつっちーあやしいもんね！」

「……………」

聴こえていますよ…

まる聴こえですよ…

「恭介…気にしない気にしない」

「そつだよ、そろそろいつものバカ恭介に戻つてよ」

昔から変わらない三人での昼食風景…

いつもの…か…

夏休みの前…有紗に出逢う前はこれが普通だった。

学校で適当やって…

こいつらと三人でつるんで…

俺は夜の手伝いの事ばかり考えてて…

店手伝つて…

疲れて寝て…

日常が帰ってきただけなんだよな…………

有紗と一週間会っていない…

毎日の様に屋敷に掛け合っているが、毎日叩き出されて終わり…

電話も駄目…

もう無理なのか……

左腕が嫌に軽い……

彼女の定位置はここじゃなかったのだろうか……

店は相変わらずだ。

工場は雨が降ろうが夏休みが終わろうが関係無いし、港も船が出てない訳じゃないらしい。

「恭ちゃん、おかわり」

「あいよ〜」

ダッシュで大盛りおかわりを配達する。

親父とお袋、常連のみんなは有紗の事をあまり訊いてこない…  
俺に気を遣ってくれてるんだろう、助かる。

「恭介、トンカツ定上がったよ」

「あいよ」

これまたダッシュでテーブルに配達する。

彼女が居なくなつた負担はあつた…  
でも夏休み前は一人でやっていた事だ、一日で慣れた…  
ここにも日常が帰ってきている…  
慣れてきている自分が嫌になりそつだ。

「恭ちゃん、ビールおかわり」

「……………あいよ」

冷蔵庫からビールを持って高速で配達する。

彼女に会いたい…

でも彼女の家は凄すぎる…

俺みたいな一般人の高校生にはどうしようも無い…

俺と有紗は……………終わったんだ……………

「恭ちゃん、こつちウーロンハイおかわり」

「……………はあああ……………おちおち物思いにも耽れやしねえ……………」

「だあ~~~~！めんどくさい男だねえ！」

ひゅっ

コンッ

「痛」

お椀が飛んできた、地味に痛い！

「お疲れさん……じゃあ俺は先に休むから……おやすみ」

「恭介……」

「……何？」

「どうにもならないのかい？」

「……」

お袋も心配してくれてるみたいだ……

初めて見るお袋の哀憐の表情……

「……ああ、いろいろやったけど無理だよ……彼女は住む世界が違っんだよ……」

「……だったら……忘れちゃいな……あんだ……見てらんないよ……」  
「ああ……」

自分の部屋の布団に飛び込む……

疲れはあまり無い……

忘れる……

……

いつもの日常に戻ったんだ……

終わったんだ……

忘れる……

……

忘れられる訳無い……

忘れられる訳無い！

俺にすがって…泣いて…

泣いて…

助けを求めていたんだ！！

会いたい…

会いたい！

自分の情けなさど、どうにもならないもどかしさと、彼女に会いたいと思う切なさが入り乱れて苦しい…

苦しい…

「有紗…」

……

？

店を手伝う前に放り投げた携帯…

俺の携帯に電話を掛けて来るヤツは稀だ…  
義人と由は電話するより直接言いに来る。

お知らせランプ…

点灯している！

バツと携帯を掴む！開く！

着信あり…

知らない番号…

「…有紗」

そのまま通話ボタンを押す！

もどかしい、一回のコール音が何分にも感じる。

『はい』

「有紗！！」

『…ふ、藤村様…私です、御陵です』

危うく携帯を落としそうになる…

「……………レオナ…」

レオナには悪いがひどく落胆してしまう。

…レオナ…レオナ？

『藤村様……………ご無沙汰しております』

「レオナ！！」

『はいいい！』

「レオナ！有紗は！有紗はどうした！！」

この一週間、散々試みた有紗への接触。

無機質な対応の使用人、問答無用のSP…

レオナは違う。

一緒に居た時間は短いけどレオナは違う。

俺は確信していた。

『藤村様、落ち着いて下さい！もちろんお嬢様の事でご連絡させて  
頂きます』

「だから！有紗はどうしたって言うてんだよ！！」

『話します話します話しますから！怒鳴らないで下さいい…藤村様

…恐ろしいですう…」

………

猛省した。

レオナの脅える声を聴いて自分を恥じた。

「……ごめん…レオナ…でも早く教えてくれ、有紗は…どうした？」

『藤村様……はい……では藤村様…夜分遅くになりますが、お時間を頂けますか？』

「…直接って事か？」

『はい、よろしければお迎えに上がります』

「大丈夫だ、どこだ？」

レオナの指定した待ち合わせ場所は駅前のファミレスだった。

家から10分…走って来たので5分掛らなかつた。

レオナは先に着いていた様だ、目立つ銀髪…メイド服…

ファミレスの店内に居る全員が奇異の視線をレオナに固定していた。

「はあはあ…レオナ…お待たせ…」

ここまで走って来たお陰で息を切らせながら声を掛ける。

瞬間。

バババツ

立ち上がって俺を一瞥、そのままレオナの頭が下がる…  
下がる下がる下がる…

「藤村様！申し訳ありませんでした！！」

うわああ何ですかあ？

「うわああ何ですかあ？」

散々レオナに奇異の視線を投げ掛けていた店内の客や店員…  
その視線が集まる集まる…

俺に！！

「ちよちよちよちよっと！レオナ！何やってんの！！」

90度以上頭を下げたままのレオナに訊いてみる。

「私が！私が！あの夜に！あの夜にい！」

訳わからんレオナ。

「なななな何？あの夜って？」

泣いている訳ではないが悲痛な面持ちのレオナ（頭を下げているので多分）にちよつと退きながら訊いてみる。

「私の…私の…全てを…全てをお…藤村様にい…！！！」

「えええええー！！！」

店内の客や店員の視線が奇異の視線から激怒の視線に変わっている。

「藤村様！藤村恭介様！申し訳ありませんでした！」

フルネーム言うなよ。

結局レオナは夏休み最後の日の夜に、俺に余計な事を話してしまつたせいで俺が倒れてしまったと思っていたらしい……

「…えーとレオナ…？落ち着いた？」

状況確認終了、レオナは悪くないと説明終了、コーヒーも注文終了。

「…はい…私とした事が取り乱してしまいました…申し訳ありません……」

ちなみに店内の客や店員の誤解は解いていないので、激怒の視線は俺に突き刺さったまま。

「…………それはもういいから…………有紗の話を訊かせてくれ…………」  
再確認したがやっぱり俺はレオナが苦手らしい…………早く本題に入りたかった。

「…………はい…………藤村様…………では順を追ってお話します…………」

ようやく落ち着いたレオナ…………

いつでも凜としたレオナが伏し目がちに語りだした話…………

有紗と…………

藤村食堂と…………

俺の話だった…………

時刻は深夜…………もうすぐ日付も変わる…………

どうでもいいが、明日は学校…………

外にはやっぱり雨が降っていた……

## 第二十二話

誰もが寝静まっているであろう深夜。

聴こえてくるのは陳腐な有線、それと雨音。

深夜のファミレスは閑散としている、雨宿りに来たカップル、終電を逃したサラリーマン……

怠惰な時間を過ごす人達は皆舟を漕ぎ、持て余すだけの時間が過ぎるのを待っている様だ。

「お待たせしました」

店員が注文しておいたコーヒーを持って来た。

一瞬その女性店員と目が合った。

『…うわあ…冴えねえ顔してらあ…よくこんな顔してこんな美人たぶらかしたもんだねえ…しかもコスプレまでさせてるし……恭介様く…じゃねえよ！キモいわ！この女の敵があ！』

なんとなく目がそう言った気がする……

「…はあ…」

どつとため息…

「…あの……よろしいでしょうか？続きをお話したいのですが…  
…」

レオナが怪訝な面持ちで首を傾げていた。  
続きと言っても先ほど話を始めたばかりだった。

内容は…そう、有紗の…『期限』に関する事…

『7月22日から8月31日…この期間のみ最後の自由を与えられたのです…』

俺の予想通りだった…

「藤村様？」

「…ああ、いいよ、続けてくれ…」

とにかく今はレオナの話を聴こう…

「はい…8月が明け…約束通り…9月に入りお嬢様は屋敷にて養生される事になりました」

「…養生？」

「……はい…お嬢様は…学校に通われなくなられてから…」

言葉を切るレオナ…

悲しそうに顔を歪め、目を伏せる。

「精神に異常をきたしてしまわれた……と思われるです……」

「はあ!？」

思わず身を乗り出してしまふ、レオナは今にも泣きそふだ。

「お嬢様は一年以上前から精神科のお医者様に掛っておられます……」

……診断結果は……鬱病うつびょう……です……」

「ま、まじ……か……よ……」

有紗の最後の方の行動……

品川家の重圧に耐えられなくて、俺にぶつけている物だと思っ  
た……いや、実際そうだった筈だ。

……でも有紗は俺に出会わずと前から……?

「……鬱病って……どういう病気なんだよ……?」

俺には精神の病気……くらいしか知識が無かった。

「心の病気です……鬱病と言っても様々な症状があるらしく……お嬢様の場合は極度の自閉症……です……」

それなら知ってる……確か他人とのコミュニケーションが困難にな  
ってしまふ事だった筈だ……

……有紗……

「…旦那様は…この夏休みに最後の期限を与え…お嬢様の意思を尊重し…委ねられたのです…」

「……………?」

「お嬢様の好きな様に過ごして頂き…お嬢様の心が回復してくれる事を願っておられました…期限内に回復が見られない様なら屋敷にて精神科医の治療に専念すると約束の元で…ですが…」

「…な!」

俺の考えていた事と違う。

有紗の親父は…品川家の立場として、有紗に期限を与え、縛るつもりだと思っていた……

「しかし…期限を過ぎてもお嬢様は…変わらず…いえ、異常は悪化してしまわれたのです…」

「レオナ、はっきり言ってくれ」

胸がざわつく。

「藤村様!お嬢様をお助け下さい!9月に入ってから、お嬢様は自室に籠られるばかりで…以前にも増して心を閉ざしてしまわれているのです!精神科医でもサジを投げてしまっ状態なのです!」

レオナが泣いている。

酷く取り乱し、泣いている。

他の使用人達とは違うとは思っていたが、レオナもあくまで仕事として、もっと無感情に有紗に付いていると思っていた。

違う…

これは…

「……有紗を助けるのは当然だ…」

胸がざわつく…イライラする。

「レオナ…お前…有紗をどう思っている？」

「……お嬢様を…？……もちろん大切な方です」

「有紗がお前の事を姉の様に思っていたらどう思う？」

「この上無い誉れです……いえ…恐れ多いですが…私はお嬢様を妹の様に思っております…」

そうか……

おかしいのは品川家じゃない……

有紗だったんだ……

「…とにかく有紗に会わせてくれよ……」

有紗がそうなってしまった原因……  
今の状態……

気になる事は他にもたくさんある…  
とにかく有紗に会いたかった。

「藤村様…その前に訊いて頂きたいお話が他にもあります」

「…話？」

「以前藤村様が仰っていた武藤氏……いや、品川建設に関するお話  
です」

「ああ、何かわかったのか？」

「はい、品川建設では近々、隣接する市町村と協力して高速道路計  
画を立案中らしいのです」

「……ふーん…えっ？それで？何か関係あんの？」

高速道路？

有紗と繋がるとはとても思えない。

「その高速道路計画…久住市新川町を横断する計画なのです…」

「新川町って、俺ん家じゃん！」

「……はい、藤村様のご自宅……藤村食堂も買収予定地として挙げられている様です……」

「……ウソ……だろ……」

静かに首を振るレオナ。

「……お嬢様は……藤村食堂を守る為にアルバイトをしていたのかも  
しれません……」

「……………」

レオナの言葉に妙に納得してしまう。

武藤さんを執拗に嫌っていたのも、それならば納得できる。

有紗は藤村食堂を固執していた気がするし……

????

そういえば……どうして有紗は藤村食堂にあそこまで固執していたんだ？

何か無いとあんな古いだけの食堂に執着なんてしない筈だ。

「藤村様……お話はもう一つ……これは品川家に縁のある者でも一部の人間しか知らない機密事項なのですが……」

「えっ？」

「藤村様なら…お話しします…お嬢様はお母様を二度…亡くされて…らしいのです…」

「……………」

もう驚き過ぎて反応出来なかった…

有紗の悲しそうな顔がちらついてしまう…

「最初のお母様は生まれてすぐに…前党首様を亡くされたのも…まだ小学生の頃らしいのです…」

「最初…前党首？…ちょっと待て…党首って親父じゃないのか？」

「…そうです…有紗お嬢様は品川家の実の娘ではありません…現党首…旦那様の連れ子です…私はその辺りにお嬢様の心を蝕む痕跡があると…思っています…」

「……………有紗…」

なんて複雑な環境にいるんだよ…

「藤村様…私はもうお嬢様のお力になる事ができません…お嬢様をお助け下さい…」

「有紗の力になれないって…どうしてだよ？」

「…先ほど話していたお話は私が独自に調べた品川家の特記です…それが…その…ばれてしまっています…リストラされてしま

ました……」

はははと苦笑しながら言うレオナ……

「レオナ……」

俺はレオナをかなりの偏見の目で見ていた様だ……  
おかたいイメージ……

間違っていた……

本当に妹を想う姉の様に優しい人だったんだ……

「お嬢様は……うわ言の様にいつも藤村様のお名前を呼んでいます……  
……恭ちゃん恭ちゃん……と……」

????

「えっ?……恭ちゃん?有紗がそう言ったのか?」

恭ちゃん……有紗は俺をそうは呼ばない筈だ……

「はい……間違いありません……どういふ事ですか?」

「いや、有紗が俺を呼ぶ時は……恭介……さま……?……あれ……?」

自分で言っておいて、なぜか違和感を感じる……

……恭ちゃん……

店の常連達にいつもそう呼ばれている…

他にも…どこかで…

……

……

そう……か……

そうだったよな……

俺はバカだった……

どうして気付いてあげられなかったんだ……

「レオナ」

「はい？」

「昼になったら有紗を連れ出す、力になってくれ」

「えっ？はい……はい」

「朝までは……そうだな、レオナの知ってる有紗の話を聴かせてくれ、レオナが眠くなるまででいい」

「はい…それは構いませんが…どうしてでしょうか？」

「レオナ、俺は忘れていたんだ、いや、自分の都合のいいように置き換えていたんだ、俺は自分が許せない、だからその気持ちが緩まない様に聴かせてほしい」

「は、はい」

朝7時頃…

一度レオナと別れて自宅に戻って来ていた。

自分の家である食堂の前で立ち尽くす。

降り続く雨に打たれ、全身ずぶ濡れになってしまっている。

有紗……

お前にはごこしか無かったんだな……

…ごめんな…

自分に腹が立つ…

激しい自責の念が俺を覆い尽す…

「うあああああ！…！」

咆哮した。

「…なに…：恭介？」

「な、何？恭介！何かあったの！」

桂と土屋の家から由と義人が顔を出してびっくりしてる。

…

そう…

俺は思い出したんだ…

儂く移ろいでしまった……

優しく懐かしい……

大切な時間を……

## 第二十三話

午前9時、打ち付ける温い雨を抜け、歩く。

何度も有紗を送って行った道、否応にも感慨しく気持ちが浮き沈みを繰り返す。

いや、そうでは無い。

俺は昂ぶる気持ちを抑えるのに必死だった。

逸る足を抑えるのに必死だった。

自分自身を憤り、蔑み、罵っていた。

仕方の無い事だったのかも知れない……

しかし、俺を選び、頼ってくれた彼女を想うとやるせない気持ちが溢れてくる。

早く彼女に会いたかった。

早く彼女を安心させたかった。

「ほらほら、恭介、濡れてるってばさあ」

「恭介…僕…何だかドキドキしてきたよ…」

なぜか着いて来た義人と由……

「お前らまで着いて来なくて良かったのに…」

少し苛立たしく二人を見やる。

「……恭介…私言っただよ…力になるって…」

「僕も同じだよ………」

「由…義人……」

レオナの話の話を聞いた後……

家に戻った俺はいつもの様に二人の朝食を作り、三人で食べていつも通り着替えて学校に行こうとした。

『由、義人、俺…忘れ物したから戻るわ』

別に二人に気を遣うつもりは無かった、ただ自分の問題は自分で片付けるつもりだった。

『……ふん……じゃあ私も付き合っただけ』

『しょうがないね…僕も付き合っよ』

『はあ？いいよ…俺だけ戻るから学校行けよ』

『うん……却下だね…』

『却下だね』

事情を全く話していないのに、半ば無理矢理着いて来た二人…呆れて諦めたつもりだった…

いや、もちろんわかってる。

二人の心遣いに感謝の心で一杯だった…

「藤村様…」

「レオナ…待たせたな…」

屋敷の少し手前で待ち合わせていたレオナと合流した。

「桂様と土屋様もご一緒でしたか」

「レオナ、久しぶりだね」

「レオナさん、おはようございます」

「……はい、おはようございます、お二人ともお元気そうですね、何よりです……しかし……よろしいのですか？」

「……気にするな……戦闘員1号2号と違ってくれ」

「うわゝ、なにそれ！私達かなり重要なんじゃない？」

何を勘違いしたか、目を輝かせてやる気を見せる由。

「由……今は恭介の皮肉だと思っよう……」

「とにかく……さっさと有紗を連れ出しちまおう、レオナ、どうにか中に入れないか？」

「……はい、入るだけなら問題ありません、私のIDは残っているの  
で、それを使います」

裏手の使用人専用の入り口から入れるらしい、四人で屋敷を回り込みそこに行く。

「……まずいですね……見張りが居ます……」

四人で隠れて使用人入り口を見ると、見張りらしき男が仁王立ちしていた。

「彼は強敵です、元某国の傭兵部隊出身であらゆる格闘技を極めた男です……」

レオナがぶつぶつと説明してくれた。

「どうでもいいがレオナ最初の頃よりキャラ変わってないか？」

「どうにか彼の気を引いて入り口から引き離しましょう」

スルーされた。

「私に任せて！」

戦闘員1号が何やら自信満々で前に出る。

「ちょ…由」

気遣おうとした俺を手で制し、ふって笑って歩み出す由。

なぜか着ている制服をはだけさせながらずんずん男に近付いて行く。

「…えーん…おぢさ〜ん…」

「は？」

何をやっているんだアイツは…

「ド…ドウシタ！ジャパニーズジョシコーサー？」

いんちきくさい片言の元傭兵。

「襲われたよ〜」

「ナツ！プリティガール！ダイジヨブカ？」

「あんな事や〇〇〇事されたよ〜…うわ〜ん…」

「FUCK！ユルセン！プリティガール！キャツハ！」

「逃げて行ったよ〜、こっちだよ〜」

「OK！」

由の先導で物凄いスピードで駆けて行く元傭兵…

去り際にぐいつと親指を立てる由。

「……………」

「今の内です…」

あっさり無人になった入り口…

大丈夫か…品川家の警備…

……………

「お嬢様は間違い無く本館の自室に居られると思われます…」

屋敷に入るとレオナを先頭に本館へと進む。

とにかく広い品川家の敷地内…すでに5分以上走っているが、まだ

本館には辿り着けない。

「皆さん！止まって下さい！」

先頭のレオナの指示に従いバツと停止、無駄の無い動きで茂みに隠れる俺達。

「…どうした？」

「いけません…本館入り口にも見張りが居ます…」

またかよ…

今度は金髪の女性黒服だった、手には日本刀？

「彼女は…最強と名高い柳沢一刀流の使い手……！何という事でしょう……相手が悪すぎます……」

はあ？

「…どうやら僕の出番だね…」

いつも通りおとなしくしていた義人がずずいと前に出る。

「よ、義人？」

「大丈夫…僕に任せて…」

余裕の表情ですたすた行ってしまう戦闘員2号。

「何奴……」

しゅばばっと女性黒服にあっさり捕まる義人  
喉元に日本刀をつき付けられてしまっている。

「……うう……良かった……彼方だったんだね……」

「……???」

意味不明の事を女性黒服に囁きだす義人……  
彼女も呆気に取られている。

「……彼方に逢えただけで僕には想い遺す事は無いよ……」

な……何？義人？

「……まさか……剣二なのかい？」

はあ？

「……うん……逢いたかった……」

はあ？

「……剣二……剣二……！」

あっさり刀を引っ込める女性黒服。

「……うわあ……ん」

がばつと抱きつく義人…抱きつき返す女性黒服。

「はあ？」

「さあ、今の内です…」

がっちり抱擁する二人を見ながらレオナに引きずられて行く俺。

何だかみんなキャラ変わってないか？

……

「あの部屋がお嬢様の部屋です…」

「ああ、見張りは？」

「居ない様ですね…」

よしっと身を乗り出して驚く。

音も無く現れた黒服の爺さんが通路を塞いでいた。

「い…いつのまに…」

「ふっ…甘いですね、少年…」

「ア…アルベルトさん…」

レオナは爺さんを知っているらしい…

どつやら元上司らしい…

「レオナさん…彼は？」

威圧感たつぷりのじじい…

「彼は……お嬢様の彼氏様です……」

半ば諦め気味で言うレオナ。

「ふむ…確か…恭ちゃん様ですな……」

「はあ？」

「アルベルトさん？」

「よくぞおいで下さいました…私は本館の管理を任されております  
アルベルトと申します……」

「えっ？」

「どつぞ…お嬢様のお部屋はこちらです……」

如何にもジェントルな仕草で部屋への通路を明け渡す黒服じじい。

「ア、アルベルトさん？」

レオナが意外そうに驚いている。

「レオナさん…今朝はサボリですか？…まあお客様をお連れした

と多目に見ましよう…さあ午前のお掃除を始めますよ。」

「えっ？あっ…はい！」

おろおろと黒服じじいに連れて行かれるレオナ。

去り際ににこりと笑う黒服じじい。

「……………何だよ…とりこし苦労もいとこじゃねえか…」

嬉しくなりながら有紗の部屋の扉に手を掛ける。

「……………有紗」

さっきからのやりとりで誤魔化されてしまったが、いざ有紗に会うとなると昂ぶっていた気持ちが蘇る。

泣いているだろうか……

怒っているだろうか……

俺に会って喜んでくれるだろうか……

静かに扉を開く……

部屋の中は広がった。

ベッド、テーブル、机、本棚……無駄の無い部屋……高級そうな家具で統一されているが……寂しい部屋だった。

もう何年も誰も住んでいない様な寂しさ……

有紗は……居ない？

いせ……

風になびくカーテン……

開かれた窓の向こう……

「……有紗……」

西洋風のテラス……

そこに今にも身を投げ出しそうな有紗が居た……

## 第二十四話

俺の声に振り向く有紗。

彼女に会うのは一週間振りだった。

彼女は別人の様だった。

長くて綺麗な髪は雨に濡れ、いつもの輝きは無かった。

清楚の見本の様だった真っ白なワンピースは艶めかしく肌を写し別人を思わせた。

大好きだった笑顔は無かった。

俺を見ている筈なのに、瞳は何も捕えていない様に虚ろだった。

触れただけで壊れてしまいそうな彼女は弱々しくて儂くてどこか幻想的だった。

「有紗！」

駆け出し、彼女を抱き締める。

「有紗！ごめん！ごめん！！」

彼女は冷たくなっていた。

彼女の服に染みた雨が抱き締めている俺の制服に伝わる。

「……………恭……………介……………様……………」

絞り出した様な声はかすれていた。

呼んでくれた名前に胸が苦しくなる。

「不安になる事なんて無いんだ！！俺が！俺が安心させてやるから  
！！！」

俺の目から熱いものが止めどなく溢れてくる。

有紗は俺にすがってくれたのに……

俺に笑い掛けてくれたのに……

俺を……………好きになって……………くれたのに……………

「有紗あ！！！」

きつく抱き締める。

「……………う……………う……………」

有紗の手が俺の背中に回る…  
痛いくらいに抱き締めてくる。

「……………うう…うあああ…うあああああああ！！」

泣き声では無かった…

それは彼女の心の悲鳴だった。

一分だったか、十分だったか、一時間かが終わった頃…

俺の胸ですすり泣き続ける彼女に告げる。

「有紗、行こう」

「……………？」

力無く見上げた有紗はぼろぼろだった。

優しく綺麗だった笑顔の面影は欠片も無い。

俺の言葉の意味がわからない様に表情を変えない。

まるで人間に脅える捨てられた子犬の様だった。

歯痒い…！やるせない…！もどかしい…！

……一緒に要る筈なのに……切ない……

有紗の手を掴んで走り出した。

頭で考えるより先に走り出していた。

早く有紗の安心できる所に連れて行きたかった。

驚く程簡単に連れ出す事が出来た。

有紗は糸の切れた人形のように俺に手を引かれ走るだけだった。  
胸が痛いくらいに締め付けられた、俺は夢中で走っていた。

店の扉を開ける。

「いらっしゃい」

時間は昼近く、店は営業中だった。

「き、恭介！あんた何やってんだい！」

雨に打たれて水浸しの俺と有紗を見て酷く驚いているお袋、店内で  
昼食中のお客達も啞然としている。

「はあはあ……お袋……タオル……」

「ちょっと……有紗ちゃんじゃないかい……あんた……今日は学校だろ？  
どういう事なんだい？」

状況が全くわからないお袋は酷くテンパっている。

「恭介」

タオルを数枚投げ渡される、親父だった。

「……ありがとう」

急いで有紗を拭いてやる。

「……母さん……落ち着け……恭介……どういう事だ？」

あくまで冷静に訊いてくれる親父。

「いや、説明は後だ、テーブルを一つ貸してくれ、なるべく邪魔にならない様にする」

いちいち説明出来る事じゃなかった、予め説明出来る簡単な問題じゃなかった。

「………わかった………好きにしろ……」

ため息混じりに言う親父……

「……悪い……」

「あ、あんた！……まったく……しょうがないね……只事じゃないみたいだし、あたしも目を瞑ってあげるよ……はぁ」

感謝した…店内の常連達も何も言ってこなかった…

「…ありがとう…」

……

「よし…まずは……」

座らせた有紗に向き直る。

有紗はうつ向いて、体を少し震わせていた。

「久しぶりだな」

テーブルを挟み向かい合った彼女に言う。

「…本当に…久しぶり…だな…」

俺の声に全く無反応の彼女…

「……ごめんな…久しぶり過ぎて…忘れていたんだ……」

そうだ……忘れていた……

はっきり言って今もすっかり思い出せた訳じゃない……

でも、有紗が俺にすがってくれた理由はこれだけしか無かった……

だから……

「……ゆーちゃん」

呼んであげないといけない……

まだ物心がついて間もない頃だったのだろうか……

幼稚園の年中、年長くらいの時だったと思う。

その頃は既に義人や由とは仲良しでいつも三人で遊んでいたと思う。

そして俺は二人と遊ぶ他に両親の仕事場である藤村食堂で遊ぶのが大好きだった。

『おお、恭ちゃん、小っちゃいのに手伝いして偉いねえ』

『ま〜ね〜、おれはよんだいめだからとうぜんだよ〜』

今思えば店を駆けずりまわるだけで、手伝いなんて少しもしていなかった。

でも俺は気のいい常連達に褒められるのが嬉しくて、いつもいつも店に居たんだ。

そして、あの子が来たんだ。

『きみはだれ?』

『おれ?おれは恭ちゃん!』

『きよーちゃん?』

『うん、きみは?』

『わたし?わたしは……………えっと……………ゆーちゃん!』

『ゆーちゃん?』

『うん、わたしはゆーちゃん!』

『おいおい……………名前はちゃんと言わないと駄目だろう?』

『だってわたしのなまえむずかしいんだもん!わたしのかんじはゆ

「ってよめるんでしょ？」

「そうだけど……はは……困ったな……」

いつも父親に連れられて店に来てくれていたゆうちゃん……

彼女は小さくて自分の名前をちゃんと言う事が出来なかった。

かわいくて人懐っこくて、俺はすぐに仲良しになった。

由と義人には内緒だった。

それから父子揃って毎日の様に来店して来る二人に会うのが一番の楽しみになった。

241

「ゆうちゃん、いらっしやいませ！」

「きょーちゃん！きょうもいっしょにごはんしようね？」

「うん、もちろんだよ」

俺の両親も気を遣ってくれたのか、二人が来店した時は一緒に食事をとらせてくれた。

俺はゆうちゃんに会いたくて毎日二人が来る時間には店に居るのが日課になっていた。

そんな楽しい期間は小学校に上がってから続いた。

『きょーちゃん！こんにちは〜』

『ゆーちゃん！いらっしやいませ〜』

今思えば俺にとって一番大切な時間だった。

でも俺が二年生に上がったくらいの時から二人は店に来なくなってしまうた。

突然来なくなってしまったゆーちゃん…

でも俺は毎日ゆーちゃんが来る時間には必ず店に居る様にしていた。

でも彼女が来る事は無かった……

俺は悲しくて悲しくていつも泣いていた。

でも店に居ればいつかは会えると思っていた。

いつからか店を手伝う様になり……

突然居なくなってしまったゆーちゃんの記憶は薄らいでしまった。

同じ父子家庭の由とだぶらせてしまった。

ゆーちゃんはゆーちゃん……

由ちゃんは由ちゃん……

違うのに……

悲しくて悲しくて……

忘れていたんだ……

ゆーちゃん……

ゆうちゃん………

有ちゃん………

有紗………

「……きよーちゃん……」

伏し目がちにテーブルを眺めていた有紗が顔を上げる……

かわいくて人懐っこくて………

懐かしい女の子が俺だけを見つめていた………



## 第二十五話

静かだった。

店の中は静まり反っていた。

いつもならお昼時である今は賑わっている筈だった。

親父もお袋も、ただ昼飯食べに来ただけのお客達も、静かに俺達を見守ってくれていた。

俺の名前を呼んでくれた有紗…

ずっとずっと待っていた女の子……

ふと、思い出した様に蝉の声が聞こえた。

連日の雨の影響からか、その声を聞くのは酷く久しく感じた。

煩わしいだけだった筈のその鳴き声は、待ちわびた夏の到来を告げる様に、少しだけ心を軽くしてくれた。

酷く大きく聞こえた。

雨は上がっていた……

「……寂しかったんです……」

静かに口を開く有紗。

「有紗？」

「大丈夫です…恭ちゃん…」

弱々しくだが微笑む有紗。

「今ならちゃんと話せると思います……訊いて下さい」

俺を映す綺麗な瞳、虚ろだった瞳は光を取り戻していた。

「……ああ……もちろんだ……」

「まずは……」

ガララー

「恭介恭介恭介〜！」

有紗の話を遮る様に勢いよく店の扉が開き由が来店した。  
義人とレオナも居る。

「由！みんな！」

「恭介恭介……あつ！有紗さん！……有紗さん！」

有紗を見付けてすぐに有紗に飛び付く由。

「か、桂さん?!」

「有紗さん……良かった…良かった……」

有紗の胸で泣く由……

ほとんど事情を知らない筈なのに心から心配していたんだろう……  
純粋な由らしいと思った。

「……桂さん……」

泣き出した由につられて…

いや……違うか…

泣いてくれた由が嬉しいんだろう……有紗も瞳に涙を溜めている。

「…お嬢様……」

レオナも泣いていた。

「レオナさん…たくさんご迷惑を掛けてしまいました…」

由を胸に抱いたままレオナに申し訳無さそうな顔を向ける。

「……迷惑なんて仰ってはいけません……私が好きでやった事なんですから……」

泣き出しそうな表情で答えるレオナ…

感謝と感涙の表情でそれに応える有紗…

「恭介」

安心させてくれる様な笑顔を向けてくれる義人。

「ああ…ありがとな義人…」

三者三様の反応だが、みんな俺と有紗を心から気遣ってくれたと解る。

「では、恭ちゃん…お話ししますね……」

由を抱いたまま俺に向き直る有紗。

「…いいのか？」

はっきりとは言わなかったが、三人に外してもらわなくていいのか訊く。

「いいんです…皆さんに訊いて頂きたいんです……」

俺達の心情を察してくれたのか、みんな黙って有紗を見つめる。

「…わかった…」

「はい、ありがとうございます」

いつもの笑顔だった。

……安心した。

「…私が品川の名字に変わったのは小学校三年生に上がった時でした……父の再婚が理由でした……」

事情を知らない由と義人は少し驚いている。

「前の名字は七瀬でした…私…その名字の時は…このすぐ側に住んでいたんです…」

「ええっ？」

驚く由と義人、俺も少し驚いた。

「生まれてすぐにお母様を亡くした私はお父様と二人きりで小さなアパートに住んでいたんです…」

淡々と…でもはつきりと喋る有紗…

話の内容には驚かされるが誰も口を挟めない…

由も…義人も…レオナも…もちろん俺も…

店内に居るお客やお袋達も同じだった。

「お父様はお料理が苦手で作ってくれた事はありませんでした、加えて私は体が弱くて出来合いの物をあまり食べられなかったんです…」

有紗が俺の顔を真っ直ぐに見つめる。

「…そして…困り果てたお父様は私をここに連れて来てくれたんです…私がまだ保育園に行っていた頃です…」

「…ゆーちゃん…だったのかい？」

お袋だった…酷く驚いた表情で有紗に歩み寄る。

「…はい…お久しぶりです…有紗の名前を上手く言えなかった私…ゆーちゃん…です…」

ぼろぼろと涙を溢す有紗…

「……………どうして言うてくれなかったんだい……………」

「……………怖かったんです……………忘れてしまっているだろうと……………私の事なんて覚えていないだろうと……………ここは……………私にとって……………最後の大切な場所だったから……………」

次から次へと溢れる有紗の涙、体を震わし必死に堪えている…

「……………有紗……………」

居た堪れなくて呼ぶ。

「……………恭ちゃん!」

由から体を離し俺の胸に飛び込んでくる。

「……………たったひとりだった友達に……………忘れていてほしくなかったんです!!」

俺の胸で泣きじゃくる有紗、優しく抱き締める。

「当時店で遊んでいた俺の……………一番の友達だったんだ……………ゆうちゃん……………有紗は……………」

「……………そう……………だったのかい……………それでお父さんが再婚した三年生から店に来れなくなっただね……………」

「……はい……」

俺の胸に埋まったまま答える有紗。

「品川の娘になった私に……自由は無かったんです……ここに来たくても……恭ちゃんに会いたくても……屋敷を出る事は許されませんでした……新しいお母様は優しく綺麗な方でしたが厳しい人でした……マナー……言葉遣い……振る舞いなど……品川に必要な全てを身に付けるまで学校すら通わせてもらえませんでした……」

みんな黙っている。

悲痛な心持ちの有紗に掛ける言葉が見当たらない。

「早くに亡くなってしまったお母様が居なくなる頃には……私が私で無くなってしまいました……通える様になった学校では私じゃない私が見下す様に挨拶をし、屋敷では私じゃない私が使用人達を見下ろしていました……」

「……お嬢様……」

堪りかねた様なレオナが声を掛ける……

「……中学生になった頃に雇われたレオナ……優しくて他の人達と違うな……って思いました……でも……手遅れでした……」

俺の胸で震える有紗……制服を強く握り締めてくる。

「友達になってほしかったのに！お姉さんみたいになってほしかった

たのに！……わからなかったんです……！どうすればいいかわからなかったんです……！」

「……お嬢様…私はずっとお嬢様を大切な妹の様に思っていました……」

涙を溜めながらも慈愛に満ちた優しい笑顔で微笑むレオナ。

「レオナさん！」

俺の胸に顔を伏せる有紗……

「有紗……もういい……わかったから……辛い事は話さなくていいから……」

もう見ていられなかった……

「恭ちゃん……ありがとうございます……でも……話します……最後まで……話します……」

見守っていた。

店内に居るみんなが見守っていた。

由も義人もレオナもお袋も親父も……

既に昼休みが終わっている筈のお客達も……

「……ああ……わかった……」

「…はい……」

高校生になった私…

周りは何も変わりませんでした。

いえ、違いますね……

その時既に私はおかしくなってしまうていました。

学校でも……屋敷でも……自室で一人きりでいる時でさえも……

私じゃない私を演じていました……

怖かったんです……

誰も本当の私に気付いてくれない……

誰も本当の私を知らない……

私は誰にも会いたくなくなってしまうました。

学校に行くのが怖くなってしまいました。

自室に引き込もる毎日が始まりました……

お父様や亡くなったお母様の教えを必死に守ってきたもう一人の私も限界でした。

私は病気になってしまいました。

お医者様に見て頂いても治りませんでした。

環境がもたらした病気は改善された環境でしか治す術は無いと……お医者様は言いました。

どうでもいい……と……思いました……

そしてこの夏……私の単位不足からの退学が決定したんです。

お父様は私に最後の期限を設けました。

私の好きな様に過ごしていい……そうすれば病気が治るかもしれない……  
薄氷の様に薄い望みは私にとって……もう一人の私にとって……最初で最後の自由でした。

私の一番深い所に隠れていた、本当の私が少しでも顔を出しました。思い出の場所を探しました……

お父様と住んでいたアパートは無くなっていました……

小学校……体が弱くて通った事の無いそこには大切な思い出はありませんでした……

途方に暮れました……

私が私であった時の思い出は……こんな物だったのか……

でも……私のかすれた思い出の中に……

確かにあったんです……

私が私であった時に……確かに笑っていた場所が……

気が付いたらここに居ました……

無意識に開いた扉の向こうは何も変わっていなかったんです……

『じゅめんなさいね……営業は11時からだよ』

『……あ……その……』

『……？お嬢ちゃん？どうしたの？』

変わっていなかった思い出の場所は私に少しだけ勇気をくれました。

『ここに居させて下さい！』

『はあ？』

『あ……いえ……その……私を……』

『ああ、アルバイト希望の人かい？……参ったね……ウチは募集してないんだけどねえ……』

……恭ちゃんのお母様の言葉が私の意識を大きく揺さぶりました。

『…………お願いします！』

すぎる想いでした……

ご迷惑なのは解っていましたが私は夢中でした……

本当の私にとって……この食堂だけが遺された最後の希望だったから……

暗くて……寂しくて……怖くて……

右も左も解らなくて……

自分自身すら曖昧になってしまった……

「私がすがった最後の希望だったんです……」

## 第二十六話

心が溢れる想いでした。

十年振りに訪れた場所なのに、とてもとても安心出来たんです。

忘れていたと思っていた笑顔が自然に溢れました。

おじ様、おば様：確かおじい様も居た筈だったのですが、代わりに居たのは大きくなったあの子でした。

懐かしかった……

嬉しかった……

私の事なんか覚えていないだろうな……

……

私は思いました。

この人に嫌われちゃいけない……

演じなくちゃ……

そうしないと嫌われてしまう……

愚かにも自分を一番苦しめていた品川の教えにすがってしまいました。

最初は好きとか、そういった感情ではなかったと思います。ただ一緒に居たかったんだと思います。

一緒に働いているだけで幸せで……

常連さん達が呼ぶ恭ちゃんの名前を聴くだけで幸せで……

おじ様やおば様を作ってくれたご飯を食べれるだけで幸せでした。

変わってきたのは最初の定休日の日です…

私は屋敷に居るのが嫌で、定休日であるにも関わらずお店まで来てしまっていました。

お店を眺めているだけで安心出来ました。

しばらくそうしていると恭ちゃんが出て来ました。

桂さんも一緒でした。

私の中で何かが蠢きました。

私の方が一緒に居たいのに……

私の方が彼を必要としているのに……

嫉妬という感情を初めて知りました。

次の日から私は少し不安定になりました。

恭ちゃんに前日に食堂に来たか訊かれました、嫉妬という感情が恥ずかしかった私は嘘をつきました。

恭ちゃんが目を合わせてくれないだけで不安で仕方がありませんでした。

嘘がばれた？

嫌われた？

おかしな被害妄想が膨らみ、苦しくなっていました。

そんな時に思いがけない人に会ってしまったんです。

新都市化計画主任……

武藤さん……

お父様の部下である武藤さんとは、数回会った事がある程度でした。以前、彼とお父様が話していた話を思い出してしまいました。

新都市化計画に向けての用地買収。

私はうるたえました。

武藤さんは買収交渉に来たに違いない。

不安で不安で胸が張り裂けそうでした。

その日、不安から具合が悪くなってしまった私を恭ちゃんが送ってくれました。

安心出来ました。

私の安心出来る場所である食堂を出ても安心出来ました。

私には恭ちゃんしか居ない…  
恭ちゃんの側に居たい…  
もっと安心したい……

都合のいい理由をつけて恭ちゃんに抱きつきました。

思った通り安心出来ました、恭ちゃんに触れていると本当に心から安心出来ました。

安心して冷静になれた私は調べました、もちろん都市計画についてです。

私の早合点であってほしかった。

不安は的中していました。

用地買収予定地 久住市新川町 藤村食堂…

まゆつばだとも思っていた私の妄想は本当だったんです……

不安の波に飲み込まれた想いでした。

私のせいではないだろうか……

おじ様、おば様、優しい常連さん達……

恭ちゃん……

私が何とかしないと……

お店を守らないと……

恭ちゃんの側を離れない様にしないと……

幼稚な妄想でした。

いえ、都合よく置き換えていただけですね……

私は恭ちゃんと一緒に居たかったです。

この時既に私は恭ちゃんが大好きだったんです。

そして、私の想いが膨れ上がると気が付いた事がありました。

桂さん……

初めて身近に感じる同年代の女の子でした。

すごく可愛くて、優しくて、私みたいに嘘つきじゃなくて……

私より恭ちゃんの事知ってて……

私と同じ想いを持っていて……

純粹で親しげな桂さん……

対して私は陰湿で傲慢な心を隠していました…

私は自分が嫌になりました……

…私は何をやっているんだろう…桂さんは初めての同姓の友達になつてくれる人かもしれないのに……

自己嫌悪に押し潰されてしまいそうでした……

これじゃいけない…

頑張つて桂さんの優しさに応えなくちゃ…  
頑張つて桂さんに友達になつてもらおう…

自分自身を戒めるつもりで自分自身に言い聞かせました。

でも…みんなで行つた別荘の時……

私は浮かれていました……  
旅行が楽しくてじゃない、別荘が楽しみじゃない。

会えないと思つていたお盆休みにも恭ちゃんと一緒に居れるから。

そして私は戒めたつもりだった自分の陰湿な心に飲まれてしまったんです。

夜のテラス…

私は最初から最後まで見ていました。

何を話していたかはわかりませんが、でも簡単に想像出来ました。

そして……

……私は泣いている桂さんを……嘲笑っていたんです……

……死にたくなりました。

優しい桂さんを私の汚れた負の感情で汚してしまったと後悔しました。

もうどうでもよくなりました。

買収の事だつて私なんかはどうにか出来る問題じゃない……品川の娘として、恭ちゃんに謝罪して諦めよう……

次の日……恭ちゃんに謝罪した後の事はあまり覚えていません……いえ、ちゃんと謝罪出来たかどうかも覚えていませんでした。

屋敷に帰った私は抜け殻でした……

終わった……

やっと安心出来る人に出逢えたのに……

大好きな人に出逢えたのに……

……

怖い……また不安ばかりの毎日に戻ってしまうのが怖い……

安心したい……

期限はまだ少しある……

嫌われてしまったら……

でもあと少し……あと少しだけ……

一緒に居させてもらおう……

せめて私が壊れるまで……

お盆休みが明けて、慣れてきた道を歩きお店に出勤する私……

死の階段を上る想いでした、恭ちゃんに会いたいけど会いたくない

……

恭ちゃん……

ごめんなさい……

ごめんなさい……

……

助けて……

……絶望していました。

あれだけ安心出来たお店に居ても自分が保てなくなってしまった。

優しい恭ちゃんが何か言っていました、迷惑ばかり掛けているのに

……

私に恭ちゃんの側に居る資格は無いのに……

ああ……私はもう駄目なんだな……

……そう……思った時でした……

『……一人にしないから……』

混濁とした意識の中で、恭ちゃんの言葉が私に染み渡った気がしました。

濁りきっていた世界が澄み渡った気がしました。

良かった。

私はまだ大丈夫…

恭ちゃんが居れば大丈夫なんだ……………

今思えば全てまやかしに過ぎませんでした。

楽しい、嬉しい、暖かい、気持ちいい、幸せ、安心、苦しくない、怖くない、寂しくない……………

……………

まやかしでした。

自分を偽り続けた代価を精算するにはあまりに遅すぎました。

一人になった時の重圧に耐えられなくなりました。

自己嫌悪、嫉妬、妬み、ひがみ、後ろめたさ、卑しさ、厚かましさ、  
図々しさ……………

あらゆる嫌な感情が湧いてきました。

そうして不安になると思いました……………

恭ちゃんは私を好き……

私？

私？

どの私？

偽り続けた私、人を見下し続けた私、嫌われたくなくて隠れ続けた私……

気が狂いそうでした。

恭ちゃんに会わないと……

恭ちゃんに抱き締めてもらわないと……

恭ちゃんは私を好きなんだから会ってくれ……

迫る期限の事など忘れていました。

そして恭ちゃんが倒れてしまったんです。

……

後悔……

それだけが私を埋め尽しました。

「その後は屋敷に引き込まれる日に戻ったんだと思います……はは  
……実はあまりよく覚えていないんです……」

長い朗読を終えた様に話を切る有紗。

どこか吹っ切れた様な表情だった。

「……でももう大丈夫です、恭ちゃんが思い出してくれただから……私  
はもう大丈夫です……」

「……………」

誰一人口を開かなかった。

俺も……いや、そうじゃないか……

俺は……

「……えーと……いろいろ言わなくてはならない事がたくさんありますが……まずは……」

「……いや、その前にちょっといいか？」

「えっ？は、はい……」

「お前……本当に大丈夫か？」

「は、はい……大丈夫……です、もちろん！」

「嘘つけ……！」

「……！う、嘘じゃありません！私……」

俺は怒っていた。

「俺と由に謝って、買収の話なんとかして、今までありがとう……」  
「……！」

「あ」

「図星か？……お前は本当にバカだな」

「あう……」

涙を溜めて苦しそうにうつ向き有紗。

「ふ、藤村様！何て事を」

「レオナは黙ってる！」

レオナを一蹴し、有紗に向き直る。  
肩を掴み顔を上げさせる。

「……いいか……有紗……悪いけどな、そんな事絶対言わせないからな  
！」

「？………恭………ちゃん？」

俺を見た有紗の顔は涙で一杯だった、吹っ切れた様に見えた表情は  
涙が混ざると少しも吹っ切れていなかった。

「……させるかよ………まだお前は………有紗は………」

「……恭………ちゃん？」

「ゆーちゃん………苦しんでんじゃんかよ………」

有紗に負けなくらい俺の顔も涙で一杯だった。

「きよーちゃん……！」

目一杯だと思っていた有紗の涙がまた溢れてくる。

「……有紗さん…恭介の言う通りだよ？有紗さんおバカさんだね」

「桂さん…」

「でもね…私の方がバカなの……でね、恭介はもっともっとバカなの……だから有紗さんの言う事なんて聴かないよ」

「桂さん…」

「…品川さん…大丈夫…恭介なら大丈夫だから安心して？」

「…土屋さん…！」

周りを見ると、みんな笑顔で見守ってくれていた。

「よし、有紗…携帯あるか？」

「えっ？いや、今は持っていません」

「じゃあレオナ、お前の携帯…有紗の親父に繋がるか？」

「えっ？は、はい…大丈夫…です、繋がります」

「恭ちゃん？何を？」

「いや、お前の親父呼び出そうかなって……」

「「「はあ！？」」「」」

## 第二十七話

「はい、はい、突然に申し訳ありません、はい…はい、実は有紗お嬢様の…いえ、そうでは無くて…」

姿勢を正してぺこぺこ頭を何度も下げながら、電話口の向こうに恐縮しているレオナ……  
あゝイラっちい！

「貸してくれ！」

レオナの手から携帯を奪い取る。

「えー…こんにちは」

自分でも驚いている。

俺にしてはかなり大胆な行動をしている。

『……君は…誰ですか？』

有紗の親父の声だ。

何やらおどおどした様な声だ。

「俺は藤村恭介、有紗の…彼氏やってる」

自分で言っておいて、何を言っているのかと突っ込みたくなる。

『有紗の？……………そうか…それで…何用ですか？』

……………さして興味も無いと言った様な声色……………  
少し苛ついた……………

「……………電話じゃ駄目なんです、俺達の所に来てくれますか？」

『……………ずいぶん急ですね…申し訳無いが今は手が離せなくてね…  
後日にして頂けませんか？』

……………面倒をかわす様に受け流そうとする有紗の親父……………

「……………いや、有紗の為なんだけど、どうしても来て欲しいんすよ、ほ  
ら有紗の……………」

俺の声は怒りに奮える一歩手前だった。

『申し訳無い…大事な商談中なんだ、後日にして欲しい、どうしても  
もて言つなら他の者に行かせよう』

ブチッ

「……………いい加減にしろ！有紗のトラウマはアンタなんだよ！てめ  
えの娘が苦しんでんのに呑気な事言ってるじゃねえ！！」

『……………切らせてもらつよ……………』

「なっ！ちよつと待てよ！」

「貸せ」

ひょいっと携帯を引ったくられる。  
親父だった。

「あ〜品川有紗嬢のお父様でよろしいか？」

腰に手を当てて、宣言する様に高らかに言う親父。

みんな呆然としてしまった。

「お宅の娘は預かった、返してほしくばお父上一人で来られたし！」

「「「はあ!?!?!」」」

巻くし立てる様に食堂の住所を言ってから、あっさり通話を切る親父。

「ちちちちちよつとちよつとちよつと親父?さっき何て言いやがった!?!」

パニック状態の俺、多分回りのみんなも同じ状態だと思う。

「いや、お宅の娘は預かったって……」

「ち……ちよつと完全に誘拐じゃねえか!」

「そうだな、でも有紗ちゃんのお父さん呼びたかつたんだろ?」

「そ、そうだけど……下手したら警察沙汰じゃないかあ?」

「……ああでもしないと来てくれなそうだったからなあ……」

遠い目をしながら明後日に語り掛ける親父。

「……くっ！この親父は……」

「だああああ！うるさいね！何とかなるだろうさー！」

お袋が手を叩きながら、はいはい終りだよお！って感じで割り込んでくる。

だからいいのかつつうの！

「と、とにかく……親父……有紗の父親は来てくれそうだったのかよ……？」

警察沙汰はともかくそれも気になった。

「……来るだろうさ……大丈夫だ……」

……

自分で撒いた種だが感慨しく後悔してしまう。

「………恭ちゃん……」

有紗がよろよると俺の側に来る。

「……ごめんな……なんか大変な事になっちまった……」

ばつが悪くて彼女の顔が見れない。

「いえ…私は大丈夫です…こうなってしまった事に感謝している位です…」

「えっ？」

意外な発言に驚いて有紗を見やる。

にこやかに笑ってる。

「お父様をお呼びしたのは…理由があるんですよね？」

「……………」

そうだ…

さっきレオナの携帯から有紗の親父に繋いでもらう前……

誰一人として、俺の意図を探る様な事を言ってこなかった。驚いてはいたが俺に任せてくれた。

そうだよな……………

なるようになっちまったんだ……………

俺が後悔してどうする？

有紗の為にやれる事…

直感的に考えついた事だけど、さっき有紗の親父と話して確信出来た。

有紗を追い詰めた理由の一つは有紗の親父だ。

多分だけど有紗は品川になる前の頃の生活をとてても大事にしている。

俺、藤村食堂……父親もそうだろう。

「…ああ、とにかく任せてくれ」

「はい」

「じゃあアンタ達、有紗ちゃんのお父さんが来るまで店手伝いな！」

「えっ？」

「さっきからあたしも父ちゃんもお客さんほったらかしだったからね、みんな待ってんだよ！由と義人も手伝いな！」

「えー！ー！」

「だああ、うるさいね！学校さぼってる以上容赦しないよ！」

「あう…：そうだった…」

「しょうがないね、僕達も手伝おうよ」

どうやらみんなで手伝う事が決定してしまっただらしい。

「有紗は休んでていいぞ？」

有紗は多少元気になった様だが少しやつれている、無理はさせられない。

「い、いえ、私もお手伝い致します！」

泣きそうな顔で懇願してくる。

……………そう言うとは思っていた。

「わかった…………でも無理したらダメだよ？」

「はい！」

一転、笑顔を取り戻す有紗……  
やっぱり俺甘いなあ……

「よし、有紗は由と義人使って配膳仕切ってくれ、レオナ、俺と厨房入ってくれるか？」

「えっ？私もお手伝いしてもよろしいのですか？」

きよとんとしていたレオナが目を丸くして驚いている。

「ああ、レオナさえよければ手伝ってもらってもいいか？」

そう言う俺の隣で期待を込めた様な顔をしている有紗……  
わかってるって……レオナなら大丈夫だって……

「はい！私でよろしければお使い下さい！」

嬉しそうに言ってくれるレオナ、隣の有紗も目を輝かせて喜んで  
る。

「よし、さっきからの開店休業状態で帰ったお客が休憩ずらしてま  
た来るかもしれない、よろしく頼むよ」

超混雑時には休憩ずらして来てくれるお客達、今日もそうしてくれ  
る気がする。

「うわあゝ、そんなに一辺に注文しないでよ」

「いやいや、僕は恭ちゃんじゃないよ？お爺ちゃん？聴いてる？」

「はい、ご心配をお掛けしました…とりあえず今日だけなんです  
が戻って来ました…」

予想通りというか、やっぱり店は混雑時はずれた形でやってきた。  
厨房に聞こえてくる配膳のみんなの声が忙しそうに聞こえる。

「…嬉しそうですね…」

「えっ？」

隣で一緒に食器を洗うレオナが微笑みながら話し掛けてきた。

「お嬢様…嬉しそうで…とても楽しそうです…」

「…うん…レオナも嬉しい？」

「…はい、とても…」

優しい表情で微笑むレオナ、とても綺麗だと思った。

どうでもいい様な9月の平日…

普段なら何が有ったか忘れてしまうのが当然の様などうでもいい日

……

……

違った…

俺には今日という日がかげがえの無い日に思えて仕方がなかった。

いや……

かけがえの無い日にしなくちゃいけないんだ。

「はいはい、いらっしゃいませませ、本日限定看板娘の由ちやんが承りますます……ってあれっ？」

「由……違うみたいだよ……」

……

どうやら来たみたいだ……

「……お父様……」

「有紗……何をやっている……？」

「……あ……いえ……その……」

「……レオナ……任せた」

「……はい……よろしくお願いします……」

店の入り口付近で対峙する有紗と有紗の親父……

縮こまる有紗を威嚇する様に見下ろす有紗の親父……

苛々する……

「あゝいらつしゃいませ」

有紗を背中に隠す様に間に割り込む。

有紗の親父は特に驚いた様子では無く表情を変えない。

「アンタが有紗の父親ですか？」

「そうなります……君は有紗の彼氏さんかな……」

電話の時にも感じたが、何かとおどおどした様な雰囲気の人だ。何処にでも居そうなひよる長いサラリーマン風のおっさんだ。

「そうです、有紗の為にいくつか訊きたい事があるんです」

背中の有紗は俺の制服を掴んで俺越しに父親を覗き込んでいる。

脇には由と義人が黙って俺達を見守っていた。

周りのお客達も黙って俺達を見守っている。

「……ふむ……君達は有紗を誘拐したのですよね？……いや、保護してくれたと言っておきましょう……謝礼を」

ブチッ

頭の中で何かが切れた、本日二本目だ。

「アンタは知ってんだろが！有紗が精神病患ってんのも！有紗がここに居る訳も！アンタここを忘れちまったのか！？」

信じられなかった。

小さい時に有紗とここに来ていた人にはとても見えない、無感情で無神経で無頓着で人間としてとても気薄な人に思えた。

有紗の父親にはとても思えない。」

「覚えてますよ、有紗が小さい時によく一緒に食事をしに来ました、もちろん有紗の病気も有紗がここでアルバイトをしていた事も知っています」

ため息混じりに淡々と語る有紗の親父。

「 だったら……どうして……? 」

あまりに反応があっさり過ぎて、啖呵を切った俺が飲まれてしまった。

「有紗の事はレオナさんとアルベルトさん……それと専属医師に任せてあります、時間を掛けてしっかり治療すればちゃんと治りますよ」  
苦笑混じりに言う有紗の親父。

「アンタが! ……アンタが……決めんなよ……」

正直俺はぶち切れていた、でもこの人は俺の言う事なんてものともしない。

呆れるという前に自分の熱さに無意味さを覚えてしまう。

「……………恭ちゃん……………」

背中の有紗がすぎる様な声を掛けてくる。

「……………」

どうする？

今この人をどうかしないと有紗は一生救われない気がする。

自惚れでは無く、俺が一生側に居ないと有紗はダメになってしまう気がする。

それでも構わないけど、それは違うと思う。

「謝礼は払おう、有紗は連れて帰りますよ」

「ち、ちよつと待ってくれ！」

「申し訳ないが大事な商談に戻らなくてはなりません、失礼します  
「よ」

まずい、あれだけ大見得切っておいて、頭の中は真っ白になってしまった。

考える、考えないと……

「アンタ、馬鹿じゃねえの？」

俺じゃない誰かが話を割った。

## 第二十八話（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありません。

## 第二十八話

「断言するぜ、アンタ間違ってるぜ」

源さんだった。

さっきまで普通に日替わり定食食ってた源さんが箸を止めて有紗の父親に向き直っている。

意外な人物の介入に俺も有紗も絶句してしまった。

「事情は知らねえけど恭ちゃんの言いてえ事はなんとなく解んぜ、アンタてめえの娘追い詰めてちよっとおかしいぜ」

「失礼な…追い詰めているなどある筈がない、私は娘の為を思って言っているのだ」

煩わしそうな表情で反論する有紗の父親。

「だから間違ってるって言ってるんだよ、アンタの娘はアンタが怖えから恭ちゃんに隠れてんじゃねえか？」

背中の有紗が体を強張らせたのが伝わる。

「下らんな…世間に有りがちな思春期の異性への憧れと親への反抗期が重なっただけですね」

「な！違っただろ！そんな簡単な言い方で片付けんよ！」

「……そつだよ恭ちゃん、違うんだ、親がそんな事言っちゃいけない」

話を割った俺を制したのは徳さんだった。

「俺も源ちゃんと同じ意見だよ、有紗ちゃんのお父さんの言ってる事は間違ってるよ」

有紗の父親と向き合う源さんに並ぶ徳さん。

「アンタさつき言ってただろ？有紗ちゃんの事は人任せだつて…そんな事言っておいて世間がどうとか言っちゃいけないよ」

いつもちやらけている徳さん、真っ直ぐに有紗の父親に言い放つ。

その通りだと思う、有紗の父親がさつき言ってた事は有紗の事を想っているなら絶対に言えない筈だ。

「下世話が過ぎますよ、無関係な人間が人の家の事情に口出ししないで頂きたい」

さも下らないと言った様子の有紗の父親、この人は完全に自分と周りの人間を別に考えているのだと思った。

「無関係じゃないってばさ、有紗ちゃんはここの人なんだからね」

今度は永井さんだった。

「所詮はアルバイト、それに既に有紗は辞めている筈だ、無関係以外になんと言うか…」

鼻で笑う有紗の父親。

「そうじゃないってばさ、毎日顔合わせて、毎日飯の世話になってきたんだ、店のバイトだからって情もあれば恩もある、ましてや恭ちゃんだって絡んでりゃ尚更だってばね」

「永井さん……」

背中に居る有紗の小さな声、嬉しいんだろう…俺も同じ気持ちだ。

「いい加減にしてくれませんか？たかがアルバイトの有紗にそこまですで肩入れするのは理解為かねますよ」

「理解してもらおうって訳では無いんですよ、ただ恭ちゃんの話聞いてあげて下さいよ」

宮田さんだ。

嬉しかった、ただ昼飯食いに来ただけの常連達はみんな俺達の味方だった。

有紗の為とはいえ暴走気味だった俺に自信を与えてくれた。

「……………いいですよ、少し時間を掛けすぎたお陰で商談には間に合いませんからね……」

ため息混じりに肩をすくめる有紗の父親、どうやら諦めて話を聴いてくれる気になったらしい。

「……さあ、恭ちゃん……言ってやんな」

「ありがとう……みんな……有紗……いいよな？」

ずっと俺の背中に隠れたままの有紗に訊く。

「……はい……」

相変わらず俺の制服を掴み終始顔を伏せたままの有紗……

大丈夫……

どうなるのが俺が何とかしてやる……  
味方も居る……

よし……！

「さっきは失礼な事言っつてすいませんした、今言わないと一生後悔  
すると思っつて少し感情的になっつてしまいました……」

「……構いません……早く本題に入っつて下さい……」

話は聴いてくれるみたいだが煩わしそうな表情は変わっつていない。

「まず十年前…有紗とここに来てくれていた時に居た俺を覚えてくれていますか？」

「……ああ…記憶している…いつも一緒に食事もしていた…」

「はい、そうです…俺もちゃんと思い出したのはさっきなんです  
が…有紗は…違うんです…」

「……？どうい事ですか？」

「有紗にとってその十年前の記憶はかけがえの無いものなんです…  
…」

「…恭ちゃん…」

背中の有紗が俺の制服を強く握りしめてくる。

「有紗に再会して一月半…笑顔はたくさん見ました…でも…」

そっだ…

思えば俺が有紗に惹かれた一番の理由はこれだったのかもしれない

……

不安から救ってあげたかった……

優しくて綺麗な有紗と一緒に居たかった……

それもある……けど……

「あの時に俺が毎日楽しみにしていた、無邪気な笑顔は見えていないんです……」

思い出した今だから解る、俺は心のどこかで覚えていたのかもしれない……  
大好きだったゆーちゃんの笑顔を……

「……………」

静まり反っている。

背中に顔を伏せている有紗の体温が熱い……

泣いている……

「幸せそうに……有紗は笑ってたんです……きっと毎日が楽しくて……優しかったんだと思います……」

「……馬鹿な……あの時の私達の生活は地獄だった……貧しいばかりで楽しい優しいなど皆無だった筈だ……」

「違」

「 違います！お嬢様にとって品川の生活こそ地獄だったのかも  
しれません…」

俺の声を遮って荒げた様な声を上げたのは品川の屋敷で会った黒服  
じじいだった。

「…黒服じじい……どうしてここに？」

「アルベルト……」

「旦那様……話を割ってしまいまして申し訳ありません……恭ちや  
ん様……じじいは余計ですぞ？」

ジェントル全快で有紗の父親に向き合う黒服じじい。

「藤村様……私がアルベルトさんと呼んだんです……」

「レオナ……」

「実は午前の時にレオナさんから全て訊かせて頂きました……恭ちや  
ん様……私共が至らないばかりでご苦勞をおかけしました……」

やはりジェントル全快で俺に頭を下げる黒服じじい。

店のみんなも啞然としている。

「アルベルト……貴様先ほどの発言は聞き捨てられないぞ？」

明らかに苛ついた声を上げる有紗の父親。

「旦那様……失礼ですが私やレオナさんは旦那様よりお嬢様に接する機会が多くございました……心苦しいですがお優しいお嬢様の我慢なされたお姿ばかり思い起こされます……」

終始頭を下げたまま進言する黒服じじい。

「……たわけが！そうならない為に貴様達を付けておいたのではないか！」

「……違います……旦那様……」

「違うんだ！アンタじゃなきゃダメだったんだよ！有紗は変わったちまったアンタの事を嘆いていたんだ！」

別荘の時に見た有紗の悲痛な表情が蘇る。

「俺も知ってる優しい父親に戻って欲しかったんだ！」

「……何を……戯れ事を……有り得ないんだ……有紗は……苦しんでいたんだ……」

???

なんだ？少し様子がおかしい……

「有り得ん！戯れ事ばかり並べおって……！」

さっきまでの余裕な態度が感じられなくなっている。

「……お父様……」

不安そうな声の有紗……

「……はぁ……」

疲れた様なため息を吐き、嫌味に肩をすくめる有紗の父親……

？

「……まあいでしょう……ここは新都市化計画に飲まれる筈  
ですから……」

「……！」

そうだ……忘れていた……

新都市化計画……

「知っているみたいですね……市民に必要な高速道路です……拒否しよ  
うとしても市民団体による組合に圧力を掛けられてしまいかもしれ  
ませんが……」

「きたねえ！そんなの脅迫みたいなもんじゃねえか！」

「失礼ですね……市民団体の事実を述べただけです……」

「…恭ちゃん…今の話マジかよ？」

みんなも不安そうに表情を強張らせている。

背中の有紗はガタガタ震えている。

回り込ませて正面から抱き締める。

クソ……

「あ〜〜それなんだけど、ちょっといいか？」

呑気な声は親父だった。

「親父……何だよ？」

余裕の表情の親父、後ろに居るお袋も同じ表情だった。

「まあ待て、お〜い入って来ていいぞ〜」

？

店の入り口に声を掛ける親父…

「…こんにちは〜」

店の扉が開くと現れたのは武藤さんだった。

「えっ？武藤さん？」

「やあ恭ちゃん、社長も…って今は総帥だったね…」

「……武藤……」

有紗の親父も困惑気味だ、俺もこのタイミングで呼ばれた武藤さんに疑問しか無かった。

「……きよーちゃん……」

既に有紗は全員から身を隠す様に俺の胸で小さくなっている。

「……有紗ちゃん…悪かったね…俺…知らなかったんだよ、有紗ちゃん…  
やんがここを大好きなのも…都市計画を知っていたのも…」

俺の腕越しに有紗に語り掛ける武藤さん…

まるで小さな子供に話し掛ける様に優しい声だった。

「おじさんもね…ここの食堂が大好きなんだ…もう二十年くらい前から通ってるんだよ…」

「…えっ？」

俺も有紗も驚いていた。  
ずっと隠れていた有紗が少しだけ顔を出した。

「武藤君は父ちゃんの同級生なんだよ…父ちゃんが恭介みたいに店を手伝っていた時から付き合いらしいよ…さっき電話して来てもらったんだよ…」

「…そ…そうなんだ…」

お袋の補足に納得するが、頭が着いてこない。

「買収の話はもちろんあったね…でも俺はそんなの聞く気は全く無かったんだよ…夏の間は高速道路の迂回の詮索で大変だったけどね…」

「……………あ…」

有紗の小さくてかすれた声が洩れた。

「…だから大丈夫…有紗ちゃん…………俺は味方だよ？」

とても分かりやすく優しい一言だった。

上げていた顔を再び伏せる有紗…

「……………あ……………あう……………私……………何て事を……………」

散々武藤さんを嫌っていた有紗…激しい後悔の声を上げる。  
無理も無い、俺だって疑っていたくらいだ。

「いいんだって有紗ちゃん、俺も誤解が解けて良かった」

むせび泣く有紗に優しい顔で微笑む武藤さん…

「都市計画の話は前から聴いてたんだ…武藤は真っ先に俺に言ってくれたんだよ…そんな事させないってな…」

「…親父…」

「すまなかった…恭介にも伝えておけば良かった…」

俺と有紗に頭を下げる親父…

「武藤さん…おじ様…私……………ごめんなさい…ごめんなさい…」

涙でいっぱいの有紗…

「だからいいんだって…泣かないでくれよ…はは…困ったな…」

「武藤…貴様…」

「総帥…申し訳無いが新川町の買収の話は消滅しています、既に迂回路にて工事は着工段階まで進んでいます」

「…何という事を…」

大きく落胆した様子の有紗の父親。

「…覚悟は出ています、やるべき事は終わりました…悔いはありません…」

「武藤さん…」

「恭ちゃん…大丈夫…こうなってしまうのは解っていたんだ…俺の事はいいから…な？」

小さく頷いて、再び有紗の父親に向き直る。

胸の中の有紗は嗚咽を洩らしているが安堵と感謝と武藤さんへの謝罪の涙だろう。

「都市計画を知った有紗は一人で苦しんでいたんです…武藤さんが来店した時も買収交渉に来たと不安に飲まれていました…杞憂に

終わってくれたみたいですけど……」

「……………」

無言で有紗を見つめる有紗の父親……

「解って頂けましたか？有紗がここにすがっていた理由……」

「……………有紗……………」

威圧的だった表情が緩み、ひどく疲れた様に体を虚脱させている。

「解らんよ……………私はどうすればいいんだ……………解らない……………」

虚空に問掛ける様に呟く有紗の父親……

「千鶴……………美和子……………私は……………間違っていたのだろうか？……………」

それを聞いた有紗の嗚咽が止まった。

## 第二十九話（前書き）

貴重なご意見を頂く事が出来ましたので、エピソードも執筆したいと思います。

よって最終回は次回になります。

## 第二十九話

「……お母さん……お母様……」

「えっ？」

「千鶴は私を産んでくれた人……美和子は私を育ててくれた人です……」

感慨に耽る様に呟く有紗……

「千鶴の好きだったこの町を……美和子が作ろうとしたこの町を……有紗の為に住みやすい町にしたかったただけなんだ……」

有紗と同じ様に感慨に耽る様に呟く有紗の父親……

先ほどまでの貫禄は消え去り、情けない様にも見えたがとても優しい表情に思えた。

この人は間違っていない。

ただすれ違ってしまっただけ……

その優しい表情を見て……

そう思った……

「恭介：一度落ち着いた方がいい……テーブルを一つ使っていいから後は座って話せ……」

落胆し押し黙る有紗の父親を見て親父が提案した。

もちろん俺は賛成した。

そしてテーブルにみんなで座る。

俺と有紗が並び、有紗の父親と黒服じじいが並んで座る事になった。親父とお袋は厨房に引っ込み、由と義人とレオナは後ろのテーブルに座って見守っている。

常連達には感謝の言葉を預けて仕事に戻ってもらった…

時計を見ると午後三時前…

閑散としてしまった店内は寂しい沈黙で覆われていた。

座ってからしばらく経つが口を開く者は居なかった。

俺もさつき聴いた有紗の父親の言葉に対しての言葉を探しているが、はつきり言って解らなかった。

有紗の二人の母親には面識も無いし、ずれてはいたが父親の優しさにも触れた。

話を訊きたかった。

しかし質問するのも躊躇われた。

長い沈黙の中で繰り返される俺の思考は堂々巡りを繰り返していた。

………

「お嬢様は………心臓に疾患を持っておられます………」

長い沈黙を破ったのは黒服じじいだった。

沈黙の中に響いたその言葉に全員が息を飲む。

「アルベルト……」

苦渋の表情をじじいに向ける有紗の父親。

じじいも申し訳なさそうな暗い表情で応える。

「有紗……本当なのか？」

「いえ……わかりません……初めて……聴きました……」

さつき見た感慨しい表情のままの有紗、父親の事を考えているのか、母親達の事を考えているのか……

自分の事を言われたのにどこか上の空だ、それにつられてしまって俺も事の重大さに気付けなかった。

「旦那様……申し訳ありません……しかしこの事を話さなければ、旦那様や亡くなられた奥様が余りにもお可哀想です……」

???

どういう事だ？

「……アルベルト……すまん……私の口からは言えん……貴様が話

「してやってくれ……」

苦渋の表情のままうつ向いてしまふ有紗の父親……

「かしこまりました……お嬢様……これはとても大切なお話です……心してお訊き下さい……恭ちゃん様もどうかお訊き願います……」  
ジエントルな態度は相変わらずだが、少し躊躇いがちで寂しげだった。

「……恭ちゃん……私……怖いです……」

「有紗……大丈夫だ……俺も一緒に訊いてやる……」

膝の上に置かれた有紗の手を握る。

「……はい……」

「では、お話しします……有紗お嬢様は先天性の心臓疾患を患っておられます……お嬢様の実のお母様の千鶴様から受け継がれたご病気です……」

「……そんな……」

有紗の口から悲しげな声が洩れる。

「……千鶴様は……そのご病気が原因でお亡くなりになりました……」

「おい！ちょっと待て！有紗は大丈夫なのかよ！」

先天性だか疾患だか何だかよく解らないけど、尋常じゃないじじいの話に声を荒げてしまった。

「いえ、現在は医学の進歩に伴い、移植の必要も無く、投薬のみでの治療が可能です……」

「……………なん……………だよ……………びつくりさせんなよ……………」

俺の後ろからも安堵のため息が聞こえてくる。

「……………その新薬ですが開発されたのはごく最近でして、お嬢様が小学生の時にはいつ発作が来るかと毎日毎日が心配の尽きない日々でした……………当時この町には大きな病院も無く……………一番近い大病院に向かうにあたる時間も膨大でした……………」

目を伏せ言葉を切るじじい……

「亡くなる前の奥様はひどく気をもんでおられました……………町に病院が無い事に……………既存する病院への交通手段の無さに……………奥様は病院のある町への転居も考えた程です……………しかし……………」

「……………千鶴の遺した最後の願いが有紗をこの町で育てる事だったんだ……………」

うつつ向いたまま語る有紗の父親……

.....

.....俺はもう解ってしまった.....

この人の大きすぎる優しさも.....

既に居ない母親達の優しさも.....

「.....奥様は千鶴様の遺された言葉を受け止め、この町に残る決意をし、有紗お嬢様の為の町を作る決意をなされたのです.....心臓疾患の事を語る訳にもいかずがむしやらだったのでしょうか.....町には無かった大病院を作り.....専門の大病院へ通じる高速道路の計画を発案し.....逝かれてしまうまで.....有紗お嬢様の安心して暮らせる町を夢見ていました.....」

話を再び切るじじい。

なんて事だ.....

…新都市化計画……  
全て有紗の為の母親の愛だったんだ……

有紗の膝の上の手に重ねられた俺の手に雫が落ちる。

「……………うう……う……お母様……お母様あ………うあう………」

話を終えたじじいの代わりに有紗の泣き声が響く……

「…有紗…すまん…千鶴と美和子の遺した願いを想う余り…一番大切なお前の事を見失ってしまった様だ…私はこの町を変える事がお前の為になると思ひ違えてしまったのかもしれない………」

父親の言葉に激しく首を振る有紗…

きょと……

父親にとって千鶴さんの遺した言葉はかけがえの無いものだったんだらう……

有紗が十年前の思い出を大切に想う様に……

そして美和子さんも心から有紗を愛していたんだらう……

厳しく接していたのも、病気の事を隠し教育していくのには仕方がなかったのかもしれない……

そしてその優しさを絶やさぬ様に父親は必死だったに違いない……

「……うあああああああああ！」

俺の胸に飛び込んでくる有紗……

座ったまま抱き締める……

情けないけどそれしかできなかった。掛けてあげる言葉を知らなかった。

「……すまなかった……恭介君……」

「えっ？」

「……目が覚めた思いだよ……私では無く君に抱かれて泣く有紗を見て……自分で想うだけで無く、アルベルトの口から聞いて……私は間違いに気が付いたよ……」

憑き物が取れた様に穏やかな表情の有紗の父親。

「……十年前の記憶もそうだよ……有紗が病気で苦しんでいた辛い記憶だった……でもそれも間違い……辛い中にも優しい幸せはあった筈だ……」

違う……

「……間違いだったんでしょか？……俺には間違いには思えませんが……すれ違ってしまっただけだと思います……すれ違ってしまっただけの優しさが有紗に直接届いてほしかった……」

心から思う……

そんなに優しい人達に囲まれて居たのに……

悲しくすれ違っていただけなんて余りにも悲し過ぎる……

「ありがとう……恭介君……有紗が君に出会えて……本当に良かった……」

……

「……そうなんでしょうか……俺は優しい人達を疑ってばかりいました……有紗を追い詰めた連中を片っ端から修正してやるう……と  
か思っていました……」

そうだ……

有紗の為とはいえ、いろんな人達を巻き込んで、傷つけたりもした。

「……品川の人達はみんな間違ってるって……最初の頃はレオナすら疑ってた……でも違った……みんな本当に……本当に優しい人ばかりだったじゃないかあ……！」

その優しい人達に向けてしまった疑いが申し訳なくて辛い……

涙が溢れてきた。

「俺に有紗をこうしてあげる資格は無いんじゃないすかね……！」

自分の胸で泣く有紗を見ながら問う。

「馬鹿を言うんじゃない……君しか出来ない事だよ……」

懐かしく思える優しい表情で言ってくれる有紗の父親…

「そうですぞ…恭ちゃん様が居られなければ…お嬢様はどうなってしまった事か……」

やはりジェントルに微笑みながら言ってくれる黒服じじい…

「……藤村様だけがお嬢様の苦しみに気付いてあげられたのです…」

もう優しいお姉さんにしか見えないレオナが言ってくれる…

「…そうだよ、いつでもやる気の無かった恭介が好きになった人なんでしょう？自信を持ちなよ」

いつでも一緒に居た一番の友達の義人はいつもの口調で言ってくれる…

「…まったく…鈍感もここまで来ると才能だね…有紗さんには恭介しか居ないんだからね？…恭介しか…居ないんだよ…」

涙でいっぱいだけど精一杯の笑顔で言ってくれる由…

「…うう…うう…ごめん…ありがとう…みんな…うう…」

嬉しさとし訳なさの混ざった涙が胸で泣く有紗に溢れる。

「…グスツ…うう…」

「…きょーちゃん？」

「えっ？」

「きょーちゃん…泣かないで…？」

全然人の事を言えない表情の有紗が顔を上げて、俺の涙を掬ってくれた。

「……ゆーちゃん」

「「……………」」

お互いの顔を見て、二人してきよとんとしてしまう。

「ふふ」

「はは」

「「ふははははははは」」

二人して泣きながら笑い合ってしまった……

みんな唾然としている。

「ほら！さっきまでびーびー泣いてた癖になに大爆笑してんだい！」

「えっ？」

お袋がいつのまにか隣で仁王立ちしていた。

そう言うお袋の目にも涙の跡があった。

後ろの方からは親父のすすり泣く声が聞こえる…ちよっときもい。

どうやら話を聞いて感動したらしい…

「店が混む前にみんなで夕飯にしちゃいな！」

「はあ？」

何言ってるんだ？

お袋が妙な事を言っている。

「だああ！とにかくみんな夕飯にしようって言ってんだよ！ほら！出来てるから配膳手伝いな！」

「えっ？あ…ああ…」

「ごしごし涙を拭いながら厨房に行こうとすると有紗と目が合う。

……

「有紗、一緒にやろう」

「はい！」

目の前には物凄い量のおかず……  
宴会状態にテーブルを合体させて全員で向き合っている。

「私達も一緒にしてしまつてよろしかったのでしょうか？」

じじいが遠慮がちに問掛けてくる。  
隣にはもちろん有紗の父親も居る、かなり恐縮気味だ。

「アルベルトさん…食事はみんなです、ここのご飯を冷ましてしまうのは許されませんよ？」

にこやかに微笑みながら何処かで聞いた様な文句を言うレオナ。

「こんなに作ってしまいましたから、遠慮しないでください」

作った当人の親父、目は涙で腫れて真っ赤つかだ。  
お袋と一緒に同じテーブルに着いている。

「……藤村さん…奥さんも……本当に感謝しています……」

「いいんですよ、息子が勝手にやった事だし、もう一人の従業員も困ってましたから……」

「……はい……ありがとうございます……武藤にも後で感謝の言葉を送ります……」

「もうどうでもいいけど早く食べよう？まだ時間早いけど見てたらお腹空いてきちゃったよ」

言うまでもないが由だ。

「よし、じゃあいただきますだよ？」

可哀想な義人…これが最後の台詞だ。

「……いただきます……」

何やらすごい人数での夕食になってしまった。

見回して思う。

小汚くて狭っ 苦しい定食屋…

面倒くさかった だけの手伝いの日々が何処か優しい…

理由は簡単だ。

訪れる人がみんな優しいんだ。

ここに居るみんなも…

常連達も…

ありがとう…

「きよーちゃん」

「ん？」



全員固まって目が点になっている。

「ち、ちよつと〜！恭介！こんな時に何やってくれちゃってんの！  
きー！」

バシッバシッ

途端に半泣きになった由が手近にあったお盆でぶってくる。

「痛！痛！ちよつと！今のは俺がした訳じゃない！痛いってば！」

「有紗さん！」

「ふふ、ごめんなさい、懐かしくて…嬉しくて…気が付いたらしち  
やってみました」

笑顔で謝る有紗。

つられた様にみんなも笑いだす。

幸せそうな笑顔だった。

## ■最終話

あれから一ヶ月が経ちました。

まだまだ暖かいです、夏の余韻はもう薄らいでしまいました。

私にとって長い……

とても長い夏が終わりました……

暑くて……

楽しくて……

悲しくて……

優しかった夏が終わり……

季節は秋へと移り替わろうとしています……

私の心の傷もようやく癒えてきたのが実感出来てきた秋口……

秋晴れに恵まれた優しい陽気は私の心を弾ませてくれます。

「おはようございます、アルベルトさん」

「おお、これはお嬢様……おはようございます、本日もお美しゅうございます……ふむ……はて……？」

何時もの様にとっても紳士的な態度で朝のご挨拶をしてくれるアルベルトさん……

私のしている格好を見て首を傾げています。

「お嬢様……お仕事に行かれるにはまだまだお早いですが如何なされましたか？」

アルベルトさんの言葉の理由は私がエプロンを着て髪を結っているからです。

「お店に行くにはまだ早いのですが……えーと……暇なので……お掃除のお手伝いをしようかなと思ひまして」

引き込もっている時にはこの様な事は考え付かなかったのですが、今の私には自然な欲求でした。

私の為に優しくしてくれる人に応えたい…

私を包んでくれる優しさを私も返したい……

「うつむ…お嬢様にその様な事をさせる訳にはいきません………と…  
…言いたいところですが…ふむ…お願いしましよかな？」

あくまで紳士的に優しく、そして少しだけいたずらっぽく微笑みながら了承してくれるアルベルトさん…

とても嬉しく思いました。

この人は本当に私を安心させるのが上手です。

今までの私はアルベルトさんを少し苦手としていました…

お母様の幼少時から品川に仕え…お母様に一番身近な品川の使用人だったからです。

思えば何時でも私の為に優しく見守ってくれていた人でした…

………

「有紗様：そろそろお出掛けするお時間です」

お掃除をしている私に大好きな声が掛りました。

「レオナさん、解りました、ここのお掃除だけ終わらせてしまえますね」

「はい、ご一緒したいのでお手伝い致します」

優しく微笑みながら私のお掃除を手伝うレオナさん。

レオナさんと居るだけで心がぼかぼかしてしまいます。

優しくて綺麗な私のお姉さん…

敬う様な丁寧な言葉遣いは変わりませんが、それは私も同じ…

それに言葉遣いなんて関係ありません…

私とレオナさんはお互いに顔を合わせるだけで優しくなれる関係なのですから…

………

レオナさんと二人で藤村食堂に向かいます。

もちろん出勤する為です。

あの日の後、心を取り戻した私……  
精神科のお医者様の診察は今も続けていますが、もう必要無いと仰  
つて下さる位まで回復しています。  
心臓の病気もお薬を飲んでいけば、発病する心配は無いそうです。  
学校に戻る事も薦められましたが、復学は春から……という私の我が  
儘を通してしまいました。

我が儘のついでに食堂のアルバイトに復帰する事をお父様に了承し  
て頂きました。

「有紗、レオナさんも、藤村食堂に出勤かな？」

お父様です。

「はい、お父様もご出勤ですか？」

正直言ってしまうと余り似合っていないスーツ姿のお父様……  
あの日以来、お父様は屋敷によく帰って来て下さる様になってくれ  
ました。

「うむ、都市計画の会議……視察……まあいろいろだ……」

新都市化計画、あの日の後もお父様は毎日その計画のお仕事に費  
やしています。

お母様の遺された優しさ……  
お父様はその優しさを完成させたいと仰っていました。

でも、私だけの為ではありません、道路、病院、学校等この町の為

に……お母さんの為に……お母様の願いを叶えたいと仰っていました……

私はそんな優しいお父様が大好きです。

「頑張ってくださいね、お父様」

精一杯の笑顔を車に乗り込むお父様に贈ります。

「……う、うむ……有紗も頑張ってきたさい……レオナさんも有紗と頑張ってくるのだぞ」

真っ赤になって答えて下さるお父様、ちょっとかわいいです。

……

「お嬢！レオナ殿」

屋敷の敷地内で声を掛けられました。

近衛警備の柳沢さんです。

「あ、あ、あの……こ、こ、これを届けて頂きたく……！」

カクカクした動きで小さな封筒を渡してくる柳沢さん。

「……これは？」

「い、い、いや、その、つつつつつ土屋殿におおおお渡し願いたく……！」

殺気すら感じてしまう雰囲気の柳沢さん。

「義人さんにですか？」

「いかにも！」

殺気じみた雰囲気だけとお顔は真っ赤です。

「レオナ殿でも構いませぬ！」

「弟様ではないと誤解は解けた筈でしたよね？」

事情を知っているらしいレオナさん。

「違うのだ！もちろん解っている！それは、それは………こここ恋………文………し、失礼する………よよよよろしく頼むであります！」

風のような早さで駆けて行ってしまふ柳沢さん。

?????

渡された古風で小さな封筒を見ると『果たし状』と書いてありました。

義人さん……

恭ちゃんが一番のお友達です。

恭ちゃんに負けない位に優しい笑顔の男の子です。

でもその優しさの大半は由さんに向けられている事を私は知っています。

私がそう思ったのに気付いたのか、義人さんは言いました。

『…待つんだ……』

『えっ？』

『今はまだ……見守っていたいんだ……』

独り言の様に呟いた言葉はとても切なくて綺麗な言葉でした……

真っ直ぐな瞳を彼女に向けながら……決意の様にはつきりと言っていました……

.....

「オオ、プリンセスアリサ、ゴリヨー、オデカケデスカ？」

外壁警備のマイケルさんです。

「はい、ご苦労様です」

「オオ、オフタリトモベリーキュート！サンキュー！キヲツケテイ  
テラシヤイ」

かなりの片言のマイケルさん、外国人の方ですが日本生まれの日本  
育ちで海外での傭兵経験は二ヶ月らしいです。

「行つてきます」

「ユイニモヨロシクデスヨ」

由さん.....

私の一番のお友達です。

この前の日曜日には二人で遊びに行きました。

とにかく元気で一緒に居るだけで楽しくなっています。

本当に素敵な女の子です。

でも、あの日からの恭ちゃんを見る寂しい瞳は私の心を締め付けます……

由さんは言いました。

『有紗さんは優しいね』

『そんな事……無いです……』

『ううん、違うよ、有紗さんは優しいの……だからいっぱい……いっぱい我慢して来ちゃったの……』

『我慢……ですか？』

『うん……でももう大丈夫……恭介なら大丈夫……！いっぱい甘えて……いっぱい安心して？……ね？』

瞳を潤ませながら優しい笑顔を向けてくれた由さん……

この言葉は私を本当の意味で救ってくれた気がしました。

『……由さん……ありがとう……』

……

レオナさんとお店に続く道を歩いています。

足取りは軽く、自然に顔が綻んでしまいます。

「有紗様、ご機嫌ですね？」

そついうレオナさんもニコニコと嬉しそつに尋ねてきます。

「はい、ご機嫌です」

特に何かある訳ではありません。

でも毎日が優しく、暖かいです。

私を包む環境はこんなにも優しかったのです。

人も……

町も……

嫌いだった屋敷も……

煩わしかった品川の名前でさえも……

優しい……

お母様の優しさに包まれています。

「おはようございます」

レオナさんと一緒にお店の扉を開きます。

「有紗ちゃん、レオナちゃん、おはようねえ」

おば様とおじ様が優しい笑顔で迎えて下さいました。

早速レオナさんと開店準備を始めます。

実は今ではレオナさんもこの従業員の一人です。

すっかり過保護になってしまったお父様の要望で、レオナさんは私の護衛兼同僚として毎日一緒にお仕事をしています。

おば様達は私だけで大丈夫と仰っていましたが、レオナさんに会いたくてお店に来るお客様が後を絶たず、要望に応えると混雑率が上がってしまい、結果採用となりました。

お客様達に言わせると常にメイド服のレオナさんは『めいどもえ』のお客様達には堪らないらしいです。

それにレオナさんの様なマルチプレイヤー（恭ちゃんのように配膳と厨房両方をこなせる）はお店としても嬉しい存在の様です。  
皿洗いくらいしか出来ない私としてはちょっとだけ複雑です。

…レオナさんとお仕事出来るので、嬉しいのが大半ですけどね。

私の夏休みが始まったあの日……

絶望の淵からすがった私にとって最後のクモの糸……

その細く垂れ下がった一縷の望みは私にとっても大切な事を気付かせてくれました……

藤村食堂……

恭ちゃん……

私の見ている世界は変わっていない筈なのに、全てが光輝いていま  
す……

ありがとう……

私は今、幸せです。

「有紗ちゃん、もう表でお客さん待ってるみたいだからのれん出しちゃって」

「はい！」

夏休みの間は恭ちゃんのお仕事でしたが、最近では私のお仕事です。今日は平日、開店待ちをして下さるお客様がいらっしやるなんて今日も忙しくなりそうです。

恭ちゃんは学校…私が頑張らないといけません。

慣れてきた手付きでのれんを出して、お客様をお迎え入れます。いつもの常連さん達です。

私は心からの笑顔を添えて言います。

「いらっしゃいます」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3842c/>

---

定食屋の息子と深窓のお嬢さん

2010年10月9日04時38分発行